

MysPhilia

Vol.22

学園



埼玉大学推理小説研究会

MysPhilia

ミスフィリア

Vol.22

テーマ 「学園」

埼玉大学推理小説研究会

今年の MysPhilia のテーマは『学園』です。

今回、埼玉大学推理小説研究会では『学園』の定義を学園内で起きた事件を取り扱った作品と定義しています。

学園で巻き起こる事件には殺人事件や傷害事件のような犯罪もあれば、犯罪ではない日常の謎もあり、たくさんの作品で描かれています。

今からこの MysPhilia を読む皆さんも学園で過ごした日々があると思います。しかし、学園生活で事件に巻き込まれた人や、まして事件の謎を解いた人はなかなかいないのではないのでしょうか。ちょっとした謎があっても解けないままだったり、真相がわかってもらいたことがなかったり。事実は小説より奇なりという言葉がありますが、私にとっては小説の方が奇なのです。コロナ禍の今残りわずかな学園生活に謎は期待できそうにありません。学園や事件に関わる職につけばまだ可能性はあるかもしれませんが……。

皆さんも私たちと一緒に小説内で巻き起こる事件を楽しもうではありませんか。

2020年11月
埼玉大学推理小説研究会
第23期会長 長谷川綾音

目次

ある夏の、普通の事件 水世絃	…… 5
ブックレビュー テーマ『学園』	…… 14
××高校八不思議 月影星乃	…… 18
これから旅立つ君の背中を 若者	…… 48
赤川次郎『死者の学園祭』読書会レポート	…… 49
東川篤哉『放課後はミステリーとともに』 読書会レポート	…… 75
マスターの気まぐれコーヒー 月影星乃	…… 91

『ある夏の、普通の事件』

水世絃

*

大学に通うようになって早くも四ヶ月が経った。目の前には、二ヶ月間の夏休み。楽しみでないはずもなく、あれをしよう、これをしようという計画を考えているところだ。幼馴染の依岡誠と同じ大学に進学したため今でもつるんでいて、今年は二人でキャンブに行こうと計画を立てている。だが、お互いに異なる時間帯のバイトをしているため、実際に行けるかどうかはまだ未定である。予定は未定、とはよく言ったものだ。

「なあ、お前試験いつまで？」

混雑時間を過ぎた、ガラガラの学食で釜玉うどんを啜りながら誠が尋ねてきた。

「今日の午前中で終わり。あとレポートが一本あるけど、それも粗方終わってる」

外気温は三十五度を超えている。この暑さの中わざわざ温かいうどんを食べなくても、と俺は冷やし中華を啜る。

「さすがだな。オレは明日の午前中の一般教養で終わり」

「何の授業？」

「化学基礎。教科書の問題丸暗記の暗記ゲー」

俺は記号や物質名を覚えるのが苦手で、化学基礎などでできれば避けたい教科なのだが、暗記が得意な誠にとっては有利な教科なのだろう。

「そうか。ま、調子に乗って落とすなよ」

からかい調子で言っていると、誠はニヤリと笑った。
「大丈夫だって」

*

レポート一本を完成させたのが夜の九時。集中するために爆音で英ロックをかけていたイヤホンを耳から引っこ抜くと、大雨が降っていることに気づいた。雷も酷い。

「うわー、これやばいな……」

滅多に眩かない独り言。そうしてしまふほどの雨だった。と、突然雨足がものすごく強くなった。風もかなり強いらしく、窓に叩き付ける雨音が今まで聞いたことのないような音になっている。思わずスマホで隣の部屋に住む誠に電話をかけた。

「おい、大丈夫かよ？」

ワンコールで出た誠は乾いた笑い声を上げる。

『はは、何とか大丈夫だよ』

若干のおびえが感じられる声。幼い頃大雨で増水した川で溺れかけた経験のある誠は、大雨や雷の音が苦手だった。少しの雨ならまだしも、台風やゲリラ豪雨並みの音がダメらしい。

「何なら電話繋げといてもいいし、こっち来てもいいぞ」

冗談めかした口調で言うと、『や、オレ明日テストあるし。もう夏休みのお前とはまだ会いたくねえ』と訳のわからないことを言われ電話は切られた。

*

相当な雨だった名残が、大学に残っている。避難場所に指定されているはずなのに、入り口付近は大きな水溜まりで、加えて内部に少し浸水したらしい。玄関マットはびちゃびちゃになっていて、外に放り出されていた。これでいいのか、避難場所。

俺はというと、大学にある学部棟のレポートボックスに完成したレポートを出してきたのだ。ネット環境もそれなりに整っている大学なのだから、普通にオンラインで提出させればいいのに、と炎天下の中を歩きながら思った。

ひとまずボックスにレポートを投げ込み、さてどうしようかと腕時計を見る。時間は午前十一時半。少し早いがお昼ご飯にしよう。学食へ向かおうと学部棟を出ると、スマホが着信を知らせた。見ると、相手は誠だ。

「おう、テストやらかしたのか？」

軽口と共に電話に出ると。

『……佑樹。やばいもん見つけちゃった』

教授が死んでる、と言った誠の声は小さかったが、しっかりした声だった。

*

電話のあとすぐに誠の場所を聞き出し、俺がいた棟と向かい側の棟の三階、一番西側を目指す。棟の中央に位置するエレベーターを待つ余裕もなく、東端の階段を一段飛ばしで上る。

授業をやっている教室はぼっと見た感じない。廊下を全力で走り、

目的の部屋へと駆け込んだ。

ドアに「佐原研究室」と掛かっている。俺はまだ講義を受けたことはないが、確か経済学の先生だったか。

「どうした、誠！」

部屋に入ると、誠が立ち尽くしていた。床に誰かが倒れている。

「佐原先生が、死んでる……」

衝撃的な一言をぼつりと落とす。彼を押しのけると、佐原先生であろう人物が仰向けで倒れている。もう既に事切れていることがわかるような苦悶の表情を浮かべており、思わず目を背けてしまった。床には赤黒い液体が広がっていた。

「とりあえず、人を呼ぼう」

俺は誠と手分けし、事務室と警察に連絡した。

*

「えー、じゃあ第一発見者は君だね？」

「はい、経済学部一年の依岡誠です。先生にレポートを提出しに、この研究室に来ました」

俺と誠は、「佐原研究室」の近くの教室で警察に話を聞かれていた。

「なるほどね。で、返事がないのに部屋に入ったと？」

「その時間、先生は研究室にいるから必ず手渡しするように、と言われていたので。返事がないのはおかしいと思って、ドアを開けたんです。鍵は開いていましたよ」

俺たちの事情聴取をしているのは、木村さんという強面の男性刑事と、須藤さんという若手の刑事さんだった。二人組で捜査をする

のは、どこの警察も一緒らしい。

「で、君は？」

「人文学部の倉本佑樹です。僕は依岡に呼ばれて来ました。たまたまレポートを出しにきて、この向かいの棟のレポートボックスに提出したあと、電話に出たらやばいことが起きた、というので慌ててこの経済学部棟に来たんです。そこで、ご遺体を見つけました」

「君たちはどんな関係？」

須藤さんがメモを取りながら聞いてくる。部屋には四人しかいないのに、とても広い教室にいるから声が空しく響いているのがよくわかる。

「幼馴染です。同じ大学に進学したので、今でもよくつるんです」

気丈に答える誠だが、よく見ると顔色が悪い。それもそうだろう。

昼飯くらいは用意してやろう、と思った。

「なるほどね」

木村さんと須藤さんは二人でひそひそと話し始める。守秘義務とあるだろうから、詳しいことを話せないのはわかるが、目の前でやられると気分がよくない。

「もういいですか。だいたいお話したと思います」

席を立とうとすると、誠が止めてきた。

「待って。木村さん、須藤さん。先生の死亡推定時刻とか何かわかったんですか？」

何か聞こうというのか。高校のときにあった事件は、捜査陣に俺の兄がいたから何とかなったが、さすがに今回は教えてくれないだろう。あくまで俺たちは一般市民なのだから。

「おい、誠！」

止めに入る俺と、驚いた顔で俺たちを見る二人。

「知ってどうする？」

「犯人を見つけます。佐原先生には、とてもお世話になっていたの
で」

少し震えた声で言い切る誠。初めて聞いたが、誠が仲良くなったと言っていた先生は佐原のことだったのか。

「……」

木村さんが盛大に溜め息を吐き、須藤さんはその横であたふたしている。

しばらく無言が続いた。誠は木村さんをじっと見据えたまま。

「……わかった。気が向いたら教えてやるよ」

先に根負けしたのは木村さんで、結局その約束は最後まで守られないことになった。

*

事件が起きてから二日後。すなわち、夏休みが本格的に始まって二日経った。レポートとか試験とかはもう終わっていて、あとは成績が発表されるのを待つばかり、となるはずだったが、俺たちは未だに佐原先生の事件が気にかかっている、遊びにでかけていない。昨日大学に向いた誠が、刑事さんたちから情報をかっさらってきたようで、なぜか俺の部屋でまとめている。隣に住んでいて、事情を知っているから来やすいのかもしれないが、時間が十時半だ。叩き起こされた俺は、もう少し寝ていたかった、と悲しくなる。

「うーん、だいたいこんなもんか」

テーブルに置いた白い紙に何やら書いている誠。

「何だ？」

冷蔵庫から出した冷え冷えの麦茶をコップに注ぎ、テーブルに二人分並べる。そして、俺も誠の向かい側に腰を下ろした。立派なテーブルではないので、床に涼しげなラグを敷いて、その上に直に座っている。お尻が少し痛い気もするが、まあいいだろう。

「被害者は、佐原卓、五十二歳。経済学部の教授。研究室で殺されていた。死因は撲殺で、凶器は自分の著書『経済学の全て』。厚さが五〇センチある、ハードカバーの本らしい」

「うわ、まじ？ そんな厚い本書いてんのか……」

全てと銘打つ本なのだから、まあそうか、と妙な納得をする。あんなに血が出ていたのだから、それこそ大理石の灰皿とかそんなもんが凶器かと思っていた。

「で、他の情報は？」

麦茶を飲みつつ先を促すと、誠は紙をぐい、と差し出してきた。まどめると、こんな感じだった。

・死亡推定時刻は七月三十一日の夜十時から深夜二時。
・ここ数年研究成果が業界で大きく取り上げられており、注目されている人物であった。
・妻は同じ大学の同期だった。近所のスーパーでパート勤務。DVを受けていた、という近所の噂がある。
・息子は十九歳。一言で言えばグレている。金髪で、ピアスを六ヶ所くらい開けている。第三志望の大学に通っており、そのことを佐原に責められていたという。

「へえ。なるほど」

「その奥さんも、容疑者に含まれているらしい」

さらっと教えてくれた誠は、裏面も読むように、と言う。裏面には、仕事関連の容疑者が挙げられているらしい。

「えー、まずは一人目。宮本司郎。四十八歳で、佐原の助手。最近あまり論文を発表していないらしく、他の研究者から心配されていた。来年度、他大学からヘッドハントの話が来ている。妻子あり」

文章をそのまま読み上げると、そこに付け足しが入った。
「奥さんはバリキャリらしいよ。年収一千万とかそんな会社に勤めてるらしい」

「……それどこから情報得てんの？」

「ん？ 須藤さん。仲良くなったからさ」

平然と言つてのける誠が、俺は少し怖くなった……。

「さすがだな、誠……」

仲良くなるのが早すぎると思うのだが。

「まあね。あと一人、土屋さんっているでしょ？」

「先生の助手してるっていう院生か」

誠は土屋さんの情報を次のようにまとめた。

年齢は二十三。佐原の研究室にいる院生で、期待の新人として学会誌でもよく論文を取り上げられている才女。佐原からセクハラされてきた、という噂がある――。

「へえ、どうやってこの四人に絞られたんだ？」

「先生のスマホに残ってたメールとか発信履歴とかから、その人たちが割り出されたらしいよ。奥さんと息子さんはメールで呼び出さ

れて、宮本先生と土屋さんは、八月三日に行くはずだった学会の準備で大学に缶詰だったとか」

学会の準備で泊まり込みか。なんとまあ、大変な。試験よりも大変かもしれない。

「で、一応位置関係の確認ね。佐原先生の研究室は棟の一番西側にあって、反対の東側には階段がある。あの棟はその階段か、中央部分のエレベーターでしか上り下りできない。で、防犯カメラは、その階段と各階のエレベーターの出入り口のところにつけられてる。

そのカメラの映像で確認したら、事件当日に先生の部屋に向かったのが、奥さんと宮本先生、土屋さんの三人だったらしい。だけど、」

誠は一旦、そこで言葉を切った。コップの麦茶をぐいっと飲み干す。俺は冷蔵庫から麦茶のポットを持ってきて、テーブルにドンと置いた。誠はありがとう、というとおかわりを注ぎ、またごくごくと飲む。俺もつられて一口飲んだ。

「そのあと、みんながいつ出て行ったのかわからないんだ」

「わからない？」

「そう。昨日の大雨で停電が起きて、防犯カメラの映像が切れてしまった。停電が起きたのが午後九時五十分。復旧したのは午前三時七分。死亡推定時刻がびったり当てはまるってことで、その間に教授の研究室に入った三人が容疑者になったってことみたい」

へえ、停電か……。停電なんてあったか？ 大学までそんなに遠いわけでもないのに、俺の部屋では停電なんてしなかったような気がする……。

「停電なんてあったか？ 俺、普通に九時半とか起きてたと思うけど」

「だよ、やっぱそう思うよねえ。オレもそう思ったんだけどさ。なんか雷で配電盤みたいなものがイカれて、大学全体で停電が起きたらしいよ」

「なんか、狙ったような停電だな」

タイミングがよすぎないか？ と思う。殺人が起きた夜に停電が起きるなんて、偶然にしちやできがよすぎる。

「あれ、三人？ 息子さんも、奥さんと同じようにメールで呼び出されてたんだよね？ なのに、研究室に入ったのは三人だったのか？」

容疑者として四人の名前が上がったのに、最後に三人に絞り込まれている。ピアスの息子はどうしたのだ。

「よく考えろよ、お前」

誠が呆れたように深い溜め息を吐いた。

「息子さんは、教授に大学落ちたことを散々責められてたんだぜ？」

息子さんも反発してグレてる」

誠は人差し指を俺にピツと突きつけてくる。

「メールでその父親に呼び出されて、素直に行くと思うか？」

……確かにその通りだな。

「じゃあ、大学の防犯カメラに姿は映ってなかったんだな？」

「そう。少なくとも、奥さん、宮本さん、土屋さんの入った時間より前には映っていなかった」

「停電のあとに研究室に入った可能性は？」

もし停電した直後に研究室に入ったのであれば、教授を殴り殺すことは可能はず……。

「それがさ、いわゆるアリバイってやつがあったわけ」

誠は肩をすくめた。外国人めいた仕草が、妙に似合っている。続いてスマホを取り出して、追加情報を加える。

「アリバイ？」

「そ。あの大雨の中クラブに仲間たちと繰り出して、仲間たちからの証言も、店員からの証言も不自然な点はなかったってさ。加えて、店の防犯カメラにもはつきりと姿が映っていたらしい。家に帰ったのは次の日の朝六時以降。家の前の道にある防犯カメラにも、その時間に息子さんが家に入っていくのがバッチリ撮られてたって、須藤さんからついさつき連絡来てた」

アリバイか——。

お互い無言になった時間を狙ったように、コップの中の氷が溶けて、カランと涼しげな音を立てた。

「……逆にできすぎな気がしてくるけどな、その感じ」

停電といい、息子さんの行動といい、まるで犯罪が起きることを知っていたみたいだな。

「息子さんがクラブで遊んでるのは、いつものことだったらしいよ。大学に入っただけでそういうオトモダチとつるみ始めて、ほぼ毎晩出掛けてるって」

そこで、別の疑問が浮かぶ。

「そんな金持ってるの？」

クラブの相場など知らないが、普通に遊ぶより何倍も掛かりそうなことは想像できる。

「それなー。オレも思った。お小遣いか、はたまたヤバイバイトでもしてんのかねえ」

さすがにそこまでは知らないらしい誠が、腕を伸ばして伸びをし

た。話は終わったようである。そして、ここで彼らしい一言。

「ま、ひとまず飯食おうぜ。オレお腹ぺこぺこなんだけど」

自分から突撃してきて昼飯をたかろうとしてくる。自炊が苦手なのは知っているので、俺は溜め息をついて腰を上げた。

「炒飯か、焼きそばか、ジャージャー麺か。どれがいい？」

冷蔵庫の中を光の速さで確認した俺は素早く扉を閉めて、すぐに作れそうなものを挙げた。

「んー？ ジャージャー麺なんて作れるの？」

誠を見ると、テーブルの上に突っ伏すようにベタッと身体を倒している。テーブルが冷たいからだろうか。

「麺茹でて、付属のタレかけるだけのやつよ。それでもいいなら」

じゃそれで！ と満面の笑みを浮かべるヤツ。俺はまた深い溜め息を吐いた……。

麺を茹でる湯を沸かしている間に、付け合わせのゆで卵をちやちやっと小鍋で作り、そしてそれが終わったら冷凍のほうれん草をレンジでチン。あとネギを刻んで、トッピングの準備は終わりだ。

「オレ、やることないよね？」

「お前は手を出すな」

苦手というか、誠がキッチンに立つと惨状になるのだ。何をどうやったらそうなるのかわからないほど、酷い有り様になる。なので、誠には俺の部屋のキッチン（というのもおこがましいほど狭い調理スペース）には立ち入るな、と言いついてあるのだ。

「じゃ、大人しく待ってるよ」

スマホを取り出して、必死スクロールしている様は、傍から見ると意外と滑稽だ。

なんて考えているうちに湯が沸いた。麺をほぐしながら入れて、四分半。わりと細めの麺が好きで俺にもちょうどいい太さの麺だ。

タイマーをセットし、器を用意する。本当はチンゲンサイのほうが映えるよな、と思いつつ買うのもめんどいのでいつも冷凍ほうれん草だ。ゆで卵も出来たので、流水で流しつつ殻を取り、半分にカットしておいた。狙った通りの半熟具合。

茹で上がった麺をざるに取って水気を切ったら、器に盛って、ほうれん草、卵、ネギをのつけてタレをかければジャージャー麺のできあがり！

「お待たせ」

麦茶とジャージャー麺でお昼にする。うむ、いい感じのゆで加減だ。卵も完璧。タレはもう少し辛くても美味しいかなあ、と思っっていると。

「なあ、ラー油ある？」

誠が申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「だよな」

食べ物の好みは合う。というわけで、俺たちはラー油をちよい足しし、ベストな辛さになったジャージャー麺を平らげた――。

さて、と誠は言った。昼飯を終え、しばしの雑談。テレビの昼番組を冷やかし、天気予報の最高気温に嘆き、デザートにと棒アイスを食べたところで、事件の話に戻った。

「教授の奥さんが大学に来た理由は、服と夜食を届けるためだったらしい。正門にある警備室のおじさんも、彼女が来たことを知って

いた。ただ、何時に帰ったのかは知らないらしい。警備員はそのとき、配電盤を確認しに出ていて、帰宅する彼女を見ていない。まあ、これまでも帰りは声かけられないこともあったそうだから、彼女が黙って出て行くことに別に疑問も持たなかったそうだ」

「随分遅くに奥さん呼び出すんだな。当日は雨も相当降っていただろうに」

「これまでも深夜に呼び出されることが多かったそうだ。家が大学から徒歩五分の豪邸で、俺の金で食わせてやってんだらうって電話で脅して持つてこさせるとか」

うわあ、何とまあ。引いたのが顔に出たのか、誠も俺を見て眉間にシワを寄せてウンウンと頷く。

「オレはすごいいい先生だと思っただけだよ。やっぱウラの顔ってあるもんだよなあ」

誰にでもあるだろ、ウラの顔。他人に見せられない顔つてのが。

心の中で呟く。俺にだってあるのかもしれない。

「お前もあるよな、ウラの顔」

人のことを指差して、ヤツは断言する。

「何だよ」

「お前、オレ以外の前じゃ結構マトモなやつみたいな猫被ってるけど、わりとヤバイやつだよな。この前なんて、好きな作家のサイン会当たって思いっきり叫んでたもんな」

「やめろ、そのことを思い出させるな！」

好きな小説家のサイン会にダメ元で応募したら、偶然当選してしまったのだ。サイン会自体はもちろんだが、先生に会えることに嬉しくなってしまう、時間も場所もわきまえず、この部屋で叫んでし

まった。それを、誠は未だにいじってくる。

「いつ？」

「一週間後。この事件解決してから行きたいけどな」

気がかりなことを残していきたくない。できればすつきりとした晴れやかな気持ちで先生にお会いしたい。

「それもそうだねえ」

しばし口を開かず、麦茶を飲んだり無意味に窓から空を眺めたりする。真つ青な空に白い雲がのんびりと浮かんでいる。人間の行いなど、何も興味はなさそうだ。

「で、宮本さんと土屋さんは？ 泊まり込みだったんだっけ？」

話を戻そう。黙っていても事件は進まないかもしれない。まあ、俺たちが動かなくても警察が動いているのだから、あんな場面を見てしまった以上、気になって仕方がないのだ。

「そう。何か、二人に関してもなかなか刺激的な話があったさ」

誠はまた表情を曇らせる。

「二人の研究成果を、横取りしてたっていうんだ」

「は？」

「佐原先生、ここ数年論文とか著書が目ざされてたわけよ。それが、宮本さんとか土屋さんの研究成果を、横取りしてたって……」

それは一番やつちやいけないことだろ、と言いかけたのを飲み込んだ。言わなくても誠はすでに落ち込んでいるから。

「オレ何見てたんだろうねえ」

それが本当なのかはわからないが、火のない所に煙は立たないという言葉もあるくらいだから、黒に近いのかもしれない。

「というわけで、三人にはそれぞれ動機になりそうなものがあるっ

てことよ」

誠はそんな言葉で締めくくった。ここから考えるのは、誰に犯行が可能だったか、ということか。

「正直そこから考えるのは無理な話な気がする。凶器も、普通に研究室に置いてあった本なわけだろ。三人のうちの誰なのか、何か証拠でもあれば話は変わるだろうけど」

これまで聞いた話では、特に気になった点はなかった。犯人に繋がりそうなこともなかったように思う。

「俺たちが考えても仕方ないのかね」

「さあ、どうだろうなあ」

誠はぼうっと天井を見上げる。

「誰か一人が犯人なのか、三人が共犯なのか……。どっちもありそう」

俺はそれに答えられるほど、この事件に詳しくはないのだ……。

*

それから三日後の夕方、誠から連絡が来た。

結論は、三人の共犯。研究室に頻繁に呼ばれていた奥さんと、宮本さん、土屋さんは顔見知りだった。あの雨の日に呼ばれた奥さんは、暴力を振るわれそうになって自己防衛のために本を手にとった。教授は当たり所が悪く気を失った。そのとき、物音に驚いた宮本さんと土屋さんが研究室に現れ、救急車を呼ぶでもなく、トドメに一人ずつ殴り、教授は死に至ったという。

「後味の悪い事件だったな……」

『ああ、その通り……』

電話の向こうで、誠が黙り込むのがわかった。教授に懂れて学部を決めたと入学のときに言っていた誠にとつてみれば、大きなショックを受けているだろう。

「なあ、今夜暇か？ 一緒に飯食おうぜ」

何でもないように、誠を誘ってみた。自分の部屋の窓から外を見ると、黒い雲が遠くに見えた。もうそろそろ雨が降ってくるかもしれない。あの日みたいなの、雨が。

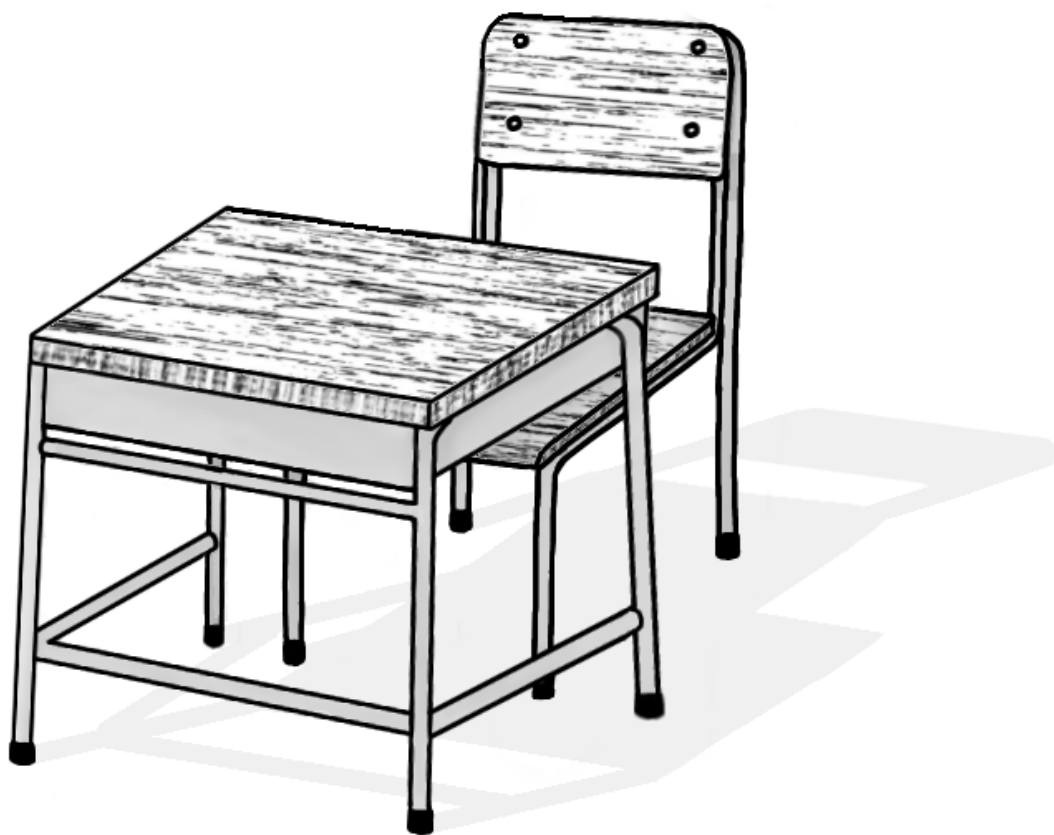
『……現実なんて、そんなものか。——高校のときの事件が、異常だっただけだよな』

ぼつりと零した誠。今どこにいるのかと聞いたら、大学にいるらしい。早く帰って来いよ、雨降るぞ、と言って電話を切った。

大雨になるかもしれないと朝、テレビで天気予報士が言っていたのを思い出す。少しでも気が紛れればいいな、と思い、誠の気が晴れるようなメニュー、好物はあれだよな、よし作ってやろう、と俺は冷蔵庫を覗きにいった——。

ブックレビュー

学園



『学園祭前夜 青春ミステリーアンソロジー』

村崎友、五十嵐貴久、近藤史恵、三羽省吾、はやみねかおる

M F 文庫・二〇一〇年十月初版発行

皆さん、学園祭の思い出はありますか？

僕は高校のときの文化祭が一番の思い出です。生徒会に入っていたこともあり、様々な催し物に裏方として参加しました。あの文化祭前日の、ソワソワした、バタバタした、そんな時間が大好きでした。当日よりも準備のほうが楽しかったくらいです。

さて、そんな学園祭前夜をテーマとした作品を集めた本が、この『学園祭前夜』です。豪華作家陣によるアンソロジーで、五つの短編が収録されています。

村崎友 「デイキシー、ワンダー、それからローズ」

五十嵐貴久 「謎のベージスト」

近藤史恵 「降霊会」

三羽省吾 「夢で逢えたら」

はやみねかおる 「後夜祭で、つかまえて」

どの作品も爽やかで、ザ・青春！といった雰囲気を感じられませんが、中でも特に好きな作品は「謎のベージスト」です。高校で僕自身がバンドを組んでいたこともあり、主人公に共感できました。ストーリーは、主人公・林の組むバンドに転校生のベージスト・木島が入るところから始まります。そして、林の中で木島への小さな「あれ？」が積み重なっていきます。自由な校風で、私服で登校し

てもいい学校に転校してきたのに、木島がいつも制服を着ているのはなぜか？ 林たちからの銭湯への誘いを頑なに拒む理由は？ そんな謎が、文化祭当日、ライブの舞台上ですりりと解けるのです。ライブをする楽しさを知っている身からすると、ライブだけでも楽しいのにさらに謎まで解けてしまったら、それはもう快感だろうなあ、と思う次第です。

他の作品もすらすらと読める作品ばかりで、学園祭の楽しさを思い出させるようなものばかりでした。学園祭特有の、あの不思議な楽しさに浸りたい方、そして青春を感じたい方、ぜひご一読ください。

(文責・市木頼)

『化石少女』 麻耶雄嵩

徳間書店・二〇一四年十一月初版発行

良家のご子息、ご息女が多く通う京都の名門学校、私立ベルム学園はクラブ活動が盛んであるがその分過疎部問題が深刻であり、古生物以外は少しポンコツ気味な赤点(美)少女まりあとその幼馴染み兼従僕(?)の彰の二人しか部員がない古生物部もその例外ではなかった。さらに廃部を決定する今期の生徒会は、まりあの家庭が属する派閥とは対立関係にあり、古生物部は不利な立場であった。古生物部存続のためにまりあが文化祭の出し物の制作に奮闘していたある日、部室に置いてあったシーラカンスのかぶり物を被った人物による凶悪な殺人事件が起こった。廃部の危機を脱するために

まりあは犯人捜しに乗り出すが、そのあまりに無茶苦茶過ぎる推理に彰は呆れてしまう。

その後も学園内では次々と殺人事件が巻き起こり、謎を解こうとするまりあに彰は振り回されていく。果たして一連の事件の犯人は――、古生物部の行く末は――、そして彰の将来は――。

仮にも名門学校であるはずなのに大丈夫なのかと少し不安になるくらいに殺人事件が頻発するが、それを忘れてしまうほど小気味よいテンポで物語が進行していく。かなり読みやすいので、ぜひ気軽に手にとってほしい作品である。

(文責：吉田しおり)

『クドリヤフカの順番』

米澤穂信

角川文庫・二〇〇八年五月初版発行

本作は『古典部』シリーズの第三作であり、二〇一二年に放送されたアニメ『氷菓』でも取り上げられている。『古典部』シリーズとは何事にも積極的には関わろうとしない省エネ少年折木奉太郎が日常に潜む謎を解き明かしていく青春日常ミステリのシリーズである。

文化祭が始まったが、古典部では文集「氷菓」を作りすぎてしまった問題が、また学内では奇妙な連続盗難事件が起きていた。知名度をあげて文集の完売を目標に盛り上がる仲間たちに後押しされて奉太郎は事件解決に乗り出した。

語り部が奉太郎だけではなく登場人物四人の視点で「期待」をテ

ーマに個性豊かな物語が語られつつも、一つの事件を追いかけていく。連続盗難事件に関するミステリ要素以外にもクイズ大会やお料理対決など文化祭ならではの青春も楽しむことができる作品である。どのように事件の謎が解かれ、どのような結末を迎えるのか。果たして「氷菓」は全て売れるのか。だんだん内容が気になってきたことでしょうか。人が死なないミステリということで手に取りやすいと思う。

今回は第三作を紹介したが第一作である『氷菓』から読んでいたきたい。アニメを見た方でも楽しめること間違いなし。

(文責：加納亜夜)

『そして誰もいなくなる』

今邑彩

中央公論新社・一九九六年十一月初版発行

とある名門女子校の式典で、演劇部が『そして誰もいなくなった』の舞台を上演することになった。しかしその最中、服毒死する役の生徒が実際に青酸化合物を飲んで死亡してしまった。舞台は中断されたが、その後も部員たちが『そして誰もいなくなった』の筋書き通りの順序と手順で次々に殺されていく。相次ぐ殺人を止めるため、部長の江島小雪は顧問の向坂典子とともに姿なき犯人に立ち向かうが……。

この作品はタイトルからわかる通り、かの有名なアガサ・クリステイ著『そして誰もいなくなった』をオマージュした作品である。

学園で劇の上演中、大勢の観客の目の前で殺人が起きるといふシヨ

ツキングな導入から、息もつかせぬ展開が続いていく。登場人物たちも始めは小説のような見立て殺人が現代の日本で起こるはずがないと高をくくるが、事件は終わらない。次に狙われるのが誰なのかわかっていても防げず、捜査関係者を嘲笑うように大胆に行われる巧妙な殺人は本作の見所である。ちなみに元ネタである『そして誰もいなくなった』を知っている人にはわかると思うが、殺人の順番や方法だけではなく「被害者たちの何かしらの容疑を告発する」という展開もすっかり織り込まれている。また本作では物語の視点が次々に変わるうえ、それが誰の視点なのか明示されないことも多い。したがって私たち読み手には知り得ない情報が多く、最後の最後まで目が離せないストーリーとなっている。一連の事件の謎が解けた後になって初めて姿を現す真の物語とはどんなものなのか。是非この本を手にとって、自分の目で確かめてみて欲しい。

(文責：山上菜摘)

『何様ですか?』 枝松螢

宝島社文庫・二〇一六年七月初版発行

この作品は第十四回『このミステリーがすごい!』大賞最終候補に選ばれた『病の終わり、もしくは続き』を改題、加筆修正し発表された「隠し玉」である。先に述べておくがこの本の解説には散々「行儀の良さを捨てた」だとか「良くも悪くも容赦がな」く「大量の害意が練り込まれている」と書かれており、人を選ぶ作品であることは明確である。

本著を選んだ経緯を少しお話させてもらおうと、恥ずかしながら学園ミステリーと聞いてパツと挙げられるものが無く、本棚を探っていてこれなら一応当てはまるのではないかとという本が辛うじて一冊あった、という次第である。しかし本著はいわゆる「学園もの」と呼ばれる爽やかな青春を描いた作品とも、スクールカーストを扱う暗めの作品とも違い、あらゆるところに泥をぶちまけるような痛快さと胸くその悪さがある。そのためレビューを書くかできれば迷っていたのだが、毛色の違うものが一冊位入っていても許されるだろうと思いき直しご紹介することにした。

本著は三人の高校生の視点で書かれている。一人目は中学時代に義父から暴行を受けていた、人間嫌いの美少女。虐待により死んだ弟を神格化し、その弟と共に大量殺人計画を企てる。二人目はそんな少女に片思いする無口でおとなしい同級生。三人目は明るく誰にでも分け隔てなく接するクラスのマドンナ的存在。少女は周りのクラスメイトを内面で嘲笑いながら計画の詳細を詰めていく。

三つの視点が妙に生々しいため多くの方が気分を害されるだろうが、それらは全て物語終盤まで取っておいていただきたい。この作品のポイントは何と言ってもラストのインパクトの強さだが、全体を通して読み返してみると所々に皮肉や悪意がちりばめられており、改めて作者のエネルギーに感心した。タイトルからして挑発的な本著ではあるが、それが誰に向けられたものなのか、そして自分の場合はどうか考えさせられた。最後まで読み切った時、皆さんも一度考えてみてはいかがだろうか。「何様ですか?」と。

(文責：苔蛙)

『××高校八不思議』

月影星乃

一つ、二階廊下に現れるテケテケ。

二つ、家庭科室の冷蔵庫に閉じ込められた男の子。

三つ、三階の女子トイレにいるトイレの花子さん。

四つ、最後まで演奏を聞いた人間を喰うピアノ。

五つ、四時四十四分、霊が映る四階視聴覚室のテレビ。

六つ、四時四十四分、異世界と繋がる鏡。

「——七つ、屋上にいる昔投身自殺した女子生徒の霊」

「へえ、やっぱり私のときと結構変わってるんだ。昔の七つ目は『七つ目を知ったら死ぬ』だったわよ。適当よねえ」

私の眼前に突き出してきた生首がそう言ってクスクスと笑った。何かを期待するように輝くその目を無視して、私は冷たく答えた。

「そりゃあ、七つ目は四谷さんが死んだからできたんだろうし。あと、気持ち悪いから首から下も出してくれない？」

「もう、冷たいなあ。初めて会ったときはあんなに驚いてくれたじゃない。ギャーおばけー、って。あの時の菊乃ちゃんはおかわいかったのに……」

私を驚かせたかったらしい生首こと四谷さんは、私の反応を見てがっかりしたように肩を落とした。

「今更驚くわけないじゃん」

「今はかわいくない！」

そう言って頬を膨らませた四谷さんは胴体を出すと、私を両手でばかばか叩く仕草をした。全て私の体をすり抜けていったが。

四谷千鶴は幽霊である。四十年前にここから飛び降りたのに、未だにこの屋上に囚われたままの哀れな幽霊だ。

長いスカートのセーラー服に……聖子ちゃんカットだっけ、特徴的なボブの巻き髪。昔の流行には詳しくないが、生前はかなりのオシャレ女子だったとみえる。私の着ているブレザー制服にもたいそう興味津々だった。私とは正反対の人種だ。こういう、いかにもクラスの中心人物ですって子、本来ならあんまり関わりたくないんだけども。

何で自殺したのかは知らない。別に興味もない。

私が彼女に会ったのは一か月前の夜のこと。私は屋上で、こいつに驚かされ、不覚にも情けない悲鳴を上げて驚いてしまったのだ。

「初対面の人間を驚かせて楽しむなんて悪趣味だよな」

「だって、いつもは暇なんだから。夜に人が来ることってあんまりないから、生きた人間がくるとテンション上がっちゃって」

そう言って四谷さんは右目を閉じた。顔の左半分が潰れているため分からないが、恐らくウインクをしたのだと思われる。

お手本のような驚き方をした私を気に入ったのか、それで降何故か懐かれてしまい、私と四谷さんはこうして毎夜語らう仲となったわけだ。何故夜なのかというと、四谷さんが完全夜型幽霊、つまり日が出ている間は消えてしまうからである。平気で日光を浴びる幽霊もいるというのに、いったい何が違うのだろうか。

「七不思議なんて今時流行らないからね。肝試しに来る人もそりゃ少ないでしょ」

「困るなあ。語り継いでくれる人がいないと、私たちは存在してられないのに。人間たちには頑張って広めてもらわないと、だわ」

四谷さんは熱弁しながら拳を握りしめた。よく分からないがそういうものらしい。

と思うと、あつ、と言つていきなり顔を上げた。せわしない奴だ。

「そうだ、人間といえは。あの事件はまだ解決してないみたいね？」

「ああ、あれね。まだみたいよ」

四谷さんがいきなり事件の話始めたので、私は少々面食らった。事件、というのはあれのことだろう。夜中に肝試しに来た学生達が行方不明、一人は死体となって発見。連日の捜査にも関わらず、あまり進展はないようだ。あの事件の話は何となく私たちの間では避けていたのだが、こういう風向きの変化だろうか。

「ねえねえ菊乃ちゃん、私たちが犯人を当ててみない？」

……また突拍子もないことを。四谷さんがおかしなことを言い出すのはいつものことだけれど、今回は中々妙な提案である。

「いや、当てたところでどうするつもりなの。というか、四谷さんは犯人知ってるんじゃないの」

屋上の幽霊、と呼ばれてはいるが、彼女は学校内ならどこへでも移動できる。事件の時だつて見ていたのではないのか、と思つたのだが、四谷さんは首を振つた。

「私が見たときはあの子はもう死んでたわよ。ええと、誰だったかしら」

「小泉」

「そうそう、小泉くんね。私はずっと屋上にいたから、犯人は知らないわよ」

「本当かねえ。あ、四谷さんが犯人だつたりして——いや、物に触れないから無理か」

小泉の死因は胸を包丁で一突き、というものだった。四谷さんは昔ながらの透けている幽霊なので、包丁を握ったりはできない。霊力で物を浮かせたりもできないはずだ。もしできるなら嬉々として私にみせびらかしているだろうから。

「触れないわけじゃないんだけどね。ほら」

ところが私の予想に反して、四谷さんは貯水槽の蓋をひよいと開けた。そんな簡単に開くものなんだ、それ。それとも幽霊には鍵とか重量とか関係ないのだろうか。

「は？ さっきすり抜けてたじゃん。というか早く閉めてよ、嫌がらせ？」

「そういうわけじゃないよお。ごめんね」

にこにこしながら四谷さんが蓋を閉めた。まったく反省の色が見えないが、これもいつものことだ。

「普段はすり抜けちゃうんだけど、触りたいなーって思うと触れるの。まあ屋上に元々あるもの限定だから、包丁は無理ね」

「うーん、微妙な能力……」

四十年も幽霊をやっているくせに大したことのない力だ。屋上にあるものなんてたかが知れている。貯水槽にアンテナ、電気設備ぐらい……あれ、電気設備？

「もしかして、たまに学校中の電気が消えるの、四谷さんのせい？」

私は四谷さんを睨んだ。屋上の電気設備にはメインブレーカーのスイッチがあつたはずだ。うちの学校は全てのブレーカーが落ちる事件が時々起こり、その度に業者を呼んでは異常なしと言われていたらしい。そういうえばアンテナが折れたり貯水槽から水が漏れたらという話も聞いたことがある。全部こいつのせいか。

「そんなに睨まないでよ、ちよつとしたイタズラじゃない。ブレーカー落とすとみんな大慌てだから楽しくて、たまにやりたくなくなっちゃうのよね。あ、言っとくけど事件の日は、ブレーカーには何もしてないわよ——他二つはともかく、ね。視聴覚室の子が動けなくなっちゃうから」

「他ねえ」

私は貯水槽を横目で見た。好奇心で学校の設備を破壊しないでほしい。

「というか、視聴覚室の奴ってブレーカー落としたら出てこれないんだ。雑魚じゃん。」

そんなことを考えている私に、四谷さんは目をきらきらさせながら屋上のドアを指さして言った。

「そんなことより殺人事件よ、殺人事件！ まずはテケテケちゃんに会いに行きましょう。さあ、七不思議探偵団、しゅっぱーっ！」

「は？ いや、私は犯人捜しをするとは一言も——」

勝手にアンタの暇つぶしに巻き込まないでくれ、と思ったが四谷さんはすでに消えていた。ちくしよう足の速いやつめ、足無いくせに。

仕方がないので急いで追いかける。テケテケが出るのは……二階廊下だったかな。



「七不思議？」

「そう、小泉も聞いたことあるだろ」

友人はそういつてにやりと笑った。この顔は何かるくでもないことを企んでいる顔だ。僕は警戒して顔を顰めた。

「まさか、実際に見に行きたいっていうんじゃないだろうな」

「よく分かってんじゃない、その通りだよ。もちろんお前も」

「行かないよ」

僕はびしやりと断った。思った通りだ。こういう無鉄砲なところはこいつの悪いところである。良いところでもあるが。

この後の展開もおおかた予想がつく。僕がため息をつく、彼は思ったとおり駄々をこね始めた。

「えー、いいだろー。頼むよ、一生のお願い」

「君の一生は何回あるんだ」

そう言つて睨んでみたが、彼は負けじと見詰め返してきた。しばらくそうした後、僕はもう一度深いため息をついて言った。

「……分かったよ」

「よっしゃー！」

ほらやつぱり。こうして毎回僕が折れるのだ。小泉くんはアイツに甘いよね、とは別の友人の言である。

「せつかくだし女子も誘おう」

そう言つてうきうきしながら去っていく後ろ姿を見送りながら、僕はどやどやって夜中に家を抜け出そうか頭を絞ることにした。



「遅いよ菊乃ちゃん！」

二階廊下に着いた途端、足元から四谷さんの非難が飛んできた。

声のした方を見ると、四谷さんが床板から上半身だけ出してこちらに手を振っていた。体の一部を埋めるのがよほど好きだとみえる。

「ごめんって。それより何で半分埋まつてんの？」

「こうしないとテケテケちゃんと視線が合わないじゃない。話を聞くのに見下ろすなんて失礼でしょ。ほら菊乃ちゃんも」

四谷さんは当然だという風に手招きしてきた。勘弁してほしい。

「嫌ですけど」

「あんたのペースに付き合わせちゃ可哀想だよ。いいよそのまま」

私が速攻で断ると、テケテケがため息をついて四谷さんを宥めてくれた。

我が校の七不思議その一、テケテケ。彼女は下半身が切断されており、両手で這って高速で人間を追いかけて殺す、という都市伝説である。諸説あるが、この学校におけるテケテケの生い立ちには以下の通りだ。

雪国で電車で轢かれ上半身と下半身が切断された女子高生が、寒さにより止血されて、しばらくの間助けを求めていた。しかし、もう死ぬだろうと思った駅員にブルーシートをかけられ、そのまま死んでしまった。彼女は自分を見捨てた人間を恨んで、この話を聞いた人間を殺して回っている――。

なぜ雪国で死んだ奴が西日本の太平洋側にある我が県にいるのかは謎だが、とにかくこういう話である。

この見た目で普通に意思疎通や会話をしているのはかなりシュールな光景だが、考えてみれば思考と発声に下半身は関係ないので当然かもしれない。

「それで、あの殺人事件の話だったけ？」

「そうそう。あれってテケテケちゃんがやったの？」

四谷さんがフレンドリーにテケテケに尋ねている。四谷さんは七不思議では新人にもかかわらず、他の七不思議ととも仲がいいらしい。私がこうして普通に七不思議と話しているのも、本意ながら私が四谷さんのお気に入りだからである。あいにく私に化け物と仲良くお話しする趣味はないので、完全にありがた迷惑だが。

「違うよ。大体私が包丁で刺すなんて真似できるわけじゃないでしょ」

「それはそうねえ」

四谷さんの問いかけをテケテケは即座に否定した。確かに彼女には無理だろう。包丁を持ってしまったら片手が塞がって追いかけるれなくなってしまう。口にくわえれば不可能ではないだろうが、そもそも素手で蹂躪できるのにそんな回りくどい方法を使う理由はないだろう。

「あの死んだ子……小泉くんだった。彼が階段の上にいるのが見えたら待ち構えてたんだけど、全然降りてきてくれなくてさあ」

「そりや堂々といたら降りてくるわけじゃないでしょ。隠れて待つとかなよ」

「確かに、思いつかなかった。次からそうしよう」

私のアドバイスにテケテケは本気で感心したようだ。せっかく脳みそが残っているのだから、それくらいは自分で思いついてほしかった。

「それではしばらく私たちは睨み合ってたの。丸一日はそのままだった気もするけど、時計を見てた感じ、実際は時間ぐらいたったかな。その時急に小泉くんが……じ、地獄に、って言いかけ……ああ怖い！」

突然テケテケの声が震え出したかと思うと、絶叫してのたうち回り始めた。私は少し後ずさりする。今のお前の方が怖いよ。

テケテケに引いていると、四谷さんが私の耳に顔を寄せて囁いてきた。

「テケテケちゃんね、『地獄に帰れ』って言われると倒されちゃうの。多分、小泉くんはそれを思い出して言おうとしたんだと思うわ」

「へえ、案外弱いんだ」

それはいいことを聞いた。私がこのテケテケに襲われることはないだろうが、一応覚えておこう。

心のノートに書き留めていると、いつの間にか立ち直ったテケテケが話を再開した。

「そ、それで言い終わる前に急いで反対側まで逃げて、しばらくじっとしてたわけよ。そしたらすぐに、うわーって悲鳴と、どんって音が聞こえてたからさ、今度こそ襲えると思つてスキップで向かったら死んでたんだよ？　こんなのつてないよ」

スキップ……想像しようとしたが気味が悪いのでやめた。

テケテケはとても悔しそうにバランスを崩しながら拳で床を叩いている。嘘ではなさそうだ。

「他の人間はいなかったわけ？」

「いたら襲つてるよ。それでどうしようか迷つてたら——」

「私が悲鳴を聞きつけて野次馬しに來たのよね。死体はたまに見るけど、殺人現場は初めて見たからわくわくしたわ」

「わくわく……」

悪趣味である。屋上設備の件といい、四谷さんは完全に悪霊だと思ふ。この学校に呼ぶべきなのは修理工ではなくお祓いだろう。

四谷さんは私の生温い視線を無視して、うーん、と言いながら首をひねった。

「証拠とかないのかしら。菊乃ちゃん、何か知らない？」

「うーん、証拠ねえ」

証拠か。そういえば、警察の人の会話を盗み聞きしたな。確か、鑑識の人が凶器の包丁について話していたのだ。私はその時のことを思い出しながら話した。

「ええとね、小泉に刺さってた包丁は家庭科室のものらしいよ。あと、指紋が小泉と浅井のしかないとか何とか。だから、もしかしたら浅井が疑われてるのかも」

浅井は私のクラスメイトであり、事件の時に行方不明になった生徒の一人だ。もし浅井が疑われているのだとしても、彼自身が行方不明なのだから警察も困っているのかもしれない。

しかし、警察は七不思議たちが本場に存在することを知らないのだ。浅井が小泉を殺した後に、七不思議のどれかによって浅井も殺されるか何かした、というのが案外真相ではないだろうか。

「でも、浅井くんの指紋があつたから浅井くんが犯人というのは、いくらなんでも短絡的すぎよね」

そう思っていたら、四谷さんが私の考えを虚仮にしてきた。四谷さんのくせにえらく慎重なことを言いやがって、むかつくな。

「それにしても、よりによつて家庭科室の包丁か。あそこも七不思議あるよね。そういえば最近会つてないなあ」

ふと、テケテケが思い出したように言った。

七不思議の二つ目、今は使われていない家庭科室の冷蔵庫に閉じ込められている男の子。家庭科室の怪談って珍しい気がする。

かくれんぼで冷蔵庫に隠れたが、誰にも見つけてもらえなくて、今でも探しに来るのを待っている——らしい。冷蔵庫を開いて彼を見つけてしまったら、『見つかったちゃった。今度は僕が鬼ね』として代わりに閉じ込められる、とかなんとか。冷蔵庫って内側から開められるのかな。入ったことがないから分からないけど。

「それだ！」

テケテケの言葉を聞いた四谷さんは、突然そう叫んで床からゆつと全身を現した。私は思わず仰け反る。

「今すぐ家庭科室の冷蔵庫くんに聞きにいこう。じゃあねテケテケちゃん」

四谷さんはテケテケにぶんぶんと手を振り、それから来た方と反対側へ素早くすうつと移動していった。

「若いっていいね」

それを見送るテケテケが大真面目な顔で言った。死んだ歳は同じぐらいじゃないのか。

「菊乃ちゃんはやくー」

真つ暗な廊下の向こうから四谷さんの大声が聞こえた。どうやらまだまだ彼女に付き合われるらしい。私は大きくため息をつくつと、声のした方へ向かった。



「じゃあ、俺たちは家庭科室から見えていこう」

校門の前で少しひと悶着あったが、二時過ぎに僕たちは校内に侵入した。

こちらを何度も振り返りながら階段を上っていく出淵さんを見送る。それを見て、隣で友人が不思議そうに首をひねった。

「しかし、あんなに嫌がるとは思わなかったな。最初誘った時は気前よくオッケーしてくれたのに」

それは君に誘われたからだと思うぞ。そう思ったが黙っておいた。浅井と一緒にいられると思っただけから怖くても承諾したんだろうに、別行動にされるなんてなかなか可哀想だ。

「それより、行くなら早く行こう」

僕は彼を急かした。早いとこ済ませて帰らないと、夜中に家を抜け出したのがばれてしまう。僕の両親はものすごく早起きなのだ。

「ああ、そうだな。あ、二階にはテケテケもいるんだっけ。お前、倒し方知ってる？」

「いや、知らない」

僕が首を振ると、友人は秘密の話をするように小声になって言った。

「じゃあ、もし遭遇した時のために覚えとけよ。テケテケってさ、『地獄に落ちろ』って言ったら逃げるらしいぞ」

「そうか、覚えとくよ」

今、声小さくする意味あったかな、と思いつつ僕が頷くと、彼は自信に満ちた表情で笑った。

「まあ、出てきても俺が追い払ってやるけどな！」

「ふうん、そりゃあ頼もしいね」

「だろ。よし、じゃあ行こうか」

僕におだてられて気をよくしたらしい友人は、そのまま堂々とした足取りで二階へ上っていった。それに続いて、僕も階段に足をか

けた。



家庭科室は二階の一番西側にある。中に入ると、部屋の隅にある件の古い冷蔵庫の前で四谷さんが立ち尽くしていた。

「どうしよう……透けちゃってるから開けれないわ」

そういうええそうだった。なんとも不都合な体である。お得意の通り抜けて首だけ中に入るのはだめなのだろうか。

「開けてあげるよ」

「うわっ！……ついてきてたの」

突然後ろから話しかけられたのでびっくりして振り向くと、満足そうにニタニタ笑うテケテケがいた。私を驚かせられたのがよほど嬉しかったらしい。

テケテケはふらふらしながら左手一本で立ち、右手で冷蔵庫の扉を開けてくれた。見た目の割に面倒見のいい奴である。

「見つかつちゃ——つてうわあ！」

開いた扉の向こうで、冷蔵庫で体育座りをした男の子が悲鳴を上げた。下半身の無い女が突然目の前に現れたのだから、この反応も当然かもしれない。

テケテケは一日に二人も驚かせたことでもご満悦らしく、口裂け女もかくや、というほどの笑顔を浮かべている。

「びっくりした……なんだ、お仲間か。やっと代われると思って期待したのに」

ため息をついた男の子の顔を見て、私は本日二度目の悲鳴を披露

することとなった。

「あ、浅井！」

「うん？ あれ、播州？」

やっぱり浅井だった。こんなところにいたとは。警察も流石に冷蔵庫の中までは探さなかったのだろうか。

意外な再会に動揺していると、四谷さんが私の顔をのぞき込んできた。

「菊乃ちゃん、知り合いなの？」

「うん、同じクラスだった。というか、ここにいてるってことは浅井、肝試しの時に冷蔵庫開けちゃったわけ？」

私が聞くと、浅井は不貞腐れた顔で答えた。

「ご想像の通りだよ。こう、ガッて手を掴まれてさ。めちやくちや冷たかった」

冷蔵庫の男の子を見つけると代わられる、という話だったがどうやら本当だったらしい。冷蔵庫の中にずっと閉じ込められていたにもかかわらず、こうして平気で話せているということは、浅井もめでたく怪異の仲間入りを果たしたのだろう。お気の毒に。私は心の中でそっと手を合わせ、それから気を取り直して尋ねた。

「私たち、その夜の殺人事件について調べてるの」

「殺人？」

事件という私の言葉に浅井は一瞬ぼかんとして私を凝視したが、すぐに納得したらしくああ、と言って腕組みをした。

「小泉は無事？」

「小泉は殺されてたよ。出淵さんは行方不明。一緒に行動してたんでしょ、なにか知らない？」

私は浅井に尋ねた。出淵さんも肝試しに参加して行方不明になった生徒の一人だ。ものすごい怖がりなのに、浅井に言いくるめられて頭数に加えられてしまったらしい。

「ああそっか、あいつも駄目だったかあ」

浅井はぼつりと呟いて俯いてしまった。彼なりに思うところはあろうのだが、今は彼の感傷に付き合っている暇はない。私は浅井を急かした。

「いいから、あの日のことをさっさと話して」

「ああ、ごめんな。ええとね、俺らは丑三つ時——午前二時に学校に集まっただろ。そこで出淵がやつぱり行きたくないって言うから、しばらく説得する羽目になったけど。なんとか説得して男女で別れたあと、俺ら二人は家庭科室に向かうことにした。それで、家庭科室の入り口まで一緒にいたんだよ。でも小泉がすっかりビビってたから、俺だけ家庭科室に入ったんだ。そしたらこのザマだよ——あつ、また取れた」

不意に浅井の腕が冷蔵庫のドアにぶつかり、そのままポロツと落ちた。浅井が慌ててそれを拾い切断面に押し付けると、腕は元通りくっついた。私は切断面を見ないようにそっと目を逸らした。

「冷やしてるとはいえやつぱり腐るみたいでさあ」

「大変そうね。私は幽霊でよかったわ、腐ったりしないもの」

四谷さんが酷いことを満面の笑顔で言った。幽霊でいる時間が長すぎて人の心を忘れてしまったらしい。

「いいな、俺も下手に実体があるより幽霊が良かったなあ」

浅井の方も呑気な声でそんなことを言っている。もしかして、怪異になると感情が麻痺するのが普通だったりするのだろうか。

「話を戻すけど、その後小泉たちがどうしたかは……さすがに分らないよねえ」

「うーん、そうだなあ。小泉たちは心配だったけど、あいつら誰もスマホ持ってきてなかったから連絡の取りようがなくてさ。まあ俺のスマホも充電切れでどうせ使えなかったんだけど」

何で充電してない上にモバイルバッテリーの一つも持ってこなかったのだ。私はスマホを持ったことがないので、彼に文句を言える立場ではないが。

「すまほ？」

四谷さんが訝しげに言った。そうか、コイツの時代にスマホは無いもんね。

「なんというか……電話機能付きの小さいパソコン、みたいな。タッチ操作で色々できるんだよ」

「へえ、なんだかすごいね。私の時代でいうポケベルみたいな立ち位置かしら」

「まあ、連絡手段という意味ではそう、かな？」

私の拙い説明で、四谷さんは一応納得してくれたらしい。ポケベルとか伝説上の存在だと思ってたわ。

「あ、そうだ。本当に行ったかは分からないけど、次は視聴覚室に行こうって話はしてたよ。ここに着いたのが四時三十分だったからさ」

「腕時計でもしてたの？ それとも『すまほ』？」

「いや、スマホは充電切れたら時間確認できないんだよ。そうじゃなくて、あそこに時計掛かっているだろ。あれ」

浅井が指さした方を見ると、確かに入り口から見える位置に時計

が掛かっている。

「そっか。ああでも、浅井の前に冷蔵庫にいた奴が浅井の代わりに出てきたなら、小泉はたぶん逃げたよね。そこで逃げ切れずに殺されたとか？ あれ、でも小泉は正面から刺されてたな。逃げてたなら背中とかじゃないの」

包丁に浅井の指紋があつた件も、偽浅井が持つていたなら納得だ。あれ、でも小泉の指紋もあつたんだっけ。私が考えていると、四谷さんが首を振って言った。

「冷蔵庫くんは、入れ替わつた相手の姿や声をそっくりそのまま真似して外に出るのよ。だから小泉くんは気が付かなかつたんじゃないかな」

「そうなんだ。次に冷蔵庫を開ける人が良い声のイケメンだといいなあ」

「ということは、小泉は家庭科室から出てきた偽浅井に気づかず刺されてしまったと」

馬鹿なことを抜かしている浅井を無視して話を進める。なるほど、それなら正面から刺されていた件も解決する。

これにて一件落着、よかつたよかつた。と思っていいたら、今まで黙っていたテケテケが口を挟んできた。

「え、おかしくない？ 浅井くんは行方不明になつてるんでしょ。もし菊乃ちゃんの言つた通りなら、偽浅井くんがいるから生還扱いになつてははずじゃないの？」

「……確かに」

せつかく探偵ごっこが終わつたと思つたのに余計なことを、と思つたが正論である。偽浅井はどこにいったのだろう。包丁を持ち出

したのは偽浅井か、それとも小泉か。なんだか、話を聞きたびに謎が増えている気がする。面倒なことになつてきたな。

「残りの七不思議にも話を聞かないわね。あと残つてるのは花子さんとピアノ、視聴覚室、あと鏡かな。どこから行く？」

四谷さんに聞かれて私は時計を見た。現在時刻は四時一〇分。視聴覚室の霊が出るのは四時四十四分だから、ここは最後に回していだらう。鏡も四時四十四分だけ……まあ、鏡は喋れないし行かなくてもいいか。

音楽室と花子さんのいるトイレはどちらも三階だ。西階段からだとトイレの方が近いかな。

「花子さんでいいんじゃない。浅井も来る？」

「俺は次のイケメンが来るまで冷蔵庫から動かないよ。ここ、結構居心地いいんだ。今は真夏だし最高の環境だよ」

なんとなく浅井も誘つてみたが、そういえば動けないんだつた。それにしても、こんな調子では一生冷蔵庫から出られないかもしれない。

浅井はにこやかな顔をしていたが、不意にあつ、と言つて笑みを引つ込めた。

「ああ、でも冬は寒く感じるのかな。それはちよつと嫌だなあ。ずつと夏がいいな」

「勘弁してよ、私は夏嫌いなんだから」
即座に否定した私を見て、浅井は不思議そうな顔をした。

「あれ、前は夏が一番好きつて言つてなかつたっけ。日が長いからつて」

「——浅井は悩みがなさそうでもいいね」

デリカシーのない奴だ。私が皮肉を込めて言うのと、浅井は不服そうに言い返してきた。

「失礼だなあ。俺にだって悩みくらいあるよ」

「例えば？」

そう聞くと、浅井は声を低くして内緒話をするように言った。

「……最近、どこから視線を感じる気がしてさ。もしかしてお化けかも」

「いや、お化けがお化けに怯えてどうすんの」

テケテケが即座にツッコミを入れたのに対し、私は咄嗟に口を出した。

「それは別にいいでしょ。人間だって人間の視線に怯えるしさ」

「そうそう。播州も分かってくれるか。なんか気になるんだよなあ」

別に浅井の味方になったつもりはないのだが、嬉しそうにこちらを見てきたので黙っておいた。

「ううん……私たちは怪異仲間がいれば分かるんだけど、私が見た限り誰もいないわね。もし何かいたとしても、人や物に影響を与えられるような存在ではないと思うわ」

「つまり四谷さん以下の雑魚ってこと？」

「そうなるわね。そもそも気のせいかもしれないし。だから心配する必要はないわよ、浅井くん」

四谷さんは私の揶揄に真面目な顔で頷き、浅井を安心させるように言った。テケテケも頷いているし、私も同じく誰の気配も感じないので、方便ではなく事実なのだろう。

浅井はまだ納得していないようで、何か言おうと口を開きかけた。しかし、悪いが今は浅井にばかり構っているわけにはいかな

い。私は強引に話を切り上げることにした。

「はい、お悩み解決おめでとう。さて、そろそろ行こうか。あ、テケテケはどうする？」

「え、ちよっと待って」

「私は二階から出られないから無理だよ。じゃあねえ」

浅井はもう放っておくとして、テケテケはどうやら来られないらしく、そう言い残して高速で家庭科室を出て行ってしまった。パワ―要員として中々心強かったのだが残念だ。

「じゃあ菊乃ちゃん、行こう行こう」

四谷さんはそう言って天井に消えていった。階段を使わずに済むのだから、つくづく幽体というのは便利なものだ。

「はいはい」

お気楽そうで何よりだ、と思いつながら付いていこうとしたが、背後から浅井が、なあ、と呼び掛けてきた。

「あの子って屋上の幽霊だろ。ああいう能天気ない子ちゃんタイプ、お前とは合わなさそうなのに以外だな」

何を言い出すかと思えば、何も知らないくせに能天気呼ばわりとはどういう了見なのだ。

「何か気に入られてるみたいだから付き合っただけだよ。」

あと、確かに一見脳内お花畑だけど、ああ見えてアイツも割と考えてるみたいだし、あとそこまでいい子ちゃんではない。今日あったばっかの浅井には分かんないかもしれないけどさあ」

私が努めて冷静に言い返すと、浅井はニヤニヤと性格の悪そうな笑みを浮かべた。

「そうムキになるなよ。というか逆だろ。お前って結構めんどくさ

いのな」

「は？ 何が逆なわけ」

不服の意を込めて睨んでみたが、彼は依然にやけ顔のまま、別にと言っただけ扉を閉めてしまった。

何なんだアイツは。死んでも人を苛立たせる態度は相変わらずらしいな。

仕方がないのでその場を離れ、そういえば冷蔵庫の扉って内側から閉められるんだなあ、などどうでもいいことを考えながら、四谷さんの後を追って三階へ向かった。

◇

後ろを何度も振り返る。今テケテケが現れたら困るな。非科学的なことはあまり信じていないが、存在しないという証明もされていない以上、警戒はしておくべきだろう。

「よし、中に入ろう」

僕の心配をよそに、友人はすっかりご機嫌である。楽しそうなのは結構だが、僕の方はあまり気が進まない。

「あー、僕は外で待ってるよ。怖いし」

僕は彼にそう告げた。もし本当に冷蔵庫から化け物が出てきたら嫌だ。冷蔵庫の中に閉じ込められるなどごめんである。

「お前もかよ。怖がりばっかりだなあ、もう。まあいいや、それならここで待ってるよ」

もつとごねられるかと思ったが、意外とあっさり開放してくれた。出淵さんに対してはしつこかったのに、どうやら甘いのはお互い様

らしい。

友人が家庭科室のドアを勢い良く開け、それからこちらを振り返った。

「俺がさっき言ったテケテケ退治の呪文、ちゃんと覚えとけよ」

「ああ、忘れないよ」

僕は頷いた。言われなくてもしつかり覚えている。万が一いた時のために、一応。

僕の返事に親指を立てると、友人はドアを閉めた。

引き止めた方がいいんじゃないか、と、一瞬そんな考えが浮かんだのはなぜだったのだろう。

それからしばらく廊下を警戒していると、背後で突然ドアの開く音がして僕は肩を揺らした。

「お待たせ、何も無かったよ。やっぱ七不思議なんてガセなのかな」

家庭科室から出てくると、彼はそう言って笑った。出てきたのはどこからどう見ても友人のようだった。

「どうしたんだよ、早く行こう」

そう急かされたが、僕は何となく家庭科室から離れたくなかった。それがなぜなのかは分からなかったのだけれど。

「ほら、行くぞ」

彼が僕の肩を叩いた。僕の友人の手はこんなに冷たかったか。

背後から呼び止める声があったような気がした。たぶん気のせいだろうが。

◇

三階のトイレは西階段の目の前にある。この女子トイレ、手前から三番目の個室にいるのが七不思議の三つ目、トイレの花子さんだ。

トイレの花子さんって、学校の七不思議の中では一番メジャーなものではないだろうか。地域によって詳細は異なるらしく、頭が三つあって子供を食べる三メートルの大トカゲだったり、子供を便器に引きずり込む白い手だったり、男子トイレの太郎くんだったりするらしいが、うちの学校にいるのはおそらく一番オーソドックスなタイプだ。

三階の女子トイレ、手前から数えて三番目の個室の前に立ち、三回ノックして「花子さん」と呼ぶと「はい」と返事が返ってくる。しかし扉を開けても誰もいない、というものである。呼ぶと返事をするだけなんて、取って食ったり引きずり込んだりする連中に比べると何と平和なことか。

ちなみに見た目は黒髪のおかつぱ頭、白いシャツに赤い吊りスカートの小学生という、これまた定番中の定番スタイルである。そういえば、扉を開けても姿が見えないはずだが、なぜ外見が判明しているのだろうか。

「花子さん！」

三番目の個室の前に着くと、四谷さんが大声で花子さんを呼んだ。

「いや、先にノックしないと出てこないんじゃない？」

「はい」

……普通に返事が返ってきた。呼ぶだけでもいいらしい。それとも、花子さんも四谷さんと仲がいいからだっただけだろうか。

つくづく顔の広い奴だ。

「ええと……」

「上だよー」

私ができるよろしていると、頭上から声が降ってきた。それにつられて見上げてみると、個室の上から花子さんが顔を出している。前に呼んだ時は声を聞いただけだったので、姿を見るのは今日が初めてだ。それにしても、本当に噂通りの見た目である。

花子さんは私と四谷さんを交互に見て、それから口を開いた。

「お久しぶり、千鶴さん。そっちのポニーテールのあなたは二度目ましてかな？ ええと、バンシューさん？ だっけ。そう呼ばれたよね」

「そう、播州菊乃。菊乃でいいよ」

「そっか！ よろしくね菊乃さん」

花子さんがにこにこしながら言った。意外と友好的である。まあ小学生の女の子だもんなあ。

私にしては珍しくほっこりした気持ちになっていると、四谷さんが花子さんのところまで飛び上がって尋ねた。意地でも視線を合わせて話したいらしい。

「あのね、私たち今殺人事件の捜査中なの。花子さんは何か知らない？」

「殺人事件？ ううん、私はこの個室から動けないから、そもそもそんなことがあったのも初めて知ったよ。テケテケさんとかピアノがやったんじゃなくて？」

四谷さんの雑な聞き込みに対する花子さんの答えは芳しくなかった。この子も定位置から動けないのか。どうもこの七不思議たち

の中では、自由に移動できる四谷さんの方が珍しいようだ。

それにしても、テケテケは四谷さんにも花子さんにも真つ先に疑われていて何だか可哀想である。日頃の行いがそんなに悪いのだからか。

テケテケを胸の内で憐れみつつ、私は花子さんにこう答えた。

「ううん、家庭科室の包丁で刺されてたから違うみたい。黒い短髪で高身長の子、見てない？」

「私は女の子にしか会ってないよ、ここ女子トイレだし。あの時私の名前を呼んだのは……イズブチさん？ だったっけ」

「うん、出淵さん」

浅井も小泉も、結局女子トイレには寄らなかつたらしい。それにしても、夜中の学校に不法侵入するくせに、律儀に男子は女子トイレには入らないって、よく考えたら変な話だ。小泉はともかく、浅井は喜んで入りたがりそうなものだが。

「イズブチさん、キヤーキヤー言ってくれて嬉しかった！ 手分けして他も回ろうって言ってたね。一緒に来たのにバラバラで回るなんて変なの、って思った」

「浅井のことだし度胸試したかつたんでしょ。知らないけど」

最初から一人で来ればいいのに、そこまでの度胸はなかつたのだろう。軽薄そうに見えるが、あれでいて意外と臆病者なのだ。

「とにかく、私はそれしか知らないよ。ごめんね、役に立たなくて」
申し訳なさそうに眉を下げる花子さんの頭を撫でる仕草をしながら、四谷さんは微笑んだ。

「そんなことないわ、ありがとう。菊乃ちゃん、次は音楽室に行こっか」

「え、もう行っちゃうの？」

そう言つて四谷さんと私が女子トイレを去ろうとすると、花子さんに寂しそうな声で呼び止められた。どうしよう、早く音楽室に行きたいけど、小さい子をお願いを断るのは気が引ける。困った。

おろおろしている私を尻目に、四谷さんは花子さんの方に振り返つて言った。

「じゃあ、もうちよつとおしゃべりしようか！ ね、菊乃ちゃん」

「え？ いいけど、あまり居座ると時間が」

「大丈夫よちよつとぐらいい」

私は慌てたが、四谷さんはのほほんとしている。まあ、時間が押したら先に視聴覚室に行けばいいだけか。それに、無理に今日全部調べる必要はない。どうせ、時間はいくらでもあるのだから。

思い直した私は、頷いて花子さんの前に戻った。

「そうだね。まあいいか」

「ありがとう！ ここは静かで退屈なの。いつの間にか時計の音すらしなくなっちゃったし」

「あー、今は電波時計だから音しないよね」

「私の生きてた頃とは全然違うわよね。すこいわ」

それから私たちはしばらくの間、こんな風に会話に花を咲かせた。四谷さんや花子さんの時代の流行とか、逆に最近流行つてるものとか——私はあんまり流行に詳しくないんだけどね——とにかく色々な話をしたが、主な話題はやはりこの学校の七不思議たちについてである。

「——視聴覚室の幽霊さんとかテケテケちゃんは私の後に来たのよ」
「え？ そうなんだ。七番目だから四谷さんが最後なのかと思つて

た」

「あれ、入れ替わり制なの。昔は人体模型くんとか二宮金次郎さんが動いてただけけど、二人ともいなくなったから七不思議からも外されちゃった」

「一番古くからいるのは私と鏡さんだよ！」

「視聴覚室の子は結構最近よね」

「そういえば視聴覚室と鏡って完全に発動時間被ってるよね。みんな四時四十四分好きだなあ」

「怪談に使うにはびつたりの時間なもの、仕方ないわ」

「そういえば、視聴覚室の子は前にアンテナが壊れたとき真昼間に出現したことがあったらしいよ。鏡さんと違ってうっかりさんだね！」

「……なんか、この学校の七不思議って間抜けばかりだね」

「私はにぎやかでいいと思うな！ 新しい仲間もできたものね。最近はトイレでもみんな騒いでるよ。蛇口から髪の毛が出てくるって」

「あー、髪の毛ねえ……」

「ふふ、このままじゃ八不思議になっちゃうわね？」

「あんまり増えすぎると風情がないなあ」

「ところで、二人とも時間は大丈夫？」

「あつ」

しまった、話に夢中になって忘れていた。結構長い間話してしまつたが間に合うだろうか。

廊下の時計を見ると四時四十三分。よし、まだぎりぎり間に合いそうだ。

「やっぱり音楽室は後。先に視聴覚室に行こう。じゃあね花子さん」

「あ、待ってよ菊乃ちゃん！」

「二人ともばいばい！ またお話ししようね」

視聴覚室の場所はここの真上だ。急ぐ私の後ろから、慌てる四谷さんと楽しそうに見送る花子さんの声が出た。



階段を上ると、踊り場で出淵さんが座り込んでいた。

本当にいたの、花子さんが。私に返事したの。それで子供の笑い声が。戻りたくない。私も帰る。

そのような単語を途切れ途切れに繰り返して泣きじゃくる彼女を、彼は何とか宥めようとしていた。

「大丈夫だって。家庭科室にはなんもいなかったし。それより早くしないと時間になっちゃう」

そう言つて彼は出淵さんを引きずっていく。こんなに強引な奴だつたかなあ。まあ、そうだったのかもしれない。

それより、二人は気にならないのだろうか。僕は騒ぐ二人に話しかけようとした。

「そんなことより、女子トイレに……」

「そんなことつて何よ！ いやだ帰る帰る帰る——」

しかし、どうやら僕の言葉に耳を貸す気はないらしいので、それきり僕は口をつぐんだ。面倒だしもういいか。まったく、二人とも薄情者だなあ。僕も大概だけど。

そうこうしているうちに視聴覚室の前に着いた。なんとか出淵さんを落ち着かせた彼は、意気揚々とドアを開けた。

「僕、今回も外で」

「お前も早く入れて」

また逃げようとしたが、有無を言わさぬ勢いの彼に押されて、僕も視聴覚室に入る羽目になってしまった。何も出ないといいなあ。



「たのもう！」

私が叫びながら勢いよく視聴覚室に突っ込んだのと同時に、真っ暗だったテレビに砂嵐が映った。右上に表示されている時間は四時四十四分。どうやら間に合ったらしい。

七不思議の五つ目、視聴覚室の霊。四時四十四分にテレビに映り、その場にいた人間を引きずり込んでしまうらしい。冷蔵庫の奴と違って、引きずり込まれた人間が入れ替わったりはしない。モニターの奥にはこれまでの犠牲者がひしめいているのかもしれない。

ザーザーという音にキヤアアア、という甲高い悲鳴が混ざったと思うと、アップで髪の毛の長い女性の顔が映る。目を限界まで見開いてモニターを叩くような動作をして——私たちの姿を確認するとその動きをやめた。

本当はこの後、画面から出てきた手に引きずり込まれることになっている。あの悲鳴は誰のだろう。演出か、それとも中にいる人のものか。

「……なん……アナタ……そっち……知り……い？」

「うん、新しいお友達の菊乃ちゃんだよ」

「……気合……入れ……損し……」

がっかりしたように彼女——なんて呼ぼう、視聴覚室さんでいいか——は画面の向こうで肩を落としている。それにしても砂嵐の音が邪魔で声聞き取りづらい。これも怖さの演出の一つだろうか。「ちょっと聞きたいことがあって。この前人間たちが来た時があったんだけど、ここにも来てた？」

「あ……うん……三に……男の……二……女……一人……」

「えーと、三人来て、男の子二人と女の子一人ね」

私が確認すると視聴覚室さんは頷いた。いちいち確認しなきゃいけないので面倒だ。もつとはつきり喋ってほしい。

「女の子……ここに……」

そう言っって視聴覚室さんは振り向いた。女の子は今ここにいる、と言いたいようだ。つまり引きずり込まれたのは出淵さんらしい。

南無三。

「あとの二人は？」

「残……走っ……出て行」

表示時間が四時四十五分になった瞬間、画面が消えてまた真っ暗になった。そうだ、視聴覚室さんは四時四十四分から一分間しか出現できないという話だった。それ以外の時間はどうしているのだろうか。引きずりこんだ人たちと遊んでるのかな。

私は視聴覚室さんの最後の言葉を反芻しながら言った。

「残りは走って出ていった、かな？ 小泉と偽浅井は逃げきれたわけか」

「そうみたいね。出淵さんがここでないなくなったなら、出淵さんも犯人じゃないってことかしら」

「この段階で人間は小泉以外全滅しちゃったし、やっぱり偽浅井が

犯人じゃないの」

私は投げやりに言った。偽浅井がその後どこに消えたのかはまだ分からないが、元々人間じゃないんだしいきなり消失したと言われても納得できる。もうそれで解決ということでもいいのではなからうか。

そんなことを考えていると、私の考えを見透かしたらしい四谷さんがひらりと手を振って言った。

「冷蔵庫くんは突然消えたりしないわよ。今まで人間と入れ替わった子はみんな元気に生活してるもの」

「え、偽浅井が初代じゃないんだ……」

衝撃の事実である。もしかして私の知り合いにも元冷蔵庫の奴が……まあ、そうだとしても別に問題ないか。私は物理主義者のつもりだ。沼男と死んだ男は同一人物だと思いたい、と考えている。

一瞬固まっていた私に向かって、四谷さんは急かすように言った。「とにかく、音楽室に行ってみましょう。また何か分かるかもしれないわ」

「あれ、そういえば音楽室の七不思議ってピアノでしょ。喋れくない？」

そこで、私ははたと思い付いた疑問を口にした。今までおしゃべりな奴ばかりだったから忘れていたが、ピアノはさすがに口をきけないのではなからうか。七不思議の内容は、喋るピアノの怪、ではなかったはずだ。

私の疑問に、四谷さんはいたずらっぽい笑みを浮かべてこう返してきた。

「心配しないで菊乃ちゃん。音楽室にいるのは演奏者だけじゃない

の。ちゃんと観客もいるわ」



静寂に包まれていた視聴覚室を、突如砂嵐の音が揺るがした。

出淵さんが小さく悲鳴を上げる。ざあざあという音が不安を煽った。彼だけは何だか楽しそうにしていた。

突然、甲高い女の叫び声が目をつんざいた。驚いて後ずさりすると、砂嵐の中に女の顔が映った。充血した目でこちらを睨み、力の限りモニターを殴りつけている。

僕は咄嗟に入り口のあたりまで逃げた。彼も僕の方に駆け寄ってくる。

アップになった女がこちらに手を伸ばしてきた。

出淵さんは怯えて動けなくなってしまうようで、テレビの前でへたり込んでしまっている。僕はドアに手を掛けた。

女の手が出淵さんの腕をつかんだ。出淵さんが必死で僕の方に手を伸ばしてきて、ワイシャツの裾を掴んだ。僕はその手を咄嗟に払いのけた。

出淵さんはそのまま画面の中にずるずると引きずり込まれていった。なにやら叫んでいたが、僕の耳には一切入ってこなかった。

ドアを乱暴に開けて飛び出す。後ろから彼も転がり出てきた。廊下にへたり込むと、喧しかった砂嵐の音が止んだ。それからしばらくの間、僕たち二人のぜえぜえという呼吸音だけが廊下に響いていた。

やっと息を整え、僕は立ち上がって彼の方を向いた。

「ねえ、やつぱり——」

もう帰ろう、と言おうとしたが、僕の耳が何かの音を捉えた。

さつきまで静まり返っていた廊下に、ピアノの旋律が満ちている。

「音楽室だ。行こう」

そう言っただけで彼はさっと立ち上がり、先程までの疲れはどこへやら、止める間もなく音楽室の前まで走って行ってしまった。

とうとう目の前で怪奇現象が起きて知人が一人消えたというのに、そこまでして何が彼を駆り立てるのだろうか。

いつそのことを彼を置いて帰ってしまおうかとも思ったが、彼は僕が出淵さんを見捨てたところを見ていたので厄介だ。僕がみんなを見捨てて逃げた、なんて言いふらされたら困る。

僕は諦めて立ち上がった。ワイシャツの裾を見下ろすと、くつきりと皺が付いていた。

僕はしばらくそれを見つめていたが、早くしろよ、という彼の声にああ、と答え、ワイシャツをぐいっと引つ張って伸ばした。それだけで、皺はきれいに消えてしまった。



七不思議の四つ目、音楽室のピアノ。これは、音楽室のピアノが夜中、ひとりで『死の舞踏』という曲を演奏する。それを最初から最後まで聴いてしまったものはピアノに喰われてしまう——という話だったと記憶しているが、観客とは何のことだろう。

音楽室は三階の東寄り、花子さんのいるトイレから図書室と小ホールを挟んだところにある。

近づいていくとかすかにピアノの音が聞こえてきた。曲名からもっと静かなメロディーをイメージしていたのだが、存外力強くて激しい、しかしそれでいてどことなく不気味なメロディーだ。今は曲のどの辺りなんだろう。私はアニメやゲームの曲しか聞かない類の人間だったので、クラシックにはあまり明るくないのである。

一方、四谷さんは意外とクラシックに詳しいのか、ふうんと呟いてからこう言った。

「もうすぐ曲が終わるわね。演奏中に邪魔したら悪いし丁度いいわ」
「四谷さん、この曲聴いたことあるの？」

「毎晩演奏されたらさすがに覚えちゃうわよ」

確かに、それもそうか。私は今まであまり音楽室に近寄ってこなかったもので、全く聞きなれない。いつかは私も覚えてしまうかもしれない。

四谷さんは、ああでも、と言ってこう続けた。

「生きている時も聴いたことはあったわよ。この曲にはちゃんとストーリーがあつてね。真夜中に、死神が奏でる音楽に合わせて、骸骨たちがみんなでワルツを踊るの。でも、鶏の鳴き声が朝を告げると慌てて墓場へ帰ってしまう」

なるほど、今は化け物が好き放題踊っているシーンなのか。先ほどの私の印象はさほど間違っていないかったらしい。私のような素人にも伝わるほど、演奏者の表現力が高いということだろうか。それにしても、真夜中に化け物が散々暴れまわって、朝になったら消えていくとは、なんとも迷惑な話である。

そういえば、このピアノはいつからいつまで演奏しているのだろうか。まさか一晩中だろうか。私は四谷さんに聞いてみた。

「演奏する時間帯とか決まっているの？」

「午前零時から日が昇るまで、放っておいたら一晩中、ひたすら弾き続けてるわよ」

「そりゃ練習熱心なことだ」

私は吐き捨てるように言った。本当に一晩中弾いてやがるのか、この割と喧しい曲を。その熱意には感心するが、死んでまで続けられるのは困りものだ。

この七不思議の設定は、ピアノコンクールで『死の舞踏』を弾く予定だった子がコンクール前に死んでしまい、その怨念が音楽室のピアノに憑りついた、というものだったはずだ。死んだ後も練習するなんて、よっぽどピアノが好きだったんだろう。怨念が残るほど周囲に強制されていたのかもしれないが、どちらにせよ傍迷惑な話である。

心の中で悪態をついていると、四谷さんがそうだと、と言ってこう続けた。

「一応、一時間ごとに二十分休憩を挟んでるみたいよ」

「うわあ、一時間同じ曲を弾き続けて休みがたった二十分？ ちなみに一曲何分なの」

「演奏者によって多少違うと思うけれど、ここのピアノは十分ぐらいいね」

四谷さんの返答を聞いて、私は渋い顔になった。クラシックって一曲が長いんだなあ。聞いている途中で飽きそうだな。

しかし、延々弾き続けるのではなくちゃんと休み時間があるのか。不思議に思った私はぼそりと呟いた。

「というか、七不思議も休憩とかするんだ」

「ピアノのお食事タイムよ。あとは観客の感想合戦」

私の呟きを耳聡く聞きつけた四谷さんがにっこりと笑って言ったので、私は遠い目になった。観客、が何のことはまだ良く分からないが、お食事されるのは人間なのだろう。

そこで私はふと思いつき、あれ、と声を上げた。

「ということは休憩時間を避ければ食べられずに済むのか」

案外簡単に対策できるんだな、と思ったのだが、四谷さんはおかしそうに笑って言った。

「演奏中は席を立てないわよ」

残念ながらそうそう甘くはないらしい。人間の観客には中々厳しいコンサートのようだ。

ところでなぜ『死の舞踏』なんだろう。もっと有名な曲の方がキヤッチーでいいと思うのだが。例えば『エリーゼのために』とか『月光』とか。七不思議を考えた人はクラシックに造詣が深かったのだろうか。

いや、ここの七不思議に関しては創作ではなく本当に存在するのだからまたま曲が『死の舞踏』だっただけか。

卵が先か鶏が先か、という話になりそうだな。この学校に関しては、七不思議の内容に合わせて怪異が出現したのか、それとも先に怪異がいて七不思議ができたのか、どちらなのだろう。語り継がれないと消えてしまうなら前者か？

頭がこんがらがりそうになっていると、曲が突然止み、先程までとは一転して静かな曲調になった。

「鶏が鳴いたわね。もう終わるわよ」

四谷さんがひそひそ声で私に囁き、ドアの前でスタンバイした。

私もそれに続き、曲に耳を傾ける。軽やかな旋律の後、静かに曲が終わった。あれだけ騒々しかったのに、終わってしまったと何だか寂しさを感ずる。

「お邪魔しまーす」

扉をすり抜けていった四谷さんに続いて音楽室に入ると、にわかには盛大な拍手の音が音楽室に響き、私は驚いて周りを見渡した。

「菊乃ちゃん、上」

「上？」

花子さんに続いてまた上か。四谷さんに言われるがまま上を見る。穴のたくさん開いた天井、拍手を送る肖像画。消灯している蛍光灯。

何の変哲も——待てよ、肖像画が拍手？

「ブラボー！」

「なかなか上手くなってきたじゃないか。あと百年も練習すれば世界一のピアニストも夢ではないなあ」

……肖像画が感想を送っている。バツハやチャイコフスキーが仲睦まじくお喋りしている。君たち生きてた時代違うだろう。

肖像画が動く、というのには確かに七不思議の定番だけれども、我が校の七不思議には含まれていなかったはずだ。音楽室の怪として、ピアノの話に吸収されてしまったのかもしれない。

肖像画たちを見回していると、その中からひとときわ陽気な声が出た。

「おや、天使ちゃん。久しぶりに僕のもとへ舞い降りてきてくれたんだね！　ところでそちらのお嬢さんは？」

ベートーベンの肖像画が芝居の口説き文句のような科白を吐いている。四谷さんは珍しく面倒くさそうな顔で冷たく答えた。

「お友達の菊乃ちゃんよ」

「なるほど、二人目の天使ちゃんか！　早く天国に戻ってあげないと、二人も天使がいなくなってしまう神様は今頃悲しんでいるよ」

なんだ天使って。私は四谷さんに近寄って小声で尋ねた。

「ベートーベンってこんな陽気なイタリア男みたいなの？」

「菊乃ちゃん、こんな日本の一高校に本物のベートーベンが憑りつきに来るわけじゃないでしょ。あれは自分のことをベートーベンだと思っ込んでいるただの絵よ」

四谷さんが諭すように囁き返してきた。確かに、本物ならそもそも日本語を話すはずがないか。あの肖像画たちは国産なのだろう。

ベートーベンの肖像画の口説きを黙殺した四谷さんは、他の肖像画たちを見渡して問いかけた。

「ねえみんな、この前人間たちがここに来なかったかしら？」

「この前、ですか？　ああ、確か男の子が二人来ましたね」

シューベルトの絵が眼鏡をクイツと上げながら答えた。何だか皆キャラ付けが極端である。一体何に影響されたんだろう。

「ということは、小泉さんと偽浅井くんね。本物の浅井くんは家庭科室にしか行ってない、って言うってもの」

つまり小泉と偽浅井の二人は、今日の私たちと同じ順序で周ってきたらしい。四谷さんは肖像画たちに話を続けるよう目で促した。

「休憩時間が終わって再開し、丁度一曲終わった頃にあの二人が来たんだ。のっぽ君は怖がって出ていきがっていたが、演奏中に席を立つなんて言語道断だからね」

「あの日の演奏はいつにも増して素晴らしかった」

「一時間経って、背の低い子が彼女に食べられたのさ。その時に包

丁を落としていたな」

「背の高い方はそれを見て慌てて出て行ってしまったのう」

「逃げていくときに包丁を持つてるのが見えたぜ！」

肖像画たちが口々に証言をした。立て続けに話されたので少々混乱しそうになる。

「ええと、つまり二人は、ほぼ一時間ずっと演奏を聞き続けたと」

「それから偽浅井くんが彼女——ピアノに食べられて、小泉くんが包丁を持って逃げだしたってことね。偽浅井くんが包丁を落としたってことは、家庭科室から包丁を持ち出したのは偽浅井くんの方かしら」

「うん——うん？ あれ、偽浅井が食われた？」

偽浅井の方が食べられたのか。七不思議が七不思議を退治してどうするのだ。いや、浅井と入れ替わっていたのだから人間判定されたのだろうか。沼男も死んでしまったということは、これで浅井はもう完全に死んだものと思っていだろうか。冷蔵庫にいる彼は、次に生還する時はもう浅井ではない別の誰かなのだろうか。

四谷さんは偽浅井が食べられたことについて特に驚きはないらしく、頬に手を当ててううん、と唸りながら言った。

「その時点で小泉くんが生きていて包丁を持っていたってことは……犯人候補がいなくなっちゃったわね」

「え、ここにきて？ そんなあ」

私は不満の声を上げた。お化けですら解決できないなら本当に迷宮入りではないか。まさか怪異にも解けない怪事件だったとは。

「自殺……はないよね。ここまで逃げるほど生に執着してたんだもん」

「そうね。他殺だとは思っただけけど」

私の言葉に四谷さんは頷いた。他殺なのは間違いなさそうだが、もう容疑者が残っていない。手詰まりか、と思ったところで、私たちを見つめる肖像画たちと目が合った。もしかしたら、と私は思っていた可能性を口にしてみた。

「実はまだ会ってない怪異がいたりするんじゃないか。この肖像画だつて七不思議に入ってたなかったし、似たようなのが他にもいたり」

「しないわよ。私は全員把握してるもの。私たちはお仲間の存在を感知できるでしょう。この学校にいる怪異でまだ会ってないのは鏡だけよ」

しかし、四谷さんに一瞬で否定されてしまった。確かに、家庭科室で浅井が怪談話をした時もそんなことを言っていたな。やはりそんなにうまい話はないようだ。

「失礼、お嬢さんがた。そろそろ演奏会に戻っても？」

「あ、すみません。いいですよ」

申し訳なさそうなショパンの肖像画に話しかけられ、ピアノの演奏が止まったままであることに気が付いた。だいぶ長らくお待たせしてしまつたようだ。私は四谷さんの手を引——こうとして虚空を掴んだ。しまった、幽霊であることを一瞬忘れていた。何となく恥ずかしくなり、四谷さんから目を逸らしながら言った。

「あー、四谷さん、とりあえずもう行こうか」

「また来てね、天使ちゃんたち！」

イタリア風ベートーベンたちに見送られながら、私たちは音楽室を後にした。音楽室から出ると『死の舞踏』がまた聴こえてきて、廊下に響き始めた。先ほどよりも心なしか楽しそうな気がする。観

客が増えて嬉しかったのかもしれない。たまには聴きに来てあげてもいいかな。一晩中は勘弁だが。



彼がドアを開けた途端、音楽室はざわめきに包まれた。不思議に思った僕が声の方を見ると、壁に掛けられた肖像画たちがこちらを見て口々に何か言っている。

「新しい観客じゃないか」

「久しぶりの人間だ！」

音楽室の七不思議ってピアノじゃなかったっけ。肖像画が話さなくて初耳だ。

「ほら、お前も座れって」

ぼかんとしている僕を彼が引つ張った。いつの間にか椅子に座っている。

ここの七不思議って、曲を聴いたら食べられる、だった気がする。

もう充分不思議体験はしたからお暇させていたきたいのだが。しかし彼が離してくれそうにないので、僕は腹を括ると彼の隣に腰かけた。

突如、先程までの喧騒が嘘だったかのように、水を打ったような静けさに覆われる。そして、ピアノの鍵盤がひとりだけでゆっくりと降り、演奏が始まった。

隣を見ると、彼は大真面目な顔で演奏に聴き入っていた。クラシックに興味を示すようなタマじゃあないだろう、浅井。

僕の方はというと、曲なんか全く頭に入っていない。冷静を装っ

ているが、内心は必死で逃げ出す方法を考えている。焦燥感で腹の底が焼けそうだ。

曲が終わった、と思うとまた始まる。立ち上がりたくても身動きが取れない。椅子ごと床に打ちつけられているような気分である。

最後まで聴いたら食われる、とはいうがいつになったら最後が来るのだ。いや、食べられるくらいならこのまま朝を迎えてくれた方がありがたいが。

いくら考えてもいい逃走方法は思い浮かばず、いい加減ピアノの音が耳障りになってきた頃、ピアノが演奏をやめた。代わりに拍手と歓声が上がりに、肖像画の目が全てこちらに向いた。

このままではまずい。そこで、手足が自由になっていることに気が付いた僕は、とつさに隣人の腕をつかんだ。

お前など知ったことか。

え、と間抜けな声を上げた彼を無理やり立ち上がらせ、そのままピアノの方へ蹴飛ばした。その拍子に彼のポケットから何かが落ちて光った。

僕はそれを素早く拾い上げると、悲鳴も咀嚼音も何もかも振り切った音楽室を飛び出した。



「天使ちゃん、鏡も一応見ていく？」

私がからかうようにそう呼ぶと、四谷さんは苦々しい顔になった。どうやら本気で嫌なようだ。

「ちよっと、やめてよ菊乃ちゃんまで」

「そんなに嫌？ それにしても、死人を天使呼びつて中々だよね。四谷さんが行くのは天国じゃなくて地獄でしょ」

「ひどーい」

本気で言ったのだが、四谷さんは真面目に受け取ってはいないらしい。もしかして自分が天国に行けると思っているのだろうか。図々しい奴だな。

こんな風に他愛もない会話をしつつ階段を下りていく。噂の鏡は東階段、二階と三階の間の踊り場にある。

七不思議の六つ目、踊り場の鏡。四時四十四分に鏡の前に立つと鏡の中の異界に入れる、ただし四時四十五分になった瞬間二度と出られない、という話だった。冷蔵庫の奴や視聴覚室さんと似た点が多いけれど、一番の違いは向こうからの干渉が不可能という所だ。他と違い、こちらから鏡の中に干渉しない限り勝手に鏡から出てきたりはしない。好奇心に負けて手を突っ込まない限りは安全、という花子さんの次に無害な奴だ。

「こればかりは確認できないもんねえ。時間通りに来ても幽体じや映らないもの」

四谷さんはそう言いつつ、不満そうに鏡の前で飛んだり跳ねたりしているが、当然鏡には映っていない。壁の時計は五時少し前を指している。時間的にも物理的にも、鏡像に会うのは無理そうだ。

そもそも、と私は思った疑問を口にした。

「鏡像って話せるの？」

「前にテケテケちゃんを連れてきて試したことがあるんだけど、お話しぐらいはしてくれるわよ。上手いこと言いくるめて、鏡の中に入らせようとしてくるの」

「刺してきたり入れ替わったりは？」

「できないみたいね」

小泉の死体があつたのは二階の東階段を下りたところだったので、もしかしたら関係があるかもしれないと思ったのだが、小泉の体がこちら側にあつた以上、鏡像は関係なさそうだ。そもそも、四時四十四分に彼は視聴覚室にいたから、どちらにしろ鏡の七不思議は確認できなかっただろうけど。

「ごちゃごちゃ考えている私の目を、四谷さんはいたずらっぽく覗き込んできた。」

「ただ、少し面白いことが起こるのよ。前にテケテケちゃんと来たとき、落ちてた紙くずを鏡の中に投げ込んでみたの。そしたら四時四十五分になった瞬間、どうなったと思う？」

鏡の中の世界と繋がるのがすでに面白いことでは、と思ったがそれは黙っておくことにした。

それ以外に面白いこととはなんだろう。少し考えたが、分からないので適当に答えた。

「そりゃ、鏡の中に紙くずが閉じ込められちゃうんじゃないの。いや、普通の鏡に戻るんだから消えるのかな？ 現実にはないものが映ってたら普通じゃないもんね」

「逆なのよ」

私が答えると、四谷さんは待つてましたとばかりに得意げな顔で胸を張った。

「逆？」

「現実の方に紙くずが現れたのよ。鏡の中の紙くずとぴったり同じ位置に。どう？ 面白いでしょう」

確かにそれは面白いかもしれない。鏡側ではなく現実側を改変して辻褃を合わせるのか。

——もしかして、次の目鏡の中の紙くずを回収すれば元の二倍にできるんじゃないだろうか。紙くずではなく金目のものを……。

「菊乃ちゃん、悪いこと考えてるでしょう」

珍しく四谷さんに突っ込まれ、私は慌てて首を振った。

「で、でも事件には結局関係ないよね。小泉は四時四十四分にここにいなかったんだし」

「そうなのよねえ。もしかして八方塞がり？ 残念だわ」

「小泉が浮かばれないね。あ、でも化けて出てきてないってことは成仏したのかな。なら別にいいか」

未練があつたら彼も七不思議の仲間入りをしたかもしれないが、いないということは無事に成仏したのだろう。これにておしまい、めでたしめでたし。

「よくないわよ。何だかもよやするじゃない。幽霊になってくれたら直接話が聞けたのに。こうなったら菊乃ちゃんに頑張って推理してもらうしかないわ」

「は？ いや、無理だって。そんなに気になるなら自分で考えたら」

四谷さんは私と違ってかなり諦めが悪いらしい。大体、私は推理とかする柄じゃないから。

「そうね、こうなったらこの四谷千鶴、昭和のシャーロック・ホームズになってみせるわ」

「あ、そう……今は昭和じゃないけど……」

諦めてもらおうと思ったのに、逆に乗り気になってしまった。まあ、四谷さんの頭に探偵役が務まるとは思えないので放っておけば

いいだろう。

「まずは情報の整理だよ」

「そうだね」

「小泉くんは胸を家庭科室の包丁で刺されて死んでいた。それで、家庭科室の包丁を持ち出したのは偽浅井くん。でも、偽浅井くん含めて、小泉くん以外の人間は彼より先に全滅していた」

四谷さんが顎に手を当ててぶつぶつ呟いている。意外と真面目に推理する気があるらしい。

「ということは、やっぱり犯人は七不思議のうちの誰かよね。他に誰もいなかったのは、私もみんなも知ってることだもの」

「そうだね。テケテケ、冷蔵庫の奴、トイレの花子さん、視聴覚室さん、音楽室のピアノーと、肖像画たち、踊り場の鏡、あと四谷さん」

私が指を折りながら順に挙げていくと、自分の名前が出たことに不満らしい四谷さんがむつとした顔になった。

「小泉くんは殺さないもん」

「どうだか。白状するなら今だよ」

私が鼻で笑って言うと、四谷さんはますますムキになって反論してきた。

「私は屋上以外で何もできないわよ」

「でも、ブレーカー以外の二つは壊したんですよ」

浅井曰く、冷蔵庫の奴に掴まれた時、その手は冷たかったのだ。冷蔵庫に電気が通っていたということは、メインブレーカーはあの日落とされていなかった、というのは嘘ではないだろう。貯水槽の蓋を開けていたのは知っている。

「それはそうだけど、別に事件には関係——」

そこまで言って、四谷さんは突然目を丸くして固まった。一体何事だ。私は彼女に近づき、顔の前で手を振ってみた。

「おい四谷さーん」

「謎は全て解けたっ」

「うわあ」

突然四谷さんが大声を上げて人差し指を突き付けてきたので、私は驚いて飛びのいた。断りなく人の体を貫通するな。

「うふふ、今の科白、一回は言ってみたかったの」

「ああそう。そんなことより、解けたって本当？」

私は疑いの目で彼女を見た。四谷さんのくせにそんなに早く解けるわけがない。

しかし、四谷さんは自信に満ちた顔で胸を張り、気取った口調で言った。

「もちろん。ではワトソン君、みんなを屋上に集めてくれたまえ」



階段を駆け下りる。こうなったら、僕だけでいいから無事に脱出せねば。

明日、周りに何と弁解すればいいのだろう。僕以外みんな七不思議に殺されました、なんて言って信じてもらえるだろうか。

足がもつれてうまく動かず、途中で踊り場に転がり落ちる。

慌てて顔を上げて立ち上がろうとすると、二階廊下の向こうから何かが猛然とこちらに迫ってくるのを見た。

女、のようだった。長い髪の隙間から、限界まで見開いた目と裂けんばかりの笑顔が覗いていた。しかし何より、そいつには下半身が無かった。それに気が付いて、僕は舌打ちをした。すでに恐怖よりも苛立ちの方が上回っている。邪魔だ。

そいつ、テケテケは階段下で立ち止まると、爛々とした目でこちらを見上げてきた。

どうやら階段は登れないらしい。そのまま、もう夜が明けたのではないかと思うほど、僕たちは長い間睨み合っていた。

このままでは僕も動けない。どうしようか考えていると、ふと友人が言っていたことを思い出した。

——テケテケってさ、『地獄に落ちろ』って言ったら逃げられないぞ。

僕は引き攣った喉から懸命に言葉を絞り出した。



東の空がうつすらと明るくなっているが、頭上にはまだ夜が残っている。あと三十分もすれば日の出の時間だろう。

私は四谷さんと向かい合う格好で屋上の真ん中に立ち止まった。屋上に集めると言われても、他の七不思議は誰も屋上に来れないので、集めるとするのは無理な注文であった。そういうわけで結局この二人だけだ。まあそれは別に構わない。そんなことより、日が昇る前に解決編を終わらせてもらわなければ。

四谷さんは気を取り直すようにこぼんと咳払いをすると、右手の人差し指をびんと伸ばし、重々しく口を開いた。

四谷さんは気を取り直すようにこぼんと咳払いをすると、右手の人差し指をびんと伸ばし、重々しく口を開いた。

「じゃあまず最初に犯人を言います。犯人は——」

「犯人は？」

「——小泉くんです」



テケテケはその恐ろしい形相を更に醜く歪めて走り去っていった。何とか助かったらしい。

しかし、どうしよう。このままでは家庭科室に近寄れない。この廊下の向こうなのに。

咄嗟に浮かんた自分の思考に疑問符が浮かぶ。

どうして家庭科室に戻る必要があるんだ。このまま一回まで駆け下りてしまえばいいのに。

また物音がした。畜生、今度はなんだ。どいつもこいつも邪魔しやがって。早く迎えに行つてあげないと。

——一体誰を？



「ええ？ 自殺はありえないって結論だったじゃん」

何を言ひ出すかと思えば、やっぱり迷推理じゃないか。私は呆れながら言った。

しかし、四谷さんはゆっくりと移動しながら構わず続けた。

「まず小泉くんの行動を振り返ってほしいんだけど、菊乃ちゃんは覚えてる？」

「それくらいは覚えてるよ。ええと、最初に家庭科室、次に視聴覚室、それから音楽室、テケテケが最後」

私の返答に、四谷さんはふむ、と満足げに頷いた。

「そうね。テケテケちゃんを撃退してすぐ殺されたみたいだもの。残りの三つの内、女子トイレと屋上に行つてないのは花子さんと私が見てないんだから確実。では鏡はなぜ除外されたか」

四谷さんが私を指してきた。私は首を傾げて答える。

「時間の問題でしょ。仮に行つてたとしても、四時四十四分じゃないとただの鏡だからね。その時間に視聴覚室にいたのは、視聴覚室さんが証言してた」

すると、四谷さんがずっと近づいてきたので、私は顔を逸らした。テンションが上がると距離が近くなるタイプなのだろうか。迷惑である。

「そこよ。そこで浅井くんの話を思い出してほしいの。浅井くん曰く、家庭科室に着いた時間は四時半だった。でも、彼らが学校に着いたのは何時だったかという」と

四谷さんが私の目を見つめてきた。これも答えろということか。「ノツてるねえ四谷さん。ええと、ちょうど丑三つ時でしょ」

私に馬鹿にされていることに気づいていないのか、四谷さんは私の答えを聞いて、いつも通り人の良い笑顔で続けた。

「そう。ねえ、おかしいと思わない？ 丑三つ時——二時頃学校に着いたのに、最初に家庭科室に言った時点ですでに二時間経つてることになるのよ。時空を歪められるような怪異はここにはないわ」

「……言われてみれば、確かに。えーと、つまり、どういうこと？」
その通りである。なぜ今まで疑問に思わなかったのだろう。

頭をひねる私に、四谷さんはまた右目を閉じてウインクもどきをした。

「つまり、学校の時計が狂ってたってこと。でもこの時計は電波時計だから普通は狂ったりしないはず。受信する機器が壊れてなければ、ね」

「受信する機器？」

「アンテナよ。私はその日壊してたって言ったでしょう」

「……あー」

私は数時間前の屋上での会話を思い出した。そういえば、他の二つはともかく、とか言ってたな。

「でも、時計の時間が変わっただけじゃ鏡に影響なくない？」

私は四谷さんに尋ねた。だって、鏡はアンテナに関係ないだろう。

あれ、どうして関係ないんだっけ。

「鏡の方はそうね。でも、花子さんとお喋りした時に、あの子が話していたでしょう。視聴覚室の子が、アンテナが壊れたとき真昼間に出現したことがあったって。つまり、影響があったのは鏡じゃなくて視聴覚室の子。時計だけじゃなくて視聴覚室さんの憑いてるテレビの時間も進んでたのよ、二時間ね」

四谷さんが右手でピースをして私の顔に突きつけてきた。そうだった、その時、花子さんが『鏡さんと違つてうっかりさん』だとか言っていたから、私は鏡はアンテナに関係ない、ということを知っていたのだ。

自分で気づけたはずなのに四谷さんごときに先を越されたのは少々、いや正直かなり悔しかったが、私は何ともないような顔で相槌を打った。

「そういやそうだったね。ええと、二時間進んだってことは……三人が視聴覚室にいたのは、本当は四時四十四分じゃなくて二時四十四分だった、ってことか」

「そういうこと。三人とも『すまほ』や時計を持っていなかったから、学校の時計を頼りに行動したのよ」

四谷さんは得意げにそう言ったが、私はピンと来ずに首を傾げた。
「うーん、時間がずれていたのは分かったけど、結局どうして小泉が犯人になるわけ」

「時間がずれることで、できるようになることがあるでしょう。四時四十四分の七不思議はもう一つあるのよ」

そう言つて四谷さんはまた右目を閉じた。気が付いた私は思わず大声を上げた。

「あ、鏡！ 小泉は鏡の七不思議にも遭遇していた、ってこと？」

「そういうこと。二時間ずれたことを前提条件として、小泉くんは行動を辿つてみましょうか。」

まず、家庭科室に着いた実際の時間は二時三十分頃。そのあと偽浅井くん、出淵さんと合流して視聴覚室の子に会ったのが二時四十四分。そこで出淵さんがいなくなつて、浅井くんと二人で音楽室に着いたのが……ええと、ちよつと待つてね」

行き当たりばつたりで推理を始めてしまったため、ちゃんと考えていかなかったらしい。そういうところで詰めが甘いんだよね、コイツは。

四谷さんは言葉を詰まらせながらまた話し始めた。

「……演奏会が始まるのが午前零時で、一時間演奏して二十分休憩でしょう。ええと、演奏時間は零時から一時と、一時二十分から二

時二十分……ここね。それで休憩が終わるのが二時四十分。肖像画曰く、二人が来たのは休憩が終わって丁度一曲終わった時で、一曲の所要時間が十分だから——二時五十分ぐらいかしら。

それで再度休憩に入るのが三時四十分。ここで偽浅井くんが食べられて、二階廊下に移動してテケテケちゃんと一緒に時間ほど硬直状態になり、やっと撃退。この時間が四時四十分前後。ここで小泉くんがいた場所はどこか覚えてる？」

「階段の上にはいたんだから、二階と三階の踊り場——鏡のあるところかな」

私は現場を思い出しながら答えた。四谷さんは頷いて続けた。

「そう、そこには七不思議の鏡があった。鏡は四時四十分には別世界へと繋がった。ここで小泉くんは鏡の怪異に遭ってしまったのね。それで小泉くんはどうしたか。今は四時四十分じゃないはずなのに、鏡の向こうの自分が話しかけてくることに驚いた彼は、とっさに鏡像に包丁を向けて——そのまま相手の胸に刺した——ちよつと驚かしただけで刺さなくてもいいのに、酷い話よね」

自分たちはノリで人を殺しまくっておいてこの言い分である。野次を飛ばしてやるうかと思つたがやめておき、代わりに話を続けるよう無言で促した。四谷さんはうん、と言つてまた口を開いた。

「そこで四時四十五分になつて鏡はただの鏡に戻る。それで、この鏡は現実の方を鏡の世界に合わせてくるつて、さつき話したわよね。今、鏡の中の小泉くんには包丁が刺さっている。ならば現実の小泉くんにも——」

「胸に包丁が刺さるつてわけか。それで階段から転げ落ちたのをテケテケが発見した……確かに犯人は小泉だね」

私は頷いて話を継いだ。残念だが、ケチのつけようはなさそうだ。四谷さんは得意満面で付け足した。

「指紋が浅井くんと小泉くんのものしかなくて、浅井くんが二人とも先に死んでしまったなら、もう小泉くんしか残つてないもの。ちやんと調べたら、小泉くんが握りしめてる形の指紋とかも出るんじゃないかしら。——つてことで、きゅー・いー・でー、証明終了！」

四谷さんが自慢げに締めくくつた。格好つけているつもりなのかもしれないが、あからさまに日本人の発音である。私はからかうように肩をすぼめた。

「まあ、四谷さんにしてはよくできたんじゃない」

「えへへ、そうでしょう」

素直に喜ばれると気が抜けてしまう。四谷さんのこういうところがとても苦手だ。

「別に、もうちよつと考えれば私だつて解けてたけど、これくらいいい」

「そつかあ。菊乃探偵さんの推理も聞きたかつたし、もうちよつと黙つてればよかつたかも」

渾身の負け惜しみを投げつけてみたが、これも軽く打ち返されてしまった。まったく不愉快千万である、何とかしてこのダイヤの如き精神に傷をつけてやれないものか。私は片頬に微笑を浮かべて言つた。

「でも、それつて間接的に四谷さんが殺したとも言えるんじゃない？ おめでとう、キル数が二人に増えたね」

すると、四谷さんは眉を下げ、恐る恐るこちらを見上げた。

「……菊乃ちゃん、やつぱりまだ根に持つてる？」

どうやら無事急所に命中したらしい。さて、ここから何と返してやるか。

「いや、そんなに心配しなくても。さすがにもうなんとも思っていないから」

「そっかあ、良かった」

私の返事を聞いて、四谷さんは安心したようにふにやりと笑った。私も無言で微笑み返す。

……いや、そうじゃないだろう私。安心させてどうする。こうやっていつも中途半端なのは私の良くないところだ。

というか、コイツは何あつまり信じてるんだ。相変わらず人の心の機微にとんでもなく疎いらしい。自分を殺した犯人をそんなにあつまり許せるわけがあるか。

そう、私がこんなところで幽霊をやっているのは、この四谷千鶴のせいなのである。

一か月前の夜、出淵さんに置いて行かれた私はしばらく女子トイレで腰を抜かしていたが、なんとか立ち直るとみんなを探して彷徨っていた。アイツらは私をあつまり見捨てたようだけだ。せめて女子トイレに迎えに来るぐらいいはしてくれても良かったじゃないか、酷い奴らだ。

まあ、どうせ数合わせで呼ばれただけだし、私の扱いはなんて所詮そんなものだろう。とにかく、家庭科室とか視聴覚室とか、色々見て回ったが誰もいなかった。そして最後に屋上に来たら、そこに四谷さんがいた。

アイツはドアの上のところに背を向けて立っていた。気になった私はそこに登って近づいてみた。

そしたら、アイツが突然振り向いて、無言でこっちに来たわけ。一人でビビってるときに、顔が半分無い半透明のやつがにじり寄ってきたらどう思うよ？ 私はものすごく驚いて絶叫した。それで、後ずさりしたら貯水槽の中に落っこちた。

今思えば、アイツわざと貯水槽の蓋を開けておいたんじゃないかな。絶対そうだわ。本当に腹立つ。

軽い気持ちで夜中の学校で肝試しする方が悪い、と言われたら反論できないが。八つ当たりの自覚が無いわけではない。それでも憎いものは憎い。誰かのせいにしなければやってられない。というか、私には一度も謝ったことがなくせに、小泉には申し訳ないなんてどういう丁見だ。あんな奴どうでもいいから私のことだけずつと反省していきな。

私の死体はまだ貯水槽の中にある。蛇口から出てくる髪の毛って私のだろうなあ。そろそろ髪の毛が怪談ではなく現実だと大人たちも気が付くだろう。そうしたらやつと発見してもらえるのだろうか。

「でも、菊乃ちゃんが幽霊になってくれて良かった。怖がられるのも楽しいけど、普通に話してくれるお友達の方がもっと嬉しいもの」
四谷さんは花が咲いたような笑顔で言った。私はそれに返事をす。

「まあ、いい加減慣れたしね。私も暇しなくてありがたいわ」
そんなわけない。全然慣れてない。私はホラーもスプラッタも苦手だったし、一か月経っても耐性が付く気配はない。

体の下半分ない奴とか、ボロボロ体のパーツ落とす奴とか、無意味に怖い登場の仕方してくる奴とか、本当に勘弁してほしい。ただでさえ顔面半分吹っ飛び殺人女に四六時中付きまとわれているとい

うのに。癒しは花子さんと、あとはピアノぐらいだ。食事中でなければ、だが。

あーあ、本当、何でこんなところにいるんだろう、私。学校に未練なんかないはずなんだけどな。むしろ早くここを出たい。天使でも鬼でも何でもいいから、早くお迎えに来てくれ。

しかし、未練がないというのは嘘かもしれない。

「あ、そろそろ朝だね」

四谷さんが、登ってきた朝日に透けてきらきらと輝いている。そろそろこいつが消える時間だ。

「ねえ菊乃ちゃん、先に成仏したりなんかしないでね？ 置いていかれたら寂しいもの」

自分勝手な言い分だ。自分は毎朝私を置いていくくせに。

「——当たり前でしょ」

アンタが地獄に落ちるのを見届けなきゃいけないからね。

「本当？ 嬉しい！ じゃあね菊乃ちゃん、また今晚」

やっといなくなってくれる。日が沈むまでこいつの顔を見ずに済む。

「はいはい。またね」

夏が嫌いになった。すぐに夜が終わってしまうからだ。

「またね——」

朝日に溶けるように消えていく四谷さんを、私は中指を立てて見送った。あばよクソ女、また今夜な。

何だか眩しくて、思わず目を細める。今日の日没は何時だろうか。

やっほう、上から失礼。

あはは、驚かれるとやっぱり気分いいわ。ねえ、ちよつと私の話を聞いていってよ。

うちの学校の怪談、知ってる？ ——知らないか。あのね、この学校のは七不思議じゃなくて八不思議なんだよ。最近一つ増えたんだけど、まだあんまり知られてないみたいでさ、困っちゃうよね。聞きたいでしょ。仮に聞きたくなくても話すけど。聞いたら最後にちゃんと覚えて、皆に広めておくように。言っとくけど拒否権ないから。いいね？

はあ？ 返事はハイカイエスでしょうが。やり直し。

——よろしい。では教えてあげよう。

一つ、二階廊下に現れるテケテケ。

二つ、家庭科室の冷蔵庫に閉じ込められた男の子。

三つ、三階の女子トイレにいるトイレの花子さん。

四つ、最後まで演奏を聞いた人間を喰うピアノ。

五つ、四時四十四分、霊が映る四階視聴覚室のテレビ。

六つ、四時四十四分、異世界と繋がる鏡。

七つ、屋上にいる昔投身自殺した女子生徒の霊。

八つ、貯水槽に落ちた女子高生の霊。

これで全部。はい、じゃあもう帰って。この屋上はもう立ち入り禁止ですよ。

まだ用が済んでない？ 私の用はもう済んだし。アンタの用事なんか知ったこっちゃないね。

私はいいのかって？　面白いこと言うねえ。アンタ、校則で幽霊が縛れると思ってるの。

来たのが昼で良かったね。夜には来ないことをお勧めするよ。一応言っとくけどフリじゃないから。経験者は語る、ってやつ。センパイの言うことは聞いたくもんだよ。アンタが何歳か知らないけど。ここで何をしてるのか？　しつこいなアンタも。夜までぼーっとしてるの。昼は静かで敵わないよ、まったく。

え？　アンタが話し相手になつてくれる？　あー……ありがたい申し出だけど、お断りしておくよ。うるさい奴は一人で十分。

よし、やつと帰る気になったか——ああ待って、上履き忘れてる。ちゃんと履いてってよ、裸足で出歩くつもり？

はいはい、サヨナラ。二度と来ないですよ。

『これから旅立つ君の背中を』

若者

静けさが支配する空間に、とんつ、とんつ、と軽い音が響く。けれど、その音を聞く者は僕以外いない。日常生活から切り離された場所、屋上への階段を僕は上っている。別に昼食を食べようだとか、授業をサボろうだとかいうのではない。そもそも普段、屋上に入るなどできない。それでも僕が屋上に向かってるのは、何のことは無い。ふと、僕は握りしめた紙切れを見る。

『放課後、屋上に来て欲しい 「彼の名前」』

それだけの簡素な文章。彼とはクラスメイトだから、接点が無いとは言わない。だが、彼がなぜ僕を呼び出したのかは知らない。なぜ屋上に呼んだのかもわからない。それを悟れるほどの思考はしない。ただ呼び出されたから、僕は屋上へ向かっている。

階段を上り終えたそこには、いつもは固く閉ざされた扉。らしいと言った方がよいか。ごく一般的な学生たる僕はこんなところに来たことなんてない。誰から聞いたんだっただか。そんなことを考えながら、冷たく光るドアノブを握る。徐にノブを捻り体重をかけて押し込むと、さび付いた金属製のドアがぎいいと音を立ててゆつくりと開いた。最初に目に飛び込んできたのは分厚く蓋をするようなねずみの雲。がらんとした灰の床の先に、彼は背を向けて立っていた。耳障りな金属音は確かに響いたはずだけれど、彼はこちらを振

り返らない。そこで立ち止まりよくよく観察すれば、彼と隔てる緑色の網が見えた。ああ、よくある話だ。僕は回想の海に潜り、彼の姿を追っていく。

どれくらい経つだろうか。僕は徐に彼に向かって歩き出す。彼は僕が動き出しても振り向こうとはしない。僕からも語りかける言葉は無い。『僕』と彼とは所詮無関係の他人だ。たとえ以前の僕が彼とよく一緒にいて、笑いあって。親友と言われるほどに同じ時を過ごしていて。疎遠になつていたのがつい最近だけのことだったとしても。

いつの間にか雲の切れ間からは光が差していて。彼の背中に吸い込まれるように僕の手は伸びていき。僕と彼を隔てる網はけれど、手がねじ込まれるのを妨げることは叶わず。何も知らない無責任な他人は、さも門出を祝う友人のように

——これから旅立つ君の背中を

赤川次郎
『死者の学園祭』
読書会レポート

注意！

これより赤川次郎『死者の学園祭』
読書会の様子をお届けします。
小説の内容に関わる重大なネタバレ
が含まれていますので、
未読の方はご注意ください。

【とあるzoo会議にて】

赤川次郎『死者の学園祭』

前田 .. それでは第一回オンライン読書会を始めたいと思います。

課題本は赤川次郎『死者の学園祭』です。よろしくお願ひします。

一同 .. よろしくお願ひします。

前田 .. じゃあまずは自己紹介から。学年、学部、好きな作家と名前で大丈夫ですかね？

長谷川 .. それでいいと思うよ。

前田 .. じゃあ私から。本日司会を務める工学部三年の前田です。

最初からで申し訳ないのですが、好きな作家は特に決めておらず、その時の気分で読んでます。

小林 .. 理工学研究科一年の小林です。好きな作家は同じく特に決めていませんが、最近青柳碧人読みました。

細田 .. 同じく理工学研究科二年、今年卒業予定の細田です。好きな作家はなかなか難しいけれど、この頃は西尾維新を全部読んでやろうかと思って。相当大変だろうけど今は捷上シリーズを全部読もうと頑張っています。

長谷川 .. 教育学部三年の長谷川です。好きな作家は特にないんですけど、最近は似鳥の動物園シリーズを読んでます。

前田 .. 以上で寂しいですけど、自己紹介を終わりにします。次は概要とあらすじについて軽くまとめたので読みますね。

【概要】

一九七七年にソノラマ文庫（ライトノベルの先駆けとなった中高生向けのレーベル）から刊行された赤川次郎の長編デビュー作。二〇〇〇年八月に深田恭子主演で映画化した。

【あらすじ】

武蔵野にある手塚学園。この一角にある立ち入り禁止の部屋に、三人の女子高生の姿があった。軽いいたずらを仕掛けるためだったのだが、彼女たちは気づかなかつた。背後に冷酷な視線があることを。そして、三人は次々と謎の死を遂げる。クラスメイトの死に疑問を抱いた結城真知子は、一人で捜査に乗り出した。学園に忍び寄る恐怖の影に立ち向かう、女子高生探偵の活躍を描く青春サスペンス・ミステリー。

（「BOOK」データベースより）

前田 .. ということで議題に移っていこうと思ったのですが、若林からもう少しで来るとの連絡が来たので少し待ちますね。

細田 .. じゃあ余談でも話してますか。そういえば議題にはなかったけど映画ってどんな感じだったの？

前田 .. おそらく私くらいしか観ていないと思うので特に議題には挙げたりしなかったのですが、結構内容が変わっていて

色々衝撃的でした。登場人物も結構減らされました。

小林 .. 確かに映画にするにはちよつと人が多いよね。

前田 .. 誰がいないかは厳密に覚えていないんですけど、そもそも主人公の真知子が転校生じゃないんですよ！ 演劇部の部

長をやっている。

長谷川…えー！

前田 …由子も同じ学校になっていて、彼女が飛び降り自殺した屋上に残された脚本で上演しようと奮闘してる中で様々な悲劇が…：…みたいな感じでした。

細田 …自殺が描かれてるの？ 麻薬とか自殺が映画的にNGとかが原因なのかと思った。

前田 …自殺に見せかけた他殺なんでセーフとかなんですかね。麻薬の描写は特にありませんでしたし。

細田 …尺的にというよりそちの影響が大きそうだね。

前田 …麻薬関係全カットなんでお父さんなんか美術館の館長をやってみましたよ(笑)

小林 …へえー。

前田 …あと外国人の先生が出てきたりとか。

長谷川…えっ、何それ。

前田 …西田じゃなくてその人が美術教師とか役割もずれてて。細田 …観た感じ怪しい人にしたかったのかな。まあ二時間くらいの映画といえは妥当か。

前田 …本当はかなり変えられていましたよ。冒険するわけでもなく謎が次々と起こって、えー！ みたいな。

細田 …主人公も高校生だけでもコスプレ感出てなかった？

前田 …深田恭子自身初主演で二〇〇〇年の作品なんで、多分現役くらいなんだと思います。

小林 …なるほど。

細田 …この作品って映画化するくらい人気だったんだ。全然知ら

なかった。

長谷川…私は児童文庫で前読んじやっていたんですよ。緑の角川つばさ文庫で。

前田 …確かに何度か見かけたことはあったかも。

細田 …ちなみに僕は入手できたのがその角川つばさ文庫だったんだけど挿絵とかも違うよね？ これはちよっと挿絵が入っているんだけど。

長谷川…私が持っているのは入ってないですね。

小林…私が持っている古いのにもないです。

細田…じゃあ挿絵で話したりするとずれちゃうね。

前田…結構入っているんですか？

細田…全部で二十ページないくらいで、一ページ絵になっているのが何個かくらいかな。あとは登場人物紹介の部分。めちやくちや絵が少女漫画なんだよね。

長谷川…子ども向けって感じですよ。

細田…文章も少女漫画向けっぽいからそんなに違和感がないよね。

長谷川…でも内容はそんなに大差なかった気がします。

小林…麻薬とかも全開な感じですか？

細田…そうだね、特に変えてないと思う。

前田…まあ、最初に出したレーベルが中高生向けって書いてありましたが、結構マイルドですよ。ラストとか。

細田…確かに文章がマイルドだね。

前田…かなり読みやすかったです。

細田…読みやす過ぎてちよっと違和感あったかな。ズバズバ進む推理小説ばかり読んでるし。

一同 …あゝ。

細田 …そういえば僕の画面みんな見れるんだっけ。じゃあ挿絵のページでも少し見せようかな。登場人物紹介がこんな感じ。

一同 …おー！

前田 …皆、すごくイケメンじゃないですか！ 倉林先生とか。

細田 …表紙もこんな感じだし、すごく少女漫画っぽいでしょ。

小林 …確かにそうですね。

細田 …そして二ページくらい進めるとこんな感じ。最初に同級生が自殺したところ。
前田 …結構アレですね。

細田 …最初が結構多くて。パラパラめくっていくと、次が家族で食べてるところ。ナメクジのやつ。

長谷川 …ああ、エスカルゴの。

細田 …ナメクジじゃなかったっけ？ ……エスカルゴか。

「フランス料理って、ナメクジを食べるんでしょう？」ってセリフがあるところだよな。

小林 …ありましたね(笑)

細田 …で、これが間違えて見ちゃった例の……。これさえ見なければ大丈夫だった、キラキラしてなんだろうって言うところ。

一同 …あゝ！

細田 …そして次が車に轢かれるところ。

長谷川 …わりとがっつり描かれるんですね。

細田 …でも今見せた。ベースくらいでしか絵はないかな。ナメクジ食べて、宝石見て、車轢かれて、その次は野球ボールを拾

つてもらって……。野球ボールのところってわかる？

前田 …W 大の神山君と初めて会うところですよな。

細田 …その次はスポットライトが落ちてきて……。つてところ。

最初はこんな感じだけど、後半はもうちょっと少ないかな。

小林 …せりの絵とかあるんですか？

細田 …えっと、あつた気がするんだけどな。

ここだね。ちよつと変なシーン見ちゃったよって。

前田 …イメージより普通な感じですね。

細田 …もろにせりをやっているという感じは確かにないかも。

まあ、でも一人くらい角川つばさ文庫読んでいてよかった。

小林 …そうですね、面白かったです。

細田 …自分の本棚に置いておくと何だこれ、つてなりそうではあるけど。

前田 …確かに(笑)

長谷川 …時間が結構経ちましたけど、まだ若林来ないですね。

前田 …じゃあ途中参加してもらおうということで始めちゃいますか。

前田 …まずは事件を解くことができたか、ですね。

今回は参加できなかった会員のなつちゃんとかまいちちゃんからも一部意見をいただいでいて、これに関してはなつちゃんも解けなかったらしいです。他の方はどうでしたか？

長谷川 …私は知ってたから……。

前田 …そっか、一回目は昔すぎて覚えてないか。

長谷川 …そうだね。思い出しながら読んじゃったから、今回は解いたという感じではないかな。

細田 ……これ、どこまで来たら解けたってこと？

前田 ……どうなんですかね？ その定義も曖昧ですよ。結構実行犯の西田先生わかりやすくなかったですか？

細田 ……そうね。どう考えても西田先生しかいないじゃないやってのはわかって……。

長谷川 ……これ、どこでわかればいいんだろう？

前田 ……教員だけとかすぐに絞られましたよね。

細田 ……というかメタで全員グルだってわかるよね。

一同 ……あゝ。

細田 ……だって学校に潜入したシーンとかさ、夢なわけじゃないじゃん。

小林 ……明らかでしたよね。

細田 ……あれが夢なわけがないよな（笑） 推理小説なんだから。

前田 ……でも児童向けなんでもしかしたら夢オチの可能性も……。

細田 ……どうなんだろうね、これ。読者視点と主人公視点が結構ずれてるじゃん。

長谷川 ……結構知らない情報とか私たちには明かされてますよね。

一人称に近いわりに。

細田 ……そうそう。だからこの作品はどう考えても主人公には解けないようになってる、というか解けないじゃん。

前田 ……よっぽど推理が得意じゃないと厳しそうですね。

細田 ……怪しいのはわかるけど最低でも親はグルだな、じゃない？ というか三人くらい殺されそうになったところで、ビデオの宝石は盗品なんだな、じゃあみんなグルかな、って感じだったかな。これって解けたって言うていいの？

前田 ……私はその時点でそこまではいきませんでしたし、解けたと

いうことでいいんじゃないですか？

細田 ……だってビデオ見て恨まれる^{イコール} Ⅱ ビデオがやばかった。ビデオにやばそうところがあつたか？ よくわからない宝石があつた。その後美術の本見てたというシーンがあつたらこれ盗品だって気づいたんだなってなつた。

小林 ……なるほど。

細田 ……というかそれしかなかったというか。解けたというよりも、消去法でそれしかない感じ。

長谷川 ……確かに。易しかったというか、児童向けで誘導が結構ありましたよね。

細田 ……深読みしていいなら、最初にビデオ見た瞬間に、あつこのビデオまづいなじゃないかな。でもわかつてはいたけど最後の推理パートはなかなか見事だったかな。

前田 ……予想以上にみんなグルだったりして驚きましたね。母親もそうだったのか、みたいなの。じゃないとおかしい点も確かにありましたよね。

長谷川 ……母親、最後嫌そうな感じというかパパは仕方ない感漂わせていましたけど結構グルでしたよね。

前田 ……最初警察に対する態度がモンスターパーアレント感ありましたけど、そういう詮索とかされたくないのもあつたのかな？ と読み返しててちよつと思いましたね。

一同 ……あゝ。

細田 ……でもあれはモンペなだけでいいんじゃないかな。

前田 ……やっぱりその解釈でいいんですかね。まあ当時はモンペな

んて言葉なんてないと思いますけど。

細田 .. 警察の介入に関してちよつと思ふところがあつたけど、それは後でいつか。

そういえば初見読みだったのつて、僕だけ？

前田 .. いや、今回はどの本をやるのか募つたので、私もなんだかんだ言つて初見です。

小林 .. 私も初見ですね。

細田 .. どころへんでみんなグルだつて気づくのか？ あつ、でも潜入したところで全員グル以外ありえないつてなるのか。

前田 .. 夢才チじやなければ自動的にそうなりますよね。

細田 .. 途中で怪しい人が西田しかいないのか。

前田 .. 教員紹介がボール拾いあたりでありましたけど、その後は主要人物以外だと音楽教師しか接触なかつたですもんね。

小林 .. 確かにそうだつたね。

前田 .. しかもライト落とした後に、犯人が「ふー、やれやれ。音楽教師に見つからなくてよかつた」みたいなこと言つてたんで絶対除外じゃありませんか。

長谷川 .. 後は倉林先生がー、くらいじゃないですか？

若林 .. 倉林先生はそうね……。

前田 .. おつ、来た！

若林 .. 来ました。遅れてごめんなさい。

前田 .. いえいえ、全然大丈夫。お疲れ様です。突然で申し訳ないんだけど好きな作家を含めた自己紹介をお願いします！

若林 .. 工学部三年の若林です。好きな作家は、はやみねかおるです。よろしくお願いします。

前田 .. 突然だつたのにありがとうございました！

で、本題に戻るけど倉林先生がなんて？

若林 .. 倉林先生は学校辞めようとしてるし、流石に違ふかつて。

前田 .. 確かに私もそこら辺で除外したかも。

細田 .. 議題の解けたかどうかつてどうやって結論づければいいのか。だろうね。

小林 .. 難しいですよ。

前田 .. 解かせられた？ 誘導された？ 解けたという定義がそもそもあわないんですかね？

若林 .. ない、ですね。

細田 .. 解けたというか、それしか答えがないというか。

前田 .. なんていへばいいですかね、結論。

細田 .. あるべき答えには全員たどり着くものだ、かな。読み進めていけば自動的に解けるつていうか。

前田 .. じゃあこの議題は推理シーン前には絶対に解ける仕様になつてゐるつて感じでもいいですかね。

長谷川 .. いいと思うよ。

前田 .. じゃあ次の議題に行きます。真知子の転校が事件前に決まつていたことについて、です。お父さんは最初の事件が起きることを予測して拠点を変えたのが少し気になつたので、他の方の意見を聞きたくて入れました。

細田 .. あまりそういう視点で見なかつたな、個人的には。

前田 .. 最初死んでから転校したのかなつて勘違いしてて、あれ？ つて戻つてきたから気になつたんですかね。

長谷川…よく考えたらなんでこのシーンあったか微妙だよな。

前田…よっぽど運が悪かったとかですかね。じゃなきゃ最終日に
出会うなんてなかなかないですよな。

細田…個人的にはこのパーツがないと自分の父親が真犯人という
結論にはならないんだよなとは思うけど。

前田…メタ的にですか？

細田…というより論理的にかな。前の学校の生徒の死と今の学校
の生徒の死にもし関係があるとしたらその両方に接点があ
るのが作中だと自分の親しかいないから。

小林…なるほど。

細田…だから自分の親が共犯者Aだった、というよりも真犯人だ
ったというのを推理するパーツにはなるのかなって感じ。
多分そのためだけにあるシーンな気がする。

話を盛り上げるための要素とかの話を抜きにして、推理の
部分について語るならばそういう要素があったのかなって
僕はそれ以上のことを思わなかった。

前田…なんとなく引っかけたことを議題に挙げただけなんで、
それでいいと思います。とても納得しました。

細田…確かにその違和感をもっともな気がするけどね。

前田…次の議題は神山英人はどこまで計画的に真知子と出会った
か、です。一回目はボール拾いで、二回目はナンパから救
出するじゃないですか。

若林…そうだね。

前田…どこまで計画的だったと皆さん思いますか？

若林…一回目は計画的なんじゃないかな。

細田…でもボール飛んでいったのは偶然だよな。

小林…それは偶然だとは思うな。

細田…同級生が野球ボール飛ばしすぎちゃっただけ、みたいな感
じだったよね？

長谷川…そうですね。

前田…でも計画的には来てたんですかね？ その時点でこの学校
が怪しそうみたいなの。

小林…でも確かその時点で顔を結構見てたんですよ。顔は知っ
ていたけどそこで偶然会った感じですかね。

細田…あれ、なんだっけ。同級生の家が近くてそこら辺にいたみ
たいなこと言ってた気がするんだけど。
あれは嘘じゃないんだよな。

前田…えっ！嘘じゃないですか？

細田…あれ、嘘だっけ？

前田…いや、特に明言はされてないんですよ。基本は主人公視点
からしか見てないじゃないですか。神山君視点はなかった
んで、私は嘘かなって思いました。

細田…そっか、嘘言ってもわからないのか。
結構嘘八百言ってるよね。

小林…ほんとに友達の家があったか、手塚学園を調べてて近くに
いたかって感じじゃないですかね。

前田…私的には偵察かなって思ったんですけど。

細田…でもボール拾ったとき、どっちから飛んできたかわからな
い顔をしていたみたいなの書いてなかったっけ？

前田 …あゝ。

細田 …普通に考えたらボール飛んできたのって校庭からだよな。

どっちから飛んできたんだろう？ つて普通キョロキョロ
しないよね。

長谷川 …そうですね。

細田 …どうなってるんだらう？

単純に偵察に来て、近くを歩いてた感じなのかな。

若林 …ここは視点変えてるのか、そういえば。

細田 …たまに視点変わるよね。

前田 …わりと神山君と一緒にの時じゃないですか？ まあ、一回目

は偵察か偶然かよくわからないってことでいいですかね。

若林 …そうだね。

前田 …もう一個のナンパの方が私は気になりますけど。

小林 …これはわざとでしょ。

細田 …そのわざとっていうのは不良を操っていたのもってこと？

前田 …私はそう思いました。

細田 …不良を操っていたのもそうなのか。確かにできすぎてる感
あるね。最初に会ったやつはたまたま会っただけ、なくて

も良いシーンだって考えて、もしかして顔だけ確認しにき
た可能性もあるけど。確かにそうなのかも。

若林 …うーん、確かにそうかも。

前田 …最初は結構罪悪感があったみたいな描写あったんでそうじ
やないかなってなりました。それにしてもだいぶ逼真な演

技してもらってますけど(笑)

小林 …ちよっと逼真すぎますよね、これ。だって相手ナイフ出し

てきてるんですよ。

細田 …不良がナイフ……とは確かに思った。ナイフ持っているの
は流石にやりすぎじゃん。

長谷川 …首筋にまで当ててますもん。危ない。

細田 …そうそう、もう強盗犯じゃん。

前田 …誰も助けてくれない、からの……が王子様演出というか仲
良くなるための作戦だったんですかね。

長谷川 …それか後を尾けててたまたまとか。

前田 …そっちもそっちで気持ち悪くない？

一同 …(笑)

若林 …まあ、尾けてるくらいはしてるだろうけど。

長谷川 …尾けてて大チャンス！ みたいな。

細田 …僕的には初見は尾けててたまたまだったのかなって思って
いたけど、確かによくできすぎててわざとかなって感じが
今はするかな。

前田 …手押し車もなかなかですよね。演技させられたのに手押し

車が突っ込んできたら怖いです。

細田 …手押し車も準備してたのかね？

若林 …工事現場で見かけた手押し車って書いてあります。

細田 …でもこれ坂がないと駄目だよな。

あれ、坂じゃなかったっけ？

小林 …坂道下ったところですね。

細田 …ちよっとよく坂道があったのかな。ちよっと怪しく思えて

きちゃうな。

一同 …(笑)

細田 …明らかに未成年の不良とか書いてあったよな。
前田 …そうですね。

細田 …大学の伝手とかなのかな。そういうパイプがあったのかな
…っていうのはちょっと引つかかったかな。わざとっぽい気
もするけど神山君はそれを実現できたのかなって感じは若
干するけど。

若林 …「近道をしように」とって書いてあるから普段とは別の道を通
っている可能性が有りますね。読めるの？ …っていう。

前田 …コンサートの帰りだからなかなか尾けてないと厳しいよね。
もしくは本場にたまたま出会うか。

細田 …コンサートの帰りって言っても駅からの帰り道でしょ。

前田 …あつ、駅ですね。

細田 …だから毎回駅から帰る時について…。それで駅から
の近道をたまたま覚えて、毎日そこに不良を置いといて。
たまたま通った時に襲うっていう。

一同 …(笑)

細田 …でもそう考えるとちよつと厳しいよね。

長谷川 …確かに。バイト代とかそれだと大変そうですね。

細田 …だってコンサートの帰りって夜九時とかだよな。

小林 …はい。

細田 …毎日さ、不良に夕方五時から午後十時までここで駄弁つて
いてよって。

若林 …やばいですね。

細田 …そしてたまたまこの女の子通った時に絡んでよって。ナイ
フも毎回持っていて、首に突きつけてよ。そしたら俺、

手押し車持って突っ込むからさ、…ってやってたっていうこ
と？

一同 …(笑)
細田 …やっぱりちよつとすごいな、それ。

でもそういうことだよな？ …わざとなら。

若林 …わざとなら、そうなりますよな。

前田 …そう考えると大変な計画ですね。

細田 …なんかこれ、たまたまじゃない気がしてきたな (笑)

長谷川 …えー、これたまたまなんですかね？

細田 …たまたまじゃないってことでいいのかね？

前田 …たまたまじゃないなら相当な労力ですけどね。

小林 …やばいですよな。

前田 …この時点で父親について掴んでた、掴んでいたというより
怪しいくらいなんですかね？

細田 …神山君は掴んでたんじゃやない？

前田 …ここまでするくらいなら警察にリークした方が早くないで
すか？ …後半の議題に繋がっちゃいますけど。

細田 …えつ、揉み消されるからできなかつたんじゃない？

前田 …あー、そっか。

細田 …だって学生百人とかが劇に来たら流石に口に戸は立てられ
ないというか。だけど警察にリークしたところで神山君が
消されて終わりってなっちゃうから多分できなかつたんじ
やないかな。

小林 …なるほど。

前田 …そしたら神山君は誘導するの大変ですね。真知子は全然ル

トト通りに進まなさそうじゃないですか。

細田 ……そもそもここまでやって付き合うか微妙じゃん、というか普通ここまでやって付き合えるのか？

若林 ……付き合えなくても救った人くらいで近づければいい、というか話を聴ければよかったです。

細田 ……で、あわよくば付き合えればラッキーみたいな。

前田 ……最終的にこの人玉の輿ですもんね。

細田 ……えっ、どっちが？

前田 ……神山君の方です。絶対真知子の家お金持ちじゃないですか。

細田 ……でも捕まってるじゃん。

長谷川 ……犯罪者だからどうなんだろうね。

細田 ……犯罪で儲けた金って賠償とかで全部没収されるだろうからそうはならないと思う。

前田 ……あ、そうですね。

長谷川 ……お母さんがまた働き始めたみたいなの描写ありませんでしたっけ？ 節約始めたみたいなの。

前田 ……そうだっけ？ 最後別居しようって言ったことくらいしか覚えてないな。

長谷川 ……こんな生活も楽だ、みたいな話があった気がする。

小林 ……忙しくて何も考えられない方がずっとましだっけとところ？ でもそれは差し入れに行くので忙しいってことだと思っ。

長谷川 ……あー、そうですね。

細田 ……でも玉の輿にはならないでしょ。

前田 ……そうですね、私の勘違いでした。

細田 ……まあ、一応可愛らしいから。

前田 ……最初の方ですごくアピールしてましたよね。

細田 ……そうそう。なんだ、このすごくメタい描写は？ っ。

一同 ……(笑)

前田 ……いつもこう思って生きているのってなかなかですよ。

細田 ……いわゆるヒロインみたいなそこそこ可愛くて……みたいな子ですよって。

前田 ……脱線しまくりでしたが、結局この議題は故意に出会ったってことでもいいんですかね？

細田 ……あまりやる気なかった説も自分の中では若干あるんだけど。たまたま来てて学校偵察していたら、ボールがたまたま飛んできて、たまたま目的の女の子に出会って、ちよつとこの女の子のとき怪しいなって思いつつぶらぶら歩いてたらまたま不良に絡まれてるところに遭遇して、助けたら運よく伝手を、さらに付き合えてみたいぐらいだったのかもしれないでしょ、と。

前田 ……なるほど。

細田 ……まあ、この小説全体が細かいところ雑だなって思ったかな。多分そんな細かいところ考えてないんだろうな、みたいな。

若林 ……そうかもしれないですね。

細田 ……次の議題もそうだけどさ。ちよつとそう思ったり思わなかったりって感じかな。

前田 ……じゃあその雑って言われた次の議題に行きますね。恭子の殺害に用いた盗んだ車について、です。

小林 ……あー。

前田 ……なんかすごくなかったですか？ よくわからなかったので議題にしたんですけど。

細田 ……適当に駅前から盗んできて轆いたんじゃないやつ？

長谷川 ……そうですね。

前田 ……合鍵で開けて使ったらしい、という情報がよくわかりませんでした。壊したってことですか？ でも壊したら使えませんよね。

小林 ……どうなんだろう。でもそれも時代的なあれでどうにかなかったらいいじゃない？ 最近の車だとできなさそうかなと思えました。

細田 ……足がつかない車を持っていた説あるよね。学校自体が犯罪に手を染めてるから、もしかしたらそれ用の車があるのかもしれない？

前田 ……盗まれたサラリーマンもグルってことですか？

小林 ……車を盗まれた方のサラリーマンも少し出てくるんですよ。

細田 ……出てくるね。だからそのサラリーマンもグルの可能性があるっちゃあるじゃない。

長谷川 ……あー。

細田 ……だから毎日駅前に停めているサラリーマンに有事の際は車を勝手に借りるからよろしくね、とか言つといて。サラリーマンは借金とかあつて、みたいな。

前田 ……なるほど。

細田 ……勝手に車使うけどお前は知らないふりだけをしとけば大丈夫だからって言われてるとかありえる話じゃない？

若林 ……確かにありえそうですね。

細田 ……それ以上はわかんないよね。細かいところ何も考えてないだけじゃないかって正直思うんだよね。深読みするならそれかなくて感じ。

小林 ……でもサラリーマンがグルだったとしても実行犯の西田先生って結局下つ端なんですよ。

若林 ……確かに上が知らないみたいなお話がありましたよね。

小林 ……下つ端がサラリーマンを動かせるのか少し気になりました。

細田 ……それなら学校に犯罪に使う用の合鍵が置いてあった説は？学校の先生って全員捕まってるでしょ？

長谷川 ……全員ではないです。

細田 ……じゃあ学校に全構成員が使えるような車の合鍵が置いてあったのかな？ ちよつと考えづらいけど深読みするならね。

前田 ……そうですね。まあこら辺に関しては作者がそこまで考えてたかもわからないので、そんな感じで次に行きますね。

前田 ……次は治子の殺害現場でなぜ二人を殺さなかったのか、です。

細田 ……治子って誰だったわけ？

長谷川 ……治子は眼鏡で宿題やつてくれる人です。テープを見た三人の中では最後に自殺に見せかけて殺された人です。

前田 ……西田の独断ならみんな殺しちゃいそうじゃないですか？

小林 ……これは二人だと片方に逃げられたらまずいからじゃない？

長谷川 ……しかもバタバタしてなかった？ 計画的でもないじゃん。

前田 ……そっか、呼び出されたんだもんね。

細田 ……というかこれさ、紐かなんかで縛って殺しているんだよね？

小林 ……多分そうですね。

若林 … ロープをかけてつて感じですね。

細田 … よく自殺に見せかけられたよね。

若林 … ちよつと無理がありますよね(笑)

長谷川 … 紐も現場調達してましたもん。すごいですよ、何も持たずに行くという。

若林 … 「物干しのロープがすぐ見つかったのも幸運だった」って。

小林 … なかったらどうする予定だったんだろ。

細田 … しかも紐で殺したから自殺に見せかけよう、自殺するならば自宅の浴槽かな、もしかして遺書とかあるのかなつて探したらあった、みたいな。

長谷川 … 遺書に関してなんですけど、真知子は「便せんは白紙だった」って言うてるんですよ。ボールペンで書いたなら跡とかないのかなつて。

前田 … 確かに。

長谷川 … わざわざ見たなら何かあるのかなつて思ったらその後一切出ないという。

若林 … (笑)

細田 … 鉛筆で書いたのかもしれない。

長谷川 … 「机の上には、ボールペンと便せんが乗っていた」って書いてありました。

細田 … そっか、ボールペンか。

前田 … すごく筆圧が薄い人だったとか？

長谷川 … でも便せんもボールペンがあつたらなんか書いたんだなつてならない？

前田 … 真知子だからな。

若林 … 真知子だからな。

… なんだ、真知子だからなつて(笑)

前田 … 真知子、全然わかんないじゃないですか。

長谷川 … 遺書チェックというか、書いてあつたら自殺だけど、ないから自殺じゃないみたいいな基準もどこかにありましたよね。

小林 … なんか言つてたね、女の子が遺書を残さずに自殺するのはおかしいみたい。

細田 … 僕は警察の動き方にちよつと思つるところがあつたかな。車の事件ではちゃんと動いてたのに、スポットライトの事件だとほとんど動かないじゃん。

前田 … そうですね、ほとんど描写がなかった気がします。

細田 … あれは学校内で起きたことだからかなつてちよつと思つた。学校側がグルだから。

前田 … あゝ、揉み消したつてことですか。

細田 … それでいうなら三件目の事件は学校外の事件なのに警察動かなかつたのかなつて。

長谷川 … 靴も見間違いつて言つてますよね。

細田 … そう、完全に警察あれだよな。

若林 … 揉み消す方に回つてますね。

前田 … 最後のあのレベルになるまで動けない、もしくは動かないんですかね？ 表に出たから流石に捕まえないやつて。

長谷川 … 確実な証拠が欲しかつたんですかね？

細田 … 一件目はちゃんと動いてたのにな。

若林 … わかんなくつたんですよ、まだ。西田の独断だから。二件目はこれわざとだなつて。

細田 …二件目くらいから揉み消し始めたって感じか。
長谷川… 西田がやっつてることまでは辿りつかなかったけど誰かやっつてんなって(笑)
前田 …見られたってことは報告してあるのかな？
長谷川… してないと思う。見られたことも知らなかったみたいな。
お父さんが最後に何も知らなかったって言ってたから。
小林 …あ、ほんとだ。
前田 …でも私、お父さんを一番信用してないからな。
長谷川… 他の幹部にも一応確認してあるから大丈夫じゃない？
前田 …罪を軽くするために、とかありそうだけどこれも明かされてないからね。報告してないのかな、西田さん。
長谷川… 一番上にはしてないっぽいね。
若林 …自分のところで消そうと思っただんじやない？ みたいなことは書いてあったよね。
前田 …そっか。
細田 …なんか僕が話を脱線させちゃったね。
前田 …いえいえ、全然大丈夫です。
長谷川… 長くなるほど嬉しいってやつですよ。
前田 …そうですね。
細田 …なんで治子の現場で西田は殺さなかったのか、か。
前田 …元の議題はそうですね。
若林 …二人って誰だっけ？
長谷川… 真知子と幸枝ですね。
細田 …そうそう、担任と結婚する幸枝ね。

長谷川… ガチャって開けて出てくる辺り隠す気ゼロですよ。
細田 …というか主人公と幸枝だけやけに可愛く描かれてるよね。
一同 …(笑)
細田 …あからさまなんだよな。
前田 …私は物語内で幸枝がすごく可愛い子だとは思わなかったんですよ。お母さん似とか書かれてるからかな？
小林 …確かに。
前田 …脱線も沢山しましたが、元々計画的ではなかったため、流石に二人も殺す余裕がなかったってことでいいですか？
細田 …というか自殺に見せかけるのが第一だったんじやない？
若林 …なるほど！
細田 …だって殺すにしてもまた別で殺せばいいじゃん。住所だつてわかってるんだし。
前田 …確かに。色々ガバガバですよ、この時代って。というか今だったら情報漏洩扱いになりそう。教員までわかるんだって驚きました。
若林 …まあ、でも昔は普通だったはず。
細田 …昔というか僕よりちよつと前くらい？ 教員なら今の時代でもわかりそうだけだな。
話戻すけど、二人追加で殺したら流石に自殺に見せかけられなくなっちゃうからでしょう、が僕の意見かな。西田の目的は見た人を殺すことじゃなくて、第一はばれなくすることだから。
前田 …あ、なるほど。
細田 …その行動原理からすると無駄に殺していることないからね。

長谷川…幸枝が狙われたのも倉林先生から聞いたかも知れませんが、理由はありますか？ だかればれた人だけ殺せばいいみたいな。

若林…事前に計画して殺したっていうのもあるんじゃない？

細田…あとは両方こっち側の人間だからっていうのもありそう。

小林…なるほど。

細田…だって幸枝は先生と結婚してて、主人公に至ってはボスの娘でしょ？ 流石に殺せなかったっていうのもあるかな。

若林…でもボスの娘って発覚するのはもう少し後ですね。

細田…それどこだったっけ？

前田…そっか、その後の一回目の視聴覚室への忍び込みの時から、それまで知らなかったのか、名字同じだなくらいで。

細田…名字同じだなんて(笑) まあ多分そのくらいなんだろうね。

小林…校長先生が理事の娘だから丁重に。

前田…もしかしたら視聴覚室忍び込んだ時点で殺されそうだったってことですかね？

細田…あゝ、ありそう。西田テキストすぎるな。

前田…じゃあテキストな西田ってことで、次いっちゃいますね。

一同…(笑)

前田…次は西田先生の「なぜあんな事をやってしまったんだろ

う」等の言動について、です。さっきの視聴覚室での発言ですね。これも私の単なる興味に近いのですが、事件のことだと思えますか？

細田…えっ、どのシーン？

前田…一回目の視聴覚室の忍び込み後で、理事の娘だからって言

われるシーンあたりですね。変な発言しちゃったよって。

若林…西田先生が胸の内を少し語って、変な奴だなんてなること路ですね。

長谷川…ここか！

小林…私がついているものと一二六ページです。

若林…角川だと一三六ページ。

前田…みんな持っているのバラバラですもんね。

細田…まあ一三〇ページくらいか。

小林…おそらくその辺ですね。

細田…それって第二部始まる前？ 後？

長谷川…後ですね。

細田…始まった後すぐ？ あー、この本挿絵が入ってるからだいぶページが違うんだ。一五〇ページくらいだ。

小林…なるほど。

細田…総ページ数がきつと多いんだよ、三〇〇あるもん。

長谷川…私のは二五〇ないくらいなんで。

前田…児童向けだと文字も大きめですもんね。

議題にもどしますが西田先生、若いうちに死ぬのは素晴らしいとか色々語るじゃないですか。勝手な想像なんですけど、議題の部分も事件の反省というよりあくまで過去の反省なのか、って個人的には思いました。皆さんはどう思いますか？

小林…この前の、「死ぬより怖いのはね、希望を失って生きることだ。それより悪いのは、自分自身を浪費している」と知りな

- がら生きる事だよ」って書いてあるんで、組織に消されなように事件を起こしているのを自分自身を浪費してるって思っ、罪悪感もあつて、嫌になつたんじゃないかな。
- 若林 ..色々解釈できますよね。
- 細田 ..僕はどっちかっていうと生き方って気がするけどな。その前で「若いうちに死ぬというのも、悪くはないよ」って言ってるじゃん。これが、俺は若いうちに死ぬなかつたなっていう風に言ってるのになつて。
- 長谷川 ..それが若いうちに別の道に進んでいたらこんな事件も起こさずに済んで輝かしい未来があつたかもなっていう感じなのかもしれない。
- 前田 ..美術か音楽か悩んでたみたいな感じでしたもんね。
- 細田 ..ピアノをやっていたんだよね、確か。
- 小林 ..そうですね。
- 前田 ..やっぱり後悔の念が消えないのかもって書いてありますね。
- 若林 ..今は組織の競争の準備をさせられて、こんな未来じゃなかつたかと思うのも無理のない話ではないでしょうか。
- 細田 ..そういうえば主人公、西田先生はそんなに怪しくないと思ってるんだな。
- 若林 ..怖いとは感じているけど、人を殺すはずはないって書いてありますね。
- 前田 ..確かとても可愛いみたいなことが書いてありませんでしたっけ？ 野球してるところ辺りで、小柄で愛されキャラみたいな。
- 細田 ..温厚な人って書いてはあつたかな。
- 小林 ..えーっと、どこだっけな。
- 若林 ..「小柄で童顔なので母性本能の強い生徒からは『カワイーイ』先生と慕われ」って書いてありますね。
- 前田 ..顔、というか見た目からしてありえないでしょっていう除外だつたんですかね。
- 細田 ..確かに。というか三人が最初に忍び込んだの視聴覚室じゃん？ で、それが殺される原因になって。真知子が最初に忍び込んだのも視聴覚室で同じ人に見つかつてんじゃない。最初の方は誰とは書いてないけど。あからさまに西田先生だよな？
- 長谷川 ..そうですね。
- 細田 ..西田先生が視聴覚室を管理してるってことでしょ。
- 若林 ..せりの準備がちよくちよく見張っていたか。
- 前田 ..どつちにしるそんなとこに置くなよっていうのはありますけどね。
- 長谷川 ..そんな見張りに来るならせりの日だけ家から持つてくればいいのに。
- 一同 ..(笑)
- 細田 ..木を隠すなら森の中なんじゃないの。
- 長谷川 ..でもビデオのテープ持つてても怒られなさそうじゃないですか。見られたところで。
- 細田 ..見つかった時にこれ何？ みたいな。
- 長谷川 ..もしくは物理の先生と同じ手法にすればよかつたじゃないですか。関係ないやつも入れてから盗品映像みたいな。
- 小林 ..確かに。

若林 .. やつぱり西田先生は雑なんですわね、色々。

細田 .. そうね、西田先生が雑なんだろうな……。

前田 .. 雑じゃなければこのままずっとせりをやれていた可能性が
ありますもんね。

長谷川 .. 殺さなかったら治子も気づかなかっただろうし。

前田 .. 神山君だけだったら永遠に解決しなさそうですし。

小林 .. 流石に無理だろうね。

若林 .. 消されて終わりですね。

長谷川 .. でも文化祭で盗品が見つかったらどうにかなりそうな気が
するけど。

細田 .. 見つからないでしょ。

長谷川 .. 警察に盗品を買った人が取り押さえられてるってだけじゃ
駄目なんですかね。

若林 .. 神山が警察にリークしてってことか。

長谷川 .. 舞台やってなくても盗んだ絵が見つかればいいんじゃない
ですか？ 片っ端から捕まえていけば。

細田 .. 結局なんでそこにあるってわかったんだっけ？

前田 .. 神山君、どうやって知ったんだその情報みたいなことが結
構ありますよね。

長谷川 .. 絶対その場になかったし、皆死んでるのによくあんな
完璧な劇が……って感じですよね。

前田 .. ある程度は捏造とかありそう。

細田 .. 確か若干事実とあってないところもあるじゃん。

若林 .. 上に確認とっていたりとか。

小林 .. この辺はあれじゃないですか、倉林先生と幸枝を見つけて

からだから。

前田 .. 確かにそうかもしれせんね。

この話は議題にもあるのでまた後で詳しく話すとして、西
田先生の思想に関してはこれで終わりです。次の議題に行つて
しまっても大丈夫ですかね？

一同 .. はい。

前田 .. 次の議題は今までのせりの品物はどのように渡していたの
か、です。これも単なる興味なんですけど。

若林 .. 毎年の文化祭じゃないの？

前田 .. 年一つてこと？

長谷川 .. そもそも宝石ってどうしてるんだっけ？

前田 .. それは私も思った！

長谷川 .. 生徒が掘った宝石の展覧会とか？

一同 .. (笑)

若林 .. 王冠とかも作りました、みたいな？

小林 .. でもさっきの細田先輩の挿絵だとネックレスだったじゃな
いですか。

細田 .. あー、そうね。

小林 .. ネットレスくらいだったら絵が入るくらいの薄い箱に入れ
られないですかね？

前田 .. なるほど。

細田 .. まあ、毎年文化祭で渡せばいいんじゃない。

そんなにゴッホの絵とか出てこないだろうからそれくらい
でいいでしょ。

前田 ……確かにそうですね。
細田 ……というか麻薬とかも売っているんだから他にも売るところあるんじゃない？
小林 ……理事を転々としていると言っていたので場所替えとかもしているんですかね？
若林 ……あるかもね。
前田 ……じゃあこの議題は、せりは年一ペースで色々なところで開催してることいいですかね？
一同 ……大丈夫です。
前田 ……次は何回か話題に上がっていましたけど、告発を劇でする意味とは、です。
細田 ……警察に揉み消されないようにするため？
若林 ……でもお父さんが捕まるシーンで、「それで、警察は今度の殺人事件の捜査を手控えていたんだね」ってお父さんが言っているんですよ。
前田 ……第三部の五の直前くらいですね。
若林 ……これ、英人が警察が表に出ないように動かしていたってことですかね？
前田 ……随分前から怪しいというリークをしてってこと？
若林 ……下手に表に出ないように穏便に処理してたってことかな。
細田 ……優秀だな、ただの大学生なのに。
一同 ……(笑)
細田 ……W大って早稲田でいいの？
小林 ……私はそのつもりで読んでましたけど明言はしてないですね。

細田 ……手塚学園は武蔵野あたりって書いてあったけど、早稲田の地域ってあってる？
まあ大きくずれてはないか。
前田 ……東京内ならそれなりに動けるんじゃないですか？
細田 ……普通に考えてA大はよくあるけど、わざわざW大だぜ？
Wなんて早稲田くらいしか知らないんだけど。
一同 ……(笑)
細田 ……WとTとKが出たらそれっぽいじゃん。
長谷川 ……大体そうですね。
細田 ……やっぱり早稲田だったんか、こいつ。
前田 ……所々頭良いアピールみたいなのありますよね。ナンパから助けてもらった後に自己紹介で早稲田ですって言われたら、おろつてなるんじゃないですか？
細田 ……ちよつとむかつくけどな。
小林 ……まあお父さんの印象としてもいいんじゃないですか？
若林 ……確かによさそうですね。
長谷川 ……結構仲良くしてましたもんね。
細田 ……お父さんって一回英人のこと調べてるよね？
前田 ……そうですね。幼馴染みとかにたどり着かなかったんだってなりました。
細田 ……あ、そう思った？ あれってなんで調べてたんだろね？
長谷川 ……娘の彼氏の身辺調査だと思えます。
前田 ……確実ではないですけど細かいことは触れてないみたいなん
でそうなんじゃないですか。
細田 ……そんなことするんだって思った。

長谷川…女性関連しか調べてないってことですかね。一日見張ってたりしそうですけど、その時はたまたま事件のことについて調べてなかったんですかね。警察に出入りしてました、とかそういうのばれたらやばそうですけど。

若林 …確かに。

前田 …でも確かその頃行方を晦ましていたって書いてありましたよね。親戚の家に行ってたみたい。調査前後に怪しいってなつて逃げたのかな。

長谷川…よくたまたま被んなかったよね。

小林 …出入りしてるところを見られていたら終わりだね。

長谷川…後は娘さんの学校の周りをうろうろしてました、とか。

一同 …(笑)

前田 …真知子というツテを得てからはうろうろするのやめたりはしてそう。

細田 …頭よく立ち回っているよね。

前田 …やっぱりW大なんで。

長谷川…一人だけずるいよね、全部ちやつかりいただいちゃって。

前田 …ほんとそうだね。じゃあ探み消すことを防止するために劇形式で行ったってことでいいですかね？

細田 …どちらかというと警察は結局英人側だったわけだし、全部パーツが揃ったからとかなのかな。一番派手に…、でも派手にやる必要ないよね？

前田 …生徒とか衆人監視の中でやったら逃げられないとかなんてすかね？

細田 …それは確かにありそう。

長谷川…劇に注目している間に包囲して…：…みたいなこととしてそう。

若林 …学園祭当日ってことには意味がありそうですかね。

前田 …商品の受け渡し中になってことか。

細田 …そうね、いいタイミングでばらしていいですか。じゃあ逃げられないここでやろうみたいな。完全に警察と繋がっているもんね。

一同 …そうですね。

前田 …じゃあそんな感じで次に行きます。

前田 …これも話題に上がっていましたが、なぜ英人は事件の詳細がわかっていたのか、です。

これはさっき言っていた倉林先生と幸枝と真知子の情報を元にしたってことでいいですかね？

若林 …ブラス警察の情報も使えるんじゃない？

前田 …もしかしたらさっき言っていた真知子が気づかなかった遺書を書いた跡も警察は回収してわかっていたとかありそうですね。

長谷川…そうだね。遺品見に行った頃には全く出てこなかったから。

細田 …まあ、あり得ない話ではない。

若林 …西田先生捨てなかったんだね、とはなるけど。

長谷川…丸ごと持っていけばよかったのに。

前田 …計画的じゃないからしょうがないよ。

長谷川…病室に入ったところとか絶対駄目でしょ。

前田 …その時は、やばい！ やばい！ ってなつてたんじゃない？ 殺そうとしたのに殺せなかったみたい。

小林 … 西田先生命令されてやっているけど、犯罪に向いてない感じするよね。

一同 … (笑)

前田 … わざわざ入院中に狙わなくてもってなりましたけど、この後すぐに逃亡しますし、このタイミングじゃないと逃げられてしまったかもですね。

細田 … そうかもしれないね。

前田 … この議題に関してはこの前にも話しましたし、こんな感じで大丈夫そうなので、次に行きますね。

前田 … 次の議題は、殺人はあくまで西田の独断で、パパが知っていたらそんな事は許さなかったろうとあるが、パパは本当に殺害を企てるような人物ではなかったのか、です。

若林 … あゝ。

前田 … 私は西田が消されるとか焦っている時点でやっちゃう人物じゃないかなって思うんですけど、皆さんはどうですか？

細田 … 麻薬で人が死んでもあれだったもんね。というかあれだよ、ただビデオを見られただけで見た人全員殺そうとするのは流石にやりすぎだよなと思う。

前田 … 殺してなかったら治子の方も動かなかったでしょうしね。

長谷川 … だから殺す方がよくない、ということやらせないってことなんじゃない？

若林 … もっと上手く揉み消したって意味かもね。

長谷川 … そんな調べられるようなことはしないみたい。

前田 … わざわざ補足している辺り、英人はパパは良い人、という

かそこまで悪くない人だと思ってるんですかね？

長谷川 … 真知子が死なないように嘘八百言った感じもあるけどね。

お父さんめっちゃ悪い奴だったんだよって言ったなら、もう死ぬわってなりそうだし。

前田 … 確かに。

細田 … まあ、真知子が死なないように途中立ち回っていた感はあるしな。真知子が忍び込んだ時も家まで送り届けたりして夢と思わせたりとか。くそ悪い奴ではなかったんじゃない。

前田 … 私は児童向けなんで落とすどころというか、真犯人はパパだけどこまで悪くはなかった！ みたいな部分もあるのかなって思いました。

小林 … なるほど。

若林 … よくわかんないよ、パパの視点ないもん。

細田 … 確かにね。パパどうだったんだろね。

長谷川 … でも結婚した時から悪い人ってことだよ。お父さん十五年とか結構長く悪いことしてません？

細田 … 悪いことはしてる人だよ。

前田 … そうですね。悪い事をしてる現場には行く気にはなれなくてってことは、色々な学園とかでやってきたんですかね。

細田 … 普通に考えて一番の極悪人だもんな。

長谷川 … そうですね。悪い人だわかっていたけど好きだから結婚しちゃったみたいなき感じでしたもんね、お母さん。

前田 … それってどこだったっけ？

長谷川 … そんな感じかなって思ってただけで確実ではないんだけど。

どっちにしろ結構長い間やっていてなんとも思っていないか

ら結構悪い人ではあるのかなって。良い人ではないでしょ。
一同 ……良い人ではないね(笑)

長谷川…盗みと揺すり専門で殺しはやらないみたいね。

細田…基本的には金儲けのためだけに動いてた印象があるけどな。

小林…そんな感じですよな。

細田…まあ確かに積極的に人を殺す感じではないね。

若林…もっと深入りしていたら殺したかもしれないけど、このくらいなら殺さないよ、みたいな？

前田…最初はカセット見ても全然わかってませんでしたもんね。

この議題はこんな感じで大丈夫ですかね。

小林…良いと思います。

前田…じゃあ最後の議題なんですけど、どの部分がどんでん返しなのか、です。推薦でこの本に決まった時に少しウイキペディアを覗いたらどんでん返しと書かれていて、そうなのか…って思いながら読み進めたんですけど。皆さんはどこら辺がそうだと思いますか？

細田…これってどんでん返しだったの!? あまりあった気がしなかったけどな。

前田…私もそんな感じでした。

細田…ただ最後に一気にガンって真実が明らかになる系をどんでん返しと読んでいただけじゃない。

若林…かもしれないですね。

長谷川…お父さんだったんだってところじゃないですか？

若林…あるとしたらそこだと思う。

細田…そこか！ お父さんが一番悪い気がしていたからあんまり思わなかったわ。

若林…途中までずっと西田にスポットを当ててきたから、実はお父さんがボスだったっていうのは衝撃なのでは。

前田…なるほど。

長谷川…「この男だ！」って劇で言ってますからね。

一同…(笑)

長谷川…しかも真知子、「嘘だ…嘘だわ…」ってめっちゃ驚いてますからね。

小林…まあ。親が真犯人とはなかなか思わないんじゃない。

長谷川…でも服のことに気づいておきながらそこまで驚けるんだっていう。

若林…普通は父親のことそんなに疑わないでしょ。

長谷川…でも忍び込んだことをなかつたことにしたのは両親だって気づいてるわけじゃないですか。

前田…共犯者くらいに思っていたんじゃない？

小林…でもパパが捕まっても「今でも好きだ」って言っているから単純に信じたくなかつたっていうのもあると思う。

長谷川…あゝ。「パパ！ 逃げて！」って言いますもんね。逃すんだって思いました。

細田…よく考えたらこの本を通してずっと父親は良い人なのか。

前田…基本が真知子目線ですもんね。

小林…少なくともパパとしては良い感じでしたね。

若林…親バカでしたね。

細田…いやゝ、完全に視点が抜け落ちてたな。今思えば普通の人

の視点で読んでないな、反省反省。

長谷川…まあお父さんが真犯人だったことがどんでん返しだったという事です。

前田…これでレジユメの議題は終わりなんですけど、他に何かありますか？

長谷川…あ、さっきのところスポットライトまで当ててるよ、劇で。

前田…最初の方はどこにいるかな…って探してたりしてたのかな。

長谷川…あそこにいる！…って。

小林…でも席は前の方を取っていたんでしょ。

前田…あ、そうでしたね。

長谷川…いっぱいスポットライトを集めてパーンって照らして、この男だ！…って。

一同…(笑)

長谷川…そこだと思います、どんでん返し。

細田…この本面白かったよね、劇で全部のネタばらしという一番盛り上がるところがちゃんとあるじゃん。

小林…そうですね。

長谷川…演劇部の人はどんな気持ちでやってたんだろうって思いますけどね。

前田…私もそれ思った。

長谷川…ここまで来たらあと僕がやるから！…って。

一同…(笑)

長谷川…どういう気持ちで、どこまで練習してたのかも不思議ですけど、真知子に依頼が来なかったらどうするつもりだった

んですかね。横取りして作ってるじゃないですか。

若林…真知子が乗り気だったらどうするつもりだったんだろうね。

長谷川…そもそも劇の練習で部外者が学校にそんな入っていいんですかね？…どうやって入れてもらったんだろう？

前田…一応脚本枠で入れてもらったんじゃない？

長谷川…外部が？…ってなるけど自由な校風なんでしょう。

若林…演劇部の方から言ったら何も言えないんじゃない。

細田…外部講師みたいな感じなのかな。

長谷川…頼んだ人と違う人から脚本渡されるのもびっくりだけどな。

細田…真知子の彼氏だからって。

長谷川…頼まれた脚本だけど彼氏を書くから！…って彼氏が来るわけですよ、やだな。初対面の人が急に脚本持ってきて……。

前田…そこら辺はやっぱりW大だよ。

細田…W大かー。

若林…W大はでかいなー。

細田…W大だから、で信じられるのすごいな。

長谷川…W大なんですか！…じゃあお願いします！…みたいな。

一同…(笑)

細田…やっぱりそこら辺は雑だな。結構ストーリーそういうところがあるよね。

前田…まあ長編デビュー作なんで。

細田…というかこれ、普通の推理小説かって聞かれたらどう思う？

前田…それは私も思いました。わりと冒険がメインですよ。

細田…めっちゃめっちゃ少女漫画っぽいなって思った。主人公が女子高生だからかな。

前田 … 私はそこら辺は児童向けだからかなって思いましたね。
小林 … あー。

細田 … あまり普通の本ではないなーって感じはした。

長谷川 … 解説とかには「新しいスタイルを選んだ」って書いてありますよ。

細田 … へー、これって新しいスタイルなんだ。

前田 … 一九七七年に刊行された本なんで、その時は新しかったんだと思います。

細田 … そんなに古いのか!? 確かにその時代の本って読みづらい、
というか古めかしい感じがするじゃん。それはあまりなかつたな。

前田 … ライトノベルの先駆けの文庫とか書いてあったんで、読みやすさを追求していった結果そうなったんじゃないですか。
長谷川 … 「小説を書く前にラジオドラマの脚本とか書いていた」ってあります。

前田 … なるほど。

長谷川 … だから「会話と動作を中心に置かれた作品だ」って。

細田 … なんとなくわかる。

長谷川 … 「映画のワンシーンのようだ」って書いてある。

前田 … 確かに頭の中でイメージしやすかつたかな。

長谷川 … 赤川流とでも言うべき新しい推理小説のスタイルを作り上げたのである」って書いてあります。

細田 … へー。あと探偵がお前なんかい！ ってたったかな。

前田 … 私、最初そこがどんでん返しなのかなって思ったんですよ。

細田 … あー、それもあるかも、というかそれもあるのか。

主人公っぽい人が何もしないみたいな。これ主人公が絶対犯人にたどり着かないじゃん。

小林 … そうですね。

前田 … 思い込みもあって辿り着けないですよ。

長谷川 … 解説の最後に、「これは本格推理というよりサスペンスであり、サスペンスというより青春冒険小説に近いものである」と言ってるよ」って書いてあります。

細田 … 確かに青春冒険小説っぽいよね。

小林 … それがメインですよ。

前田 … 視聴覚室の件とかすごく盛り上がってましたもんね。

小林 … 流れで言うと、真知子が探偵気取りで色々やるけど結局は自分だけが何も知らなくて、ということを知って大人になるみたいなやつじゃない。

前田 … なるほど。

細田 … そうね、特にワトソンって感じでもないもんね。

前田 … 助けてくれるというより勝手に突き進んで、その結果を勝手に報告してくれるみたいな。

細田 … 首突っ込んでるだけだもん。首を突っ込んで何もしない。

一同 … (笑)

細田 … そういえばこの時期って娘が彼氏連れてくるって言ったらいいよってお父さんが言うのかな。

前田 … むしろ審査みたいな感じじゃないですか？

小林 … あー。

前田 … この頃って固定電話ですよ、親がプライベートにある程度干渉してくるイメージがありますけどね。

細田 …ちよつとジェネレーションギャップがあるな。
前田 …教師と結婚していることとか私は一番衝撃的でしたね。結婚早いなって。
細田 …この時期は結婚早いのか、今よりは。流石に平均初婚年齢が約三十歳の今とは違うよね。この時期って二十五歳、いや二十三歳くらいか、特に女子は。
前田 …あとお金持ちってのもありそうですね。
細田 …他にジェネレーションギャップ感じたことある？
僕は古いというわりにはそれくらいだったかな。ちゃんと電話も一家に一台あったし。僕たちが小学生くらいの頃にも連絡網とかあったでしょ。
若林 …そうですね。
細田 …そういう経験もあるからあまりジェネレーションギャップは感じなかったかな。それなのに一九七七年ってすごく古いじゃん。どれくらいだ？
小林 …四十年くらい前ですかね。
細田 …自分の親が小学生くらいだったってことでしょ。
前田 …そうですね。
細田 …ファミコンがあったかなくらい？ そもそも家に電話があったんだっけ？
前田 …子機がレア、というか自分の部屋にあることがすごいことだみたいな描写がありましたよね。
長谷川 …あったね。
前田 …だから固定電話は家にあっただけで一家に一台が基本みたいな時代なんですかね？

細田 …黒電話なのかな。でも子機って黒電話じゃないよね。今の電話とそんなに変わんないじゃんね。
前田 …携帯がないだけですよね。
細田 …確かに。二〇〇〇年くらいの本って言われてもそんなに違和感ないけどな。
若林 …そうですね。
前田 …確か二〇〇〇年の映画だと携帯使っていましたね。
細田 …その時代って大人はともかく子どもが携帯持っているのレアだったと思う。
若林 …子どもに買い与えるほどのものではありませんでしたね。
細田 …だよな。
あとどうしても僕はこの絵のイメージが残ってる。この本自体結構新しいよね。あつ、そんなことないか。
長谷川 …でも私が小学生くらいの頃に角川つばさ文庫で読んだ気がします。
細田 …よく見たら初版が二〇〇九年か。そりゃ新しいわ。
前田 …話戻りますけど携帯とかがあれば……ってところもありますよね。遺書の代わりにメールを送っていれどか。
若林 …子機が有線の時代だからね。
長谷川 …そっか、有線の時代か。
若林 …まだ無線ではないと思う。
細田 …あとゴッホが千万って安くない？
一同 …(笑)
細田 …あとは物価が今とは違うのか。
小林 …そうですね。でもそこまででもない気がします。

若林 .. 美術品の価値がそこまで変わるとも思えないですし。

前田 .. 日本の経済が上昇していた頃じゃありませんでしたか？

細田 .. 普通に考えて十億とかじゃない？

若林 .. 絵の中であまり有名じゃないのかなんですかね。

細田 .. どうだったんだろう、まあ盗品だしね。

.. そういえばこれってシリーズもののなの？

長谷川 .. いや、これは一作じゃないですか？

前田 .. これは単体だったと思います。

若林 .. あっ、やっぱり電話線ありますね。受話器から直接聞いて

るので昔の電話ですね。電話線から届くので受話器でも子機でも同時に受け取れて、喋れて、聞くことができるから。

前田 .. 確かにそれはならんではかも。

若林 .. 昔、僕の家がこれだったんで。盗み聞きして声を出すと怒

られるんですよ。

細田 .. お店の電話とか、結構そうだったりするイメージ。子機あるとそうだよ。二人で同時に電話をとっちゃったりさ。

前田 .. そうなんですか。

他に何か話したいことがある人いますか？

細田 .. そういえば友達の大塚って法政でいいの？

小林 .. 早稲田ときたらそうかもですね。実際に武蔵野にあったりするんですかね？

細田 .. うーん、あまり調べてもでてこなかったけど、三、四十年

前だったら移転してる可能性とかもあるし仕方ないか。

若林 .. そうですね。

細田 .. それにしてもたまにある少女漫画要素なんなんだ？

二人でデート行こうよ、とかさ。

長谷川 .. 海に行く必要とか絶対なかったですよ。

小林 .. 確かに。

前田 .. ある程度そういうことをしないと真知子が怪しむかも、というか喜ばせるためなんじゃないですか？

細田 .. 結構普通に恋愛しているし、利用しようという感じでもなかったのかも。

.. ちよつと気になったのはそんなもんな。

前田 .. じゃあ最後にまいちゃんからもリクエストをいただいた推

しキャラの話で終わりにしますか。ちなみに今回は不参加のまいちゃんは真知子らしいです！

細田 .. 主人公か。えー、誰にしようかな推しキャラ。

前田 .. 私はわりと狂っている人が好きなので西田先生ですかね。

.. 変な死生観とか持っていて、いいなって。

若林 .. 確かに西田の死生観はいいよ。

前田 .. わざわざパイプ吸っているのも良くないですか？ その時代でもなかなかいなさそうじゃないですか。

長谷川 .. 私は治子がよかったかな。東大生っていうほら吹き加減。

前田 .. そういえば東大はそのままだったよね。

長谷川 .. うん。金儲けもしちゃうし。

細田 .. 僕の推しは麻薬で死んだ女の子にするわ。

若林 .. 由子ですね。

細田 .. なんかベランダの手すりを吞気そうにルンルン歩いているのいいじゃん。

一同 …あゝ。
細田 …名前もよく覚えてないけどこの子にするわ。
小林 …私はお母さんかな。
細田 …お母さんもいいよな。
小林 …なんとなく察しながら何にもできないけど、娘を守ろうとして
いる感じ。
前田 …なるほど。
若林 …お母さんに関しては強かだなんて。
前田 …若林は？ 西田先生でいいの？
若林 …英人かな。なんか英人の感情がとても気になる。
前田 …どうなんだろうね。途中で気になりだしたのか、元から気
になっていたのかとか。
長谷川 …最初は利用目的だけだったんじゃないの？
若林 …とは書いてあるけどね。
長谷川 …この女ちよろいわって。
一同 …(笑)
若林 …でも大してよそよそしい感じもないからな。復讐に燃える
けど、友達なんだよね、結婚しようよっていうメンタルも
よくわからない。
前田 …確かに。
細田 …そこは美人だったから、かな。たまたま復讐のためにやっ
てたら美人な女の子と付き合えたからこのまま結婚しよ
うっていうそれだけな気がする。
前田 …あれ、真知子って高二でしたっけ。高二と大学三年で高校
卒業後に結婚ってちょうど就職したてくらいですね。

細田 …まあ両方とも親太そうだし。
小林 …太そう(笑)
細田 …まあ早稲田ならいいと就職するよ、大丈夫大丈夫。そう
いえばこの時期ってバブルじゃないよね？
前田 …さつき調べたらバブル前でしたね。
細田 …そっか。でも好景気と言えば好景気か。
前田 …すぐくではないけれど、くらいですかね。でもスーパーカ
ーブームとか書いてありますね。
細田 …良い時代だな。でも友達が車持っているのもすごいよな。
金持ちなんだろうな、やっぱ。だって埼玉でも持つてる友
達いる？
小林 …そんなに聞いたことがないですね。
細田 …今なんか就職しても買えないかもだしね。いい時代だな。
あとさ、首にナイフ突きつけてきたナンパ男とかいいんじ
やない？
若林 …ちよい役のわりにめっちゃやばかった奴じゃないですか。
前田 …計画的だったとしたらお疲れ様です！ …って感じですよな。
細田 …今日も五時からいなきやいけないのかうって。それを察す
るとなかなか愛着が湧いてくるよね。二ヶ月くらいの間ち
よつと駅から離れたコンビニでタバコ一箱買ってさ、駅弁
って吸い終わったから帰るかうみたいな。
若林 …めっちゃ可愛いじゃないですか。
前田 …毎日同じ時間にタバコ買って居座っていたら店員さんにあ
だ名とかつけられてそうですよな。
細田 …それであれでしょ、目的の女の子が来たと思ったら手押し

車で吹っ飛ばされる。

長谷川 .. 手押し車ってやばいですよね。中に資材とか入っていたら結構痛そう。それで済むのかもわからないですけど。

若林 .. 真知子に当たらなくてよかったですね。

細田 .. 駄弁ってる不良君、皆の推しじゃない？

一同 .. (笑)

前田 .. 確かにそうですね！ ちょうどいいオチもつきましたし、

これにて第一回オンライン読書会を終わりにしたいと思います。
ます。ありがとうございます。

一同 .. ありがとうございます！

(文責 .. 吉田しおり)

東川篤哉

『放課後はミステリーとともに』

読書会レポート

注意！

これより東川篤哉

『放課後はミステリーとともに』

読書会の様子をお届けします。

小説の内容に関わる**重大なネタバレ**

が含まれていますので、

未読の方はご注意ください。

【とあるnoom会議(2)】

東川篤哉『放課後はミステリーとともに』

福富…皆さん、こんにちは。第二回オンライン読書会、始めたいと思います。本日の本は、東川篤哉先生の『放課後はミステリーとともに』です。司会は教養学部三年の福富です。よろしくお願ひします。

山口…理工学研究科、院一年の山口です。よろしくお願ひします！
前田…工学部三年の前田です。よろしくお願ひします！

福富…お久しぶりです。オンラインでの読書会でちよつと人数少ないのですが、気づいたことがあればどんどん言ってくださいね。

一同…はい。

福富…まず、本についてざつと見ていきましょう。単行本と文庫版どちらも出版されていますね。

山口…自分単行本ですね。

前田…私電子です。

福富…おお！ちなみに、私単行本も文庫本も間違えてそれぞれ買ってしまいました……。文庫本に解説が加えられているくらいで、内容は特に変わっていないようですね。

前田…どっちも買っちゃうの、あるあるだね。

福富…そうなの。ちよつとショックだった……。

さて、気を取り直して、早速あらすじ確認です。

【あらすじ】

「探偵部副部長の涼は、推理よりギャグの方が得意だった？」
霧ヶ峰涼が通う鯉ヶ窪学園高校にはなぜか事件が多い。校舎から消えた泥棒、クラスメイトと毒入り珈琲一族との関わり、校外学習のUFO騒動、密室状態の屋上から転落した女子……etc. それらの謎を解くはずの涼だが、ギャグが冴えるばかりで推理はなぜか発展途上。解決へ導くのは探偵部副部長なのか、それとも意外なあの人が？ ユーモア学園推理の結末は？

(実業之日本社文庫、二〇一三年、背表紙より)

福富…はい、あらすじはこんな感じでした。短編集なので、一応各短編のタイトルも見ておきますか。

【収録されている短編】

- ・霧ヶ峰涼の屈辱
- ・霧ヶ峰涼の逆襲
- ・霧ヶ峰涼と見えない毒
- ・霧ヶ峰涼とエックスの悲劇
- ・霧ヶ峰涼の放課後
- ・霧ヶ峰涼の屋上密室
- ・霧ヶ峰涼の絶叫
- ・霧ヶ峰涼の二度目の屈辱

福富…全部で八編収録されています。で、登場人物をまとめようかとも思ったんですが、短編集で結構色んな人が出てきたので、

本当に重要人物だけまとめました。

山口：確かに短編集じゃ難しいよね。

福富：まず、霧ヶ峰涼、涼ちゃんですね。一人称が「僕」のボクっ娘です。

山口：ミスリードだよ。涼。

福富：そうなんです。で、涼ちゃんは探偵部の副部長を務めています。そして、石崎先生。生物の先生ですが、最初と最終話くらいに出てきてましたかね。探偵部の顧問になった、でいいんですよね？

前田：なってたね！

山口：「霧ヶ峰涼の屈辱」で引き受けてたね。

福富：顧問って大事だと思うんですよ。部費ももらえるかも変わってきますし。でも、探偵部の顧問って何やるんだよってすごく思いました。

山口：顧問のほうで探偵してたよね。

前田：確かに(笑)

山口：推理力があるキャラクターだったよね。

前田：涼ちゃんよりも顧問が探偵してましたねえ。

福富：あと一人挙げたのが、高林奈緒子さん。涼と同学年のお友達です。何作品かに出てきてましたが、「霧ヶ峰涼と見えない毒」にメインに出てきましたかね。

山口：あとどこかのファミレスで無銭飲食しそうになって、涼に電話かけてきた子だね。

福富：ああ、そんなエピソードもありましたね！

山口：あれって「霧ヶ峰涼の放課後」だったっけ？

前田：多分、放課後だと思います。

福富：なかなか強烈な話ですよ、無銭飲食しそうって。

一同(笑)

福富：とまあ、個性的なキャラクターを紹介したところで、議題に移ろうと思います。疑問に思ったところがあれば、ガンガン出してくださいね！

福富：まず一つ目の議題は、短編が始まる最初のページ、目次の次のページにあった、著者・編集部からのお願について。

山口：「本作品集は、ミステリーの仕掛けをご堪能いただくため、第1話「霧ヶ峰涼の屈辱」からお読みいただくようお願いいたします」ってやつね。

福富：そうですね、そうですね。この本を最初に読んだのが中学生のときなので、今回は涼が女子高生だって知った上で読んで読んでたんですね。

前田：ああ、なるほど。

福富：中学生に読んだときは、この文章を読んで、短編集だけど全体を通すような大きな仕掛けがあるのかなって思ったんですよ、私。

山口：ああ、うん。確かに。そうとも読めるよね。

福富：そしたら、第一話でわりとあっさり涼が女子高生だって明らかされて。

山口：俺も最初これ見て、総括するような仕掛けあるのかなって思った！

前田：私もです！

福富.. やっぱ思いますよね。

山口.. こういうの書いてあると構えちゃう。

福富.. そうなんですよ！ なんですすが、今回はあっさりめでしたね。

山口.. ここについては、ちよつと気になることがあって。仮に、この注意書きをスルーして、第二話とか、最終話とかから読んだりしたら、涼ちゃんが女子だって気づくようになってるのかな？

前田.. 第二話以降って、結構短編の冒頭部に自己紹介みたいな文章

あって、かわいい女の子だって言ってますん？

山口.. ああ、確かに！

前田.. となると、この著者・編集部からのお願いつて多分一回しか通用しないような気がします。

福富.. 確かに、自分の特徴として茶色のブレザー、とかミニスカ―

トって単語出てきましたね。

前田.. あとは、最終話の「霧ヶ峰涼の二度目の逆襲」に持っていくための布石なのかな、と。

山口.. 納得するようにね。最初と最後のオチ。

前田.. 石崎先生の「二度目じゃないのかい？」に繋げるための。

福富.. 先生の皮肉がめっちゃ効くやつだ！

山口.. 第一話も最終話もどっちもE館使つてて、かつ涼が女子高生であることをトリックに使つてる話だったもんね。

福富.. さて、話に出てきたところで次の議題、E館です。皆さん、

図見てわかりました……？

前田.. いや、①の廊下、とか言われると、だんだんわかんなくな

っちゃうよね。

福富.. そうなのよ。

前田.. しかも、私電子書籍で読んでたから図を見返すのも難しくて。

山口.. あ、電子はそうだよ。図のページに戻るの大変。

前田.. そうなんですよ！

福富.. この図は第一話と最終話それぞれに出てきてたので、まあ二枚、同じE館の図があったわけですが。違う部分があるのかな？と思つたら、そうでもなく。

山口.. 書いてある教室名が違うくらいかな。

福富.. まあ、現実にはないかな、と思いつつ、こんな形の建物あつたら謎も起きるかな、と。

山口.. 読んでて規模感がわかりづらかつたかな。廊下の長さとか、奥行きとか。

前田.. ああ。

山口.. 角曲るとすぐに見えなくなるじゃん？ 犯人。

福富.. 確かに。

山口.. で、どれくらいの規模でやってんのかな？と。

福富.. 廊下行ったり来たりしてましたもんね、涼ちゃん。で、さらに色んな人が色んな部屋から出てくるから余計に……。

前田.. 図見る限りだと結構部屋あるみたいだから、大きい建物なのかも。

福富.. 一列に四、五個くらい教室並んでるもんね。

山口.. 図には書いてなくても、多分色んな部屋があるんだろうね。

福富.. 美術室とか生徒会室とか、わりと使いそうな特別教室ばっかりですよ。

前田…うん。

福富…最初図を見たときに、変な形の建物だから学園の敷地の隅っこのほうにあるんじゃないかな、って勝手に思ってたんですよ。でも、よくよく見たら、使用頻度高めの教室が多くて。生物室もここにあるし。

山口…平屋だしね。

福富…そうなんですよ、平屋なんですよ、E館。

山口…変なポジションというか、変わった建物だよな。

福富…配置も不思議で。生物室の隣が美術室なんですよな。

山口…その隣は視聴覚室、と。

前田…確かに不思議！

福富…芸術系はまとめられている、という思い込みがあったんですよ。音楽室と美術室は隣、みたいな。

山口…ああ、俺は何か縦に並んでるイメージかな。二階が美術室ならその上は音楽室、みたいな。

福富…私の中学校は二階が理科系の特別教室で、三階が芸術系の教室だったんですよ。そのイメージがかなり強くて(笑)

現実的に考えたら、トリックうまくいくんですかね、E館。りというか。

前田…そうでしたね。

福富…証言取るときは、ちゃんと主語というか登場人物をはっきりさせなきゃいけない、ということをしみじみと思いましたね(笑)

前田…私、弟の名前が(ヘリョウ)だから、完璧に騙されちゃったん

だよな。

福富…おお。

山口…同じ名前が身近にいと余計そうなるね。

福富…で、この第一話でいい働き？ をしていたのは用務員さんですかね。

山口…ですねえ。

福富…さて、第二話「霧ヶ峰涼の逆襲」に移ります。車とリバー

シブルジャンパーを使つての、カメラマンの目の前での入れ替えトリックでしたね。

山口…はいはい。

福富…できると思います？ このトリック。

山口…カメラマンが車から降りてくる人物に注目しなかったっていうのが前提にあつて。誰かに見られることを踏まえるならちよつと杜撰かなあ、と思うけど。

前田…そうですねえ。

山口…予期せぬ状態、うっかり見られてしまふとかすると破綻しそうな感じじゃない？

福富…カメラマンとかそういう目が無い、誰にも見られないことを前提にするならいけるかもつてことですね。

山口…そう。かなりリスク。

福富…私もここはちよつと引っかけましたね。こんなにうまくいくものかと。

前田…うんうん。

福富…これって夜か。夜だと暗いからばれないってこと？

前田…うーん。

山口…ジャンパー着てるどころとかカメラマンに撮られたらすぐバレると思うんだけどなあ。

福富…カメラの性能もそこまで悪くないだろう、と。ジャンパー変えただけで、男と女見間違うかな、とも思いました。えーと、この入れ替えトリックを整理すると……。

山口…部屋にいたのは男二人。で、車で来たのは女の人で、二人二役やってるよ。

前田…で、最終的に、担架の運び手二人と、具合悪そうな女の人、合わせて部屋から三人出てきたってことか。

福富…この部屋自体は女の人の部屋ってことで、カメラマンのおじさんは張ってたんだよね。

前田…そうそう。

福富…こんなにうまく事運びますかね？

山口…でも、担架を一人で持つてくるって普通はあんまり考えないことだから、そこ面白いよね。

前田…そうですね。

山口…担架って聞くと、両脇に絶対二人必要だから、まさか一人で持つてくるとは思わないよね。

福富…確かに！

山口…納得できる心理トリックというか、思い込みというか。

福富…車を運転してきた人一人と、もう一人別の人物、合わせて二人がやってきたって思い込みじゃいますよね。

山口…そうそう。

福富…あ、でもアパートの住人がその場に居合わせたら一発でバレ

ますよね。誰もエントランスとかにいなかったんですかねえ。

山口…あれ、これって実際にはアパートの部屋は男性の部屋だったけ？

前田…いや、表札が一応水原さん、女性の名前になってたと、カメラマンが言ってたましたね。

山口…じゃあ、水原さんは安藤タケルともう一人の男の人に部屋を貸してたってことになるよね？

前田…おそらくそんな感じで話は展開してくけど……表札って変えられるのかな。

福富…手書きとかだと変えられそうだね。

山口…この部屋が女性の部屋じゃないってわかっちゃったら、このトリックは使えなくなっちゃうかもね。

福富…ああ、そうなると、この表札って結構大事かもしれないですね。あと、この逆襲の面白いところって、推理が二つ披露される

ところだと思っんですよ。涼ちゃんの推理にも、石崎先生のほうにも、どっちにも納得しちゃって。

山口…あーね！

前田…となると、涼は逆襲しきれてないのかな？

山口…うーん、そうかもしれない……。

前田…最後先生にやられてるし。

福富…ほんとだ……。

山口…そういうえば、全編読んで思ったんですけど、探偵部っていつ出てくるんだろう、ってすごく楽しみにしながら読んでた。

前田…そうそう！ 副部長だから部長は？ って。

山口…探偵部の日常が描かれるのかなって思ってたんだけど。そし

たら最後までやらないという。

福富…ちよつと本題とは逸れちゃうんですけど、この探偵部シリーズって、実はこの『放課後はミステリーとともに』の前に二作あるんですよ。

山口…じゃあ、これ三作目ってことか。

福富…まあ、そうなりますかね。第一作目は『学ばない探偵たちの学園』、二作目が『殺意は必ず三度ある』ですね。

前田…ああ、聞いたことある！

福富…この二作には、涼ちゃん登場しないんですよ。せっかくのボクっ娘の涼ちゃんのトリックを使うために、涼ちゃんは二作には登場させてないんだろうって、文庫版の解説には書かれていますね。

山口…部長たちと涼の絡み、見てみたいなあ。

福富…この探偵部シリーズは、このあと『探偵部への挑戦状』という続編、そして同じ学園が舞台の『君に読ませたいミステリがあるんだ』という本も出ているようですので、ぜひ。

福富…さて、本題に戻りますか。第三話「霧ヶ峰涼と見えない毒」ですね。このトリックには、私は疑問を持ってるんですよ！

一同…おお(笑)

福富…腕を骨折して布で吊っているおじいちゃんが被害者なわけですが、読書しながらモカチーノなる飲み物を飲むためにストローを使っていたと。このストローの中に毒を仕込んだっていう描写があったんですよ。

山口…そうだねえ。

福富…で、事件後の鑑識の調べで、そのコーヒーからもホイップクリームからも毒は検出されなかった、と。そこで私は思った

んですよ。ストローの中のどこに仕込んだんだろうって。ある程度長さのあるものじゃないですか、ストロー。

山口…先が曲るストローだったら飲み口のほうかな。

福富…あー、より口に近いほうですね。

山口…あれ、この毒って粉末？

前田…うーん、はつきりとは書かれてなかったかもしれませんが。

福富…見つけた薬包紙には青酸カリが付着していたってありましたね。一応、見せかけて薬包紙を用意してると考えると、実際にストローに仕込んだ毒も粉末だったのかな。

前田…青酸カリは粉末だった気がする。

山口…粉末って液体に溶かすイメージあるよね。

福富…そうなんです。なんですけど、粉末状の毒をストローに仕込んで、そのストローで飲み物を飲んで。なのに、そのカップに残った飲み物からは毒が出ないという。ちよつとくらい毒入っちゃいそうじゃないですか？

前田…何だろう、濃度の問題とかなのかな。検出の方法とかによっても違うのかも。

山口…そもそも、粉末の毒をストローに仕込むっていうのが難しいよね。何か粉付いたら、おじいちゃんもさすがに気づきそうだし。液体に溶かしたほうが圧倒的に簡単だよな。

前田…うーん、仕込むとしたら、青酸カリをめっちゃくちや液体に溶かして濃度の高い液体を作って、その液体をストローに塗って乾かす、とか？

山口…(笑)

福富…おお、そういう方法もアリ？ 準備段階が危ない危ない！

前田…努力がすごい(笑)

山口…それ気化してなくなってるんじゃないのかなあ、それって。

前田…蒸発する温度が水と青酸カリで違ければいけるかもしれないですね。

福富…あれ、そういう青酸カリって空気に触れさせておくと劣化して毒性が薄れるってありましたよね。

前田…それでストローの中に仕込んだのかな。絶対外側に塗ったほうが準備しやすいのに。

福富…可能か不可能か、つてなつたら可能なんですかねえ。

山口…ストローってむき出しの状態のやつだったのかな？ ファミ

レスみたいに小袋に入ってるやつもあるじゃん？

前田…ああ、どっちもありますねえ。

福富…普段小袋に入ってるストローがむき出しで出てきたらさすがに怪しみませんかねえ。

あ、そうだ。もう一つ疑問がありました。犯人が一応松本さんってことだったんですけど、松本さん、ここまで用意周到

にやってきたのに、青酸カリの劣化の性質を知らないなんてこと、ありますかね？ ちよつとうっかり過ぎません？

山口…自分の罪を逃れるために露骨にやって、それが仇になっちゃったのかもねえ。

福富…そうだ、この推理披露したのが奈緒ちゃんなんですよね。

前田…そうだよね！

山口…涼ちゃんより推理してるよねえ。涼ちゃん本人は推理はして

るんだけど、一番肝心なところは自分で推理してない感じがする(笑)

福富…はい、じゃあ次にいこうと思います。「霧ヶ峰涼とエックスの

悲劇」ですね。これに出てくるのが池上先生ですね。地学の先生。天体観測の場でUFOらしきものが目撃されると。

ま、夜光塗料を塗った風なんですけど。…夜光塗料って、どれくらい見えるものですかね？

山口…あー(笑) そんなに見えないんじゃないかなあという気がするね。

前田…飛ばす直前まで懐中電灯とか何かで光当てとかなないと光らないかもね。

福富…で、畑で人を見つけてるんだけど。この人たち、倒れてる人の前でめっちゃコントしてますよね。

一同…(笑)

福富…もつと驚こうよ！ と。池上先生の推理はめちゃくちゃ早いな、というのが率直な感想でした。

山口…こんな状況じゃ、自分が一番怪しまれるって、そこまで考えが辿り着かないよね。

福富…で、このトリックなんですけど、うまくいくものなのかなあ、と……。

山口…うーん、あんまりピンとこなかったかも。

前田…どちらかというと、話のコメデイ感が強かったかな、と。

福富…確かに(笑) UFO騒動も絡んでるしね。

前田…とすると、涼と先生が見たUFOは、被害者の首を絞めて切

断されたあとの凧だったってことか。

福富…涼ちゃんと先生は凶器を追ってたんだね。うーん、犯人側からすれば、糸の強度も必要だし、凧を飛ばすのに風もある程度必要だし、本当に行き当たりばったりって感じですかね。

山口…テグス糸を使っていたにせよ、結構無茶っぽいトリックかもね、これ。

福富…そうですね。なかなか敵しそうです…。

福富…さて、お次は「霧ヶ峰涼の放課後」ですね。これは結構荒木

田君がいい味出しましたよね！

山口…出してたね、彼(笑)

前田…出してたね！

山口…これ面白かったよね。涼ちゃんも結構頑張って推理してた感じあったし。

福富…このタバコとジップを隠す場所って、荒木田君最初から知ってたのかな？

前田…いや、知らなかったんじゃない？

山口…知らないからこそ、涼ちゃんに奢ってるわけだし。

福富…あ、そっか。

前田…跳び箱の底ってあんまり見ないから、仕込みやすいかもね。福富…跳び箱っていうと小学校の頃の苦い記憶しかないんだけど、

あんまり跳び箱の底のほうまで気にして見ないよなあ、と思つて、すんなり納得して読んじやいましたね。

山口…俺も、これは面白いなあ〜！

前田…で、そこで小笠原さんの事件だよな。

福富…そう！ これびつくりだった。お金を盗んでたっていう。

前田…芸能人クラスだとお金持ってるだけだなあ。

山口…いや、お金じゃないんだよ、多分。スリルとかを味わってたんじゃないかと。

福富…そっち目当てか。盗撮カメラを仕掛けたのは小笠原さんじゃないんだよな？

山口…そうそう。

前田…小笠原さんがお金盗む姿がカメラに映っちゃったから、カメラを壊そうとしたんだよな。

福富…カメラを仕込んだのは？

山口…それが最後までわかんないんだよな。俺、これ読んで、後半の物語に効いてくるんじゃないかと思ってたんだけど、そんなことなかったね(笑) 最後の事件の犯人は、あー、こいつでしょって思ってた。

一同…(笑)

福富…このあと、小笠原さんは女優業どうしたんですかね？ 詳しく

くは書かれてなかったのでアレですけど。

山口…そもそも、芸能クラスっていうのがイマイチ想像できない。

福富…身近にあるもんじゃないですもんねえ。

山口…そうだ、カメラ仕込んだ犯人なんだけど、これに出てくる体育会系の教師かな、と思ってたんだよな。

前田…あー、いましたね、先生。

山口…そしたら違う、みたいな終わり方だったよね。

前田…えー、でもわかんないよ。先生演技してるのかも…。

福富…柴田先生、怖すぎでしょ(笑)

山口…あ、でも先生もしこの二重底の跳び箱のトリックを知ってたら、涼たちに探させたりしないかな？

福富…見つかっちゃったら怖いでもんね。うーん、カメラを仕込んだ犯人は明かされない、と。まあ、荒木田君ではなさそう。

山口…荒木田君だったら残念過ぎるよ！結構いいやつなのに。

福富…私、推しキャラになりますよ(笑)

前田…そういえば、奈緒ちゃんの無銭飲食騒動の話が出てきたのはこの話だよ。

福富…ああ、そうだそう。これ嫌だし悲しいよね。お金持つてる前提でご飯食べに行ったのにな。

前田…盗まれてるもんね。

山口…しかも学校で、だもんね。

福富…じゃあ、次に行きます。「霧ヶ峰涼の屋上密室」ですね。この事件が一番学園で起きてる事件ですかね。

前田…そうだね。時間も場所も。

福富…この事件のトリック、というか仕掛けというか、すごいですよね。人の上に人が落ちてくるという。

前田…でもどっちも死ななかつたから、ある程度クッション性みたいなのがあったのかも、って納得しちゃった。普通に屋上から落ちたら死んじゃうじゃん？

福富…死んじゃうね。

前田…だから、木に引っかけたって助かったんだよね。

福富…あと、上から人が落ちてきちゃった栄子先生もよく無事だったな、と。

山口…それ思った。

福富…一番ワクワク？した謎でしたね。人の上に人が降ってくるってなかなかないシチュエーションだと思うので。

山口…偽のアリバイが足を引っ張っちゃうっていうのも面白かった。

認識の齟齬で結果的に事件が解決するっていうね。この本はそういう思い込みとか認識の違いみたいのが使われている謎が多くて、面白いなあ。

福富…栄子先生……。

山口…栄子先生のその四時半云々のアリバイさえなければ、むしろ完璧だったのにな。

福富…喋っちゃいましたからねえ。そういや、この冒頭で涼ちゃんに話しかけられた先生、めちゃくちゃびっくりしたと改めて思うんですね。自分が落としたはずの生徒が地面に落ちてないし。

山口…いや、それはまじで怖い。絶対怖いよね。

前田…(笑)

福富…女性刑事の烏山さんの追求も結構鋭かったですね。栄子先生に話を聞くとときに、「その時間とはどの時間ですか？」って栄子先生に尋ねるあたりとか。

前田…確かに。

福富…この時間を尋ねるあたりで、栄子先生怪しいなとは思ったんですよ、私。この話で一番最初に出てくるキャラクターだし。絶対何かあるな、とは思ったんですけど、犯人だということには辿り着けませんでした。

山口…なんかミステリって登場人物の中から犯人を考えるからメタ

的な面もあって、この人犯人なんだろうなって思っちゃうよね。

一同…(笑)

前田…妹が自殺した、っていう話が出てきたあたりから、きつこの人が犯人なんだろうなって思ってた。

福富…うんうん。トリックについてだけど、この木に引つかかると実際に起きるんですかね？

前田…木がどれだけ生えてるかによるかな。

山口…いや、でも狙ってやったことじゃないから(笑)

福富…まあ、そうですね(笑) あと、人が落ちるくらいの風って相
当な強風だよな、と。

山口…ナックルがよく落ちるって書いてあったね。野球詳しくないから、どれくらいなのかあんまりわかんないんだよな。

前田…そうなんですよね。野球ネタ今回多くて。でも、イマイチわからないという。

福富…屋上密室は偶然にできてしまった、ということでしたけど、
八木先生共犯者でしたよね。

前田…だね。

福富…いやー、協力するんですね、八木先生。教育実習中ですよ？
山口…確かに。この本を読んで思ったのは、小学生とか中学生の

ときと今じゃ、教育実習生に対するイメージ違うよね。小さい頃は、実習生でもっと大人だと思ってた。

一同…わかります、わかります！

山口…でも、今学生の立場で、友達とかで教育実習行ってるやつとかの話の聞くと、こんな余裕あるかな、と思うよね。見方

変わる。

福富…こんな余裕ないですよ、実際は多分。

山口…教育実習しながら殺しの計画も練るといっね、すごいですよ、

栄子先生。ハードハード。

福富…そういや栄子先生って、殺しの現場の下見しなかったんですかね？ 木が生い茂ってること気にしなかった？

山口…あれ、これって栄子先生生徒落としたあと下見てないんだっけ？

福富…見られなかった、みたいな感じじゃなかったでしたっけ？

前田…怖くて見られくない？

山口…えー、でも自分が殺したら相手がちゃんと死んだことを見届けたくない？

前田…えー、絶対見たくないですよ。

福富…死に絶えてるのをちゃんと確認してから現場を去るってことですね。

山口…そうそう。怖いもの見たさで見たとく思うんだよなあ。
あと、音がしそう。

福富…ドサツ、とかですよ。

前田…確かに。

山口…そこは疑問ですね。えー、気が動転してたんですかね、栄子先生。早く逃げなきゃって。

前田…アリバイ作りたかったみたいですし。

福富…どっちかっていうとアリバイを作るのを優先して急いでその場を去ったってことですかね。…まあ、自分がやるなら、

確実に相手が死んだことを確認してから去りたいですよ。

山口…そう、俺は絶対そう。こういう殺し方をするなら、だけどね。

福富…相手生かしておくと、自分が犯人ってバレますしね。

山口…そこなんだよね。

福富…この点はちよつと疑問やっぱり残りますね。

山口…でも、これを考えている段階ってまだ栄子さん目が覚めてなくて、事情聴取できてない段階なんだよね。

前田…ああ、そうですね。

山口…なんで、まだ想像の段階で、自供まではいってないんですよね。だから、この辺がしつかり描かれてないのも無理はないのかなあ、と。

福富…もし、栄子先生がちゃんと下を見てて、被害者の加藤さんが木に引っかかっているのに気づいた場合、どうするんですかね？

山口…あー、下に降りてツンツンするんじゃない？(笑)

一同…(笑)

福富…そんなことありますか？

山口…木を揺らしたかも。

前田…あ、木が生い茂ってて屋上から地面は見えない、って感じのこと書いてありますね。

山口…まじか。

福富…じゃあ、なんで先生はそんなところを犯行現場に選んだんでしょう？

山口…確かに……。

福富…人目に付かないところ、っていうのを優先したんですかねえ。

山口…裏門のほうだもんね。

福富…はい、それでは「霧ヶ峰涼の絶叫」にいきます！ 足立君の話ですね。

前田…足立君ね。

福富…このキャラもなかなかキャラ立ちしてますよね。自分で色んなキャラチフリーズを付けている(笑)

山口…そうだね(笑) 自分でトンボ踏んで倒れるという。

福富…私これ、小学生のときに自分でやったことあるんですよ。

トンボの先端踏んで、柄の部分に殴られるという(笑)

一同…(笑)

山口…結構痛そう……。

福富…このトリック、言われてみれば単純なものでしたね。

前田…ちよつと事故みたいなの……。

山口…まあ、可愛らしい珍事件というか。

前田…足立君ならやりそうだな(笑)って思った。

山口…後頭部殴られたとき、拳とかとは感触違うと思うんだけど、気づかないのかな？

福富…ちなみに、金属で想像してました？ それとも木？

山口…いや、俺は金属かな。

福富…金属のほうか痛そう。うーん、一番身近にありそうな事故と云えそうな感じでしたね。

山口…この絶叫、俺は最後のこけてるところが好きかな。足立君の底抜けなアホさがわかるというか。

前田…私もよくこけるので、何となく気持ちわかりますよ。

山口…あれ、じゃあトンボ気をつけてくださいね。

一同…(笑)

福富…はい、それでは最終話「霧ヶ峰涼の二度目の屈辱」に移ります。またE館ですね。森野美沙ちゃんにモデルになって、と言われて涼はE館に行く、と。

山口…で、荒木田君がビーナス像の下敷きになってて。

福富…周りに赤い液体が。ま、この赤い液体は絶対血じゃないな、と思って読んでました。

前田…それ私も思った！

山口…そこは定番だよ。ここで荒木田君死んじゃったら、何だこの話は！ っとなっちゃうし。

福富…話の流れ的に死にはしないだろうと思ってました。なんで、赤い液体はペンキかなと。で、この事件の石崎先生の、学ラン着てるから男子だと思ってるのか、みたいな一文に、そーいやそーだなあ、と思っただけですよ。

山口…そう。俺も学ラン着てるなら男子かなって思った。

福富…そのわりには男子の登場人物が少なくて。

山口…確かに。

福富…男子で疑われてたのが生徒会役員の山浦君しかいないし。ち

よつと気の毒ですね、彼は。

前田…まあでも荒木田君への恨み深そうだったよ。

山口…ああ、かなりの言い草だったよね。

福富…死んだのかって、ちよつと喜ぶような素振りもあったしね。

山口…俺、これ屈辱と似たようなトリックを使ってくるんだらうな
って思ってたんだけど、そんなに似てなかったね。

福富…そうですね。涼ちゃんが女子高生だっというのを活かしている、という共通点がありましたけど、それ以外は特にって感じかな。

前田…あ、でもほら、男の子と女の子の間違い、っていうところは一緒だよ。他の人も間違えちゃってるし。

山口…あー、そっか。

福富…私、この解決までの流れていうんですかね、すごいきれいだなと思って。びったりいくじゃん？ 山浦君は涼ちゃんを間違えないし、三年生の女子も涼ちゃんを間違えない。だから、涼ちゃんと荒木田君がわからない子が犯人っていう。

前田…うんうん。学ラン着た応援団の女子、ってことだったわけだけど、美術部と応援団って接点あるのかな？

福富…ああ、確かに。ちよつと気になるね。美沙ちゃんは涼ちゃんと同年代だから二年でしょ。で、応援団の子は一年生で学年も違うしね。

前田…学年の人数も多いみたいだしね。うーん。

福富…さて、全編見てみたんですが、全体を見て如何です？

山口…最初の、著者・編集部からお願いの一文に惑わされちゃったかな、と。重要だったのは第一話だけだったね。

福富…色々伏線なんじゃないかって探しちゃいますよね。盗撮カメラももちろんそうですね。

山口…そうですね。

前田…何かあるのかなあってね。

福富…そうなんですよね。残りの議題の一つなんですけど、この

作品、ドラマ化してるんですよ。

山口…へえ。

福富…二〇一二年なので、八年前になるんですけど。

前田…結構前なんだ。

福富…で、私これがお気に入りです。ダビングしたやつを今でも観たりしてるんです。

山口…ええ、そんなに？

福富…そんなになんです(笑) 今改めて観ると、原作とは結構違う部分もあります。

前田…第一話の謎って涼が女子高生ってことだったけど、それはどうやって表現されてたの？

山口…そうだよ。

福富…その点なんですけど、キャスト紹介で明かされちゃって。霧ヶ峰涼役は川口春奈さんですよ。

山口…あー。

福富…肝の部分がちょっと消えちゃってるのかなって思いました。

前田…うーん、結構難しかったのかも。

山口…エピソード的にはどうです？

福富…E館とかは出てきましたね。話の順番はちょっと変わったんですけど、第一話はなかったですね。藤田用務員の追跡者云々の話。

山口…やっぱ難しいかあ。

前田…E館は再現されてたんだ。

福富…そうなんだよね。そこは一緒だった。ただ、出てくるキャラクターの色が強くなってたかな。何でもないキャラが人形抱

っこしてるキャラになったり。

山口…レジュメ見たときにドラマ化したって書いてあったんで調べたんですよ。速水もこみちとか、結構ビジュアルきつくないですか(笑)

福富…かなり強烈なキャラでしたね。いい先生だな、とは思いましたが、こういう先生が実際にいたら私は近づかないです…。

前田…他にあった？

福富…エックスの悲劇に出てくる池上先生は、ドラマでは石崎先生になって。で、被害者の人との関係性はもっと希薄になってた。原作だと池上先生のご友人でしたけど、ドラマだとよく行くお店の店員さんっていう。

一同…(笑)

福富…警察側の人たちのキャラクターも結構性格変わってたりもしてました。

前田…何だろう、アピールさせるためだったのかな。

福富…見えない毒で活躍してた奈緒ちゃんですが、ドラマでは推理してませんでしたねえ。

前田…そうなんだ。

山口…探偵部の副部長っていう設定はあるの？

福富…それはありました！

山口…でも探偵部は出てこない？

福富…あ、それは、探偵部の男子三人組がちょっとだけ出てくるんですよ、ドラマだと。

山口…おお、そうなんだ。

福富：部長って呼ぶシーンもあるんですけど、顔は映らないモブキヤラでしたね。ああ、そうだ、放課後もなかったんですね。

前田：そうなの？

福富：そう。あの女子更衣室盗撮のやつ。

山口：話で読む分には一番面白いかなと思うけど。

福富：盗撮がテレビ的にダメだったのかな。

前田：うーん、盗撮厳しいかもね。あと芸能人クラスっていうのもよくなかったのかな。

福富：個人的には涼ちゃんが奢ったり奢られたり、っていうシーンもちよっと見たかったな、と思ってただけだね。奈緒ちゃんの無銭飲食騒動もなくて。

前田：えー、そっか。

山口：逆襲はありました？

福富：ありましたありました！ リバーシブルジャンパーの入れ替えトリックですよね。

山口：そうそう。

福富：私はきついなあ〜と思いました、実際に入れ替えトリックを見て。

山口：映像で見ると厳しそうだよな。

福富：歩き方とか肩幅とか。

山口：ガタイでわかっちゃいそうでもないね。ドラマ化には難しいトリックだったかもしれないね。

福富：ちなみに、最終回は屋上密室でした。

山口：おお。なるほど。

前田：一番盛り上がりそうな感じだね。

福富：結構栄子先生の殺しの背景が描かれてましたね。クライマックスにしやすいのかな、と思いました。

山口：確かに。

前田：第一話の屈辱がないから、二度目の屈辱は最後に持つてこられないもんね。結末が落ち着かないし。

山口：うーん、この本って、犯人側の供述とか言い分が書かれてないじゃないですか。

福富：そうですね。

前田：想像した部分だけですよね。

山口：だから、犯人側の言い分が入らないんだよね。いわゆる回想シーンとか。

福富：あー、そうですね。

山口：それがないと、映像化しにくいのかも。

前田：あー、なるほど。

山口：だからこそ、この作品は八割くらいの主人公の推理で、コメント調の学園ものになってるんだろなって思う。ここに痴情のもつれとかを話す犯人と、主人公が対峙しちゃうと雰囲気気が壊れちゃうのかなと。

福富：ドラマだと作られてたんですね、犯人側の回想シーンとか。

涼ちゃんと犯人対峙しちゃうと、本の雰囲気だと厳しいかも

……。

山口：コナンとかどれだけ死人が出て犯人と対峙してもメンタルやられないじゃん？

一同：(笑)

山口：本来だったら暗い話になっちゃいそうなところを、うまくコ

メデイ調にまとめているという。

福富…トリックメインというか、犯人側の言い分はひとまず置いておいて、犯行不可能そうな状況を涼ちゃんがぐるぐる考えているのが、この作品の肝というか、重要なポイントなのかもしれない。

前田…そうだね。

山口…俺もそう思う。ドラマにすると回想シーン必要なんだねえ。

前田…絶対尺足りないですもんね。

山口…原作だと、もうここまで来れば解決するだろうっていうところで終わってる形が多くて。

福富…謎解きというか、推理がメインで人の感情とかは重要視されてない。

前田…感情入れると絶対重くなるもんね。

山口…あくまでコメディ調なところが、この本の魅力かもね！

福富…そうだ、最後に推しキャラを聞いて終わりますかね。

前田…悩ましい……。いいキャラ多いよね。

山口…俺はやっぱり涼ちゃんかな。地の文からセリフにいくテンポ感とか、明るい感じが好きかな。

福富…読んでて楽しいですよ。

山口…すぐ野球し始めるし、ノリツツコミしてるしね。

前田…えー、悩むなあ。荒木田君もいいし、UFOの池上先生もいいし。変な人感が。

福富…私も荒木田君か涼ちゃんかってことなんですけど、的確なタイミングで連絡をくれる奈緒ちゃんも外せないな、と。

一同…ああ！

山口…ファミレスの無銭飲食とかね。

福富…高校生感があってかわいいな、と。まあ、結論は、いいキャラが多くて決められないって感じですかね！

一同…(笑)

福富…それでは、第二回オンラインを終了したいと思います。ありがとうございました！

(文責…水世絃)

『マスターの気まぐれコーヒー』

月影星乃

心地よいジャズが流れる店内に、からんとベルの音が響いた。私が顔を上げると、久しく見かけなかった男が入ってきて片手を上げた。

「いらっしやいませ。お久しぶりですね、生クリームさん」

「よつ。久しぶり、サイフォンさん。最近忙しくて来る暇がなかったんだ。それにしても今日は暑いねえ。危うく分離してバターになるところだった」

常連客の生クリーム氏は、わはは、と笑いながら紙パックの中身をちやぶちやぶと鳴らし、それからカウンターに腰かけた。私は彼の前に水とおしぼりを置き、窓の外を見た。アスファルトから陽炎が立上っており、確かにかなり暑そうだ。

「四〇度近くあるそうですね。年々暑くなるのには閉口してしまいます」

私は頭のアルコールランプに火を点け、それから生クリーム氏に問いかけた。

「今日はアイスにしますか？」

「いや、ホットで。いくら暑くても、コーヒーはホットがいいよね」

「かしこまりました。今コーヒーミルが買出しに行ってしまったので、粗挽きの豆はご用意できないのですが、構いませんか」

私は外を見ながら言った。客入りが落ち着いたため、ちょうど生クリーム氏とすれ違いで弟のミルを買い物に行かせてしまったの

だ。一応挽いておいたものはあるが、常連の彼はそれより粗挽きを好む。

「うん、構わないよ。いつも弟に行かせてないで、たまにはサイフォンさんも買い物ぐらいしたらどうだい」

「私がいないと、お客様が来てもコーヒーが淹れられないでしょう。それに、私の頭は繊細なのでね。こんなに気温が高いとガラスが割れてしまうかもしれない。その点、ミルは木と鉄ですから、せいぜい超高温になるぐらいで済むのです。油断して触ると火傷してしまうのが玉に瑕ですが」

私が苦笑しながらそう返答したとき、お湯が沸騰した。私は頭からフラスコを取り、ロートにコーヒーを入れ、フラスコに差し込んでまた頭上に戻した。

「言い訳が上手いねえ」

生クリーム氏がそう言いながら煙草の箱を取り出したので、私は彼の手からそれを取り上げた。

「この間から禁煙になったんです。煙草は外でお願いしますよ」

「ああ……なら我慢するよ。最近、喫煙者は肩身が狭いなあ」

がっかりしたように肩を落とす生クリーム氏に煙草の箱を返し、私は窓際の席を指さした。

「この前、角砂糖さんがあその席でタバコを吸おうとした時、間違っって自分に火を点けて、そのまま真っ黒焦げになってしまったのですよ。あんなことが何度も起こってはたまりませんから」

ロートに湯が上がってきた感覚がしたので、私は一分の砂時計をひっくり返し、頭に竹べらを突っ込んで掻き混ぜる。生クリーム氏は私の手元を見ながら頬杖をついた。

「そりやあ大変だ。尤も、角砂糖がこの日差しの中で窓際の席なんて、仮に燃えていなくても遅かれ早かれ溶けていたんじゃないかい」

「そうだったかもしれませんがね。次から溶けそうなお客様は日陰の席にお通しすることにしませう」

砂が落ち切ったのを確認して火を消し、また攪拌する。それからロートを外し、中身をコーヒーカップに注いだ。

「お待ちせしました」

生クリーム氏の前にそつとカップを置く。彼はそれを持ちあげてしばし香りを堪能したあと、頭の注ぎ口を開けて首をガクリと傾け、中身をカップの中に注いだ。コーヒーに生クリームが混ざり、柔らかいベージュに染まっていく。

「やつぱりコーヒーはミルクーもとい、生クリームたっぷりが一番だよ」

「ご機嫌な様子の生クリーム氏を横目に、私は洗い終わったフラスコとロートを頭に取り付けた。その時、ふと視界に足元の棚が入る。

「ああそうだ」

そこであることを思いついた私は、棚から飴色の瓶を取り出して生クリーム氏に見せた。

「コーヒーにキャラメルを溶かすと美味しい、という話を最近耳にしましてね。ここにキャラメルがあるのですが、よろしければ試してみませんか？」

「へえ、甘いのは好きだしやってみようかな。でも、キャラメルとキャラメルは別物じゃないかい」

「キャラメルは、砂糖や水飴に生クリームを入れて固めたものですよ。キャラメルは砂糖と水を焦がしたものでしょう。なので、そのコーヒーに入れてしまえば同じかと」

私が生クリーム入りのカップを指すと、彼は呆れたような笑い声とともにそれを差し出してきた。

「案外適当なところあるよね、サイフォンさん」

「大胆、と言っていたみたいです」

私はスプーンでキャラメルを掬い、カップの中に落とした。そのままスプーンを生クリーム氏に渡すと、彼は楽しそうにくるくるとカップの中身を掻き混ぜた。

「よし、ではいただきます」

生クリーム氏はそう言ってカップを持ち上げ、一口啜ってから満足げに頷いた。

「いかがですか？」

「うん、かなり美味しい。常設メニューにしなよ」

「それは良かった。前向きに検討しておきます。キャラメルの安定供給が厳しいのが少々問題ですけど」

彼は不味いと思っただけの不味いとはつきり言ってくれるので、どうやら本当に美味しいらしい。私は思わず頭のアルコールランプに火が付くほど喜んだ。

その時またベルの音がしたので、私は扉に目を向けた。

「いらつしやいませ。一名様ですか」

「はい。あ、端っこの方の席がいいです」

ゼリーの女性はそう言って俯いた。深い葡萄色がふるんと震える。

「かしこまりました。それではそちらのお席へどうぞ」

彼女を店の端、入り口の対角線にある席へ案内してから、私は厨房に声をかけた。

「丸盆さん、一番テーブルお願いします」

皿洗いをしていた丸盆女史は、私の言葉に振り向くと、はい、と少し間の抜けた返事をし、それから水とおしぼりを顔に乗せてゼリー嬢の席へ向かった。

「あの子かわいいね。よく来るの？」

生クリーム氏が私の方に身を乗り出してそんなことを言い出したので、私は頭の火を消して冷たく釘を刺した。

「いえ、初めて見る方です。言っておきますが、店内でナンパはお断りですよ」

「わあ、ごめんごめん。しないから怒らないで」

生クリーム氏はおどけた声でそう言うと、胸の前で両手を広げた。

「本当でしょうね」

私が見てため息をついた時、かなり控えめにベルが鳴った。扉の方を見ると、角砂糖の男性が顔を覗かせ、それから静かに入ってきた。

「いらつしやいませ。一名様ですか」

「は、はい」

角砂糖氏はおどおどとした様子で答えた。私は先刻の生クリーム氏との会話を思い出し、日陰になっているテーブル席を示して言った。

「それではあちらのお席へどうぞ」

「あ、あのう……ここって煙草吸えますか？」

角砂糖氏はなおも俯き気味で尋ねてきた。勿論彼は先日焼け焦げた角砂糖氏とは別人だ。この辺りのサラリーマンは角砂糖が多いのである。それにしても、角砂糖は煙草を好む傾向でもあるのだろうか。

「申し訳ありません、先日から全面禁煙にしてみました」

「あ、そうでしたか。すみません」

角砂糖氏は頭を下げると、静かに席に腰かけた。丸盆女史がまた水とおしぼりを運んでいく。

「タバコ吸う客、結構いるじゃない。やっぱ喫煙可に戻してよ」

生クリーム氏の言葉を受け、私は角砂糖氏をちらりと見てから言った。

「そうですねえ、やはり完全禁煙ではなく分煙にしようか、と丁度考えていたところです。先程の貴方の言葉でね」

「え、僕なんか言ったっけ」

ぼかんとしている生クリーム氏が続けて何かを言おうとした時、丸盆女史が戻ってきた。

「サイフォンさん、一番さんオーダーです」

女史は会計伝票を破って私の前に置き、呼び鈴を遠慮気味に鳴らしてこちらの様子を窺っている角砂糖氏の元へ小走りで向かっていった。

私は会計伝票に書かれたオーダーを確認した。マキアートに日替わりデザートか。私はまたお湯を沸かしながら、ショーケースからケーキを取り出した。

「そういえば、今日のケーキはパイナップルなんだね。珍しいな」

ケーキを切り分けていると、それを見つめていた生クリーム氏が言った。

「今日の日替わりデザートは『南国気分！ ハワイ風バインレアチーズケーキ』、ことパイナップルのレアチーズケーキ。命名は弟のミルだ。たっぷりと乗せられたパイナップルは、弟のこだわりにより缶詰のものではなく生バインである。

「ミル曰く、『暑いし南国っぽい感じにしたいな！ 南国といえばハワイだよ』とのことだ」

そう答えつつ、切ったケーキを皿に乗せる。調理は丸盆女史がやってくれる時もあるが、基本的には全てミルに任せており、このケーキも弟の作だ。私はあまり料理上手ではないので、もっぱら飲み物担当である。

生クリーム氏は、ハワイねえ、と鼻で笑いながら言った。

「……パイナップルって、ハワイよりフィリピンとかのイメージだけだ」

「いいんですよ、あくまでハワイ『風』なのでね」

ネーミングセンスの微妙さは弟のチャームポイントの一つである。私の返答に生クリーム氏は腑に落ちないといった様子だったが、それ以上何も言わなかった。

「五番さんです」

丸盆女史がそう言ってまた伝票を手渡してきたので、ちらりとそれを見る。オリジナルブレンド、ブラック。私は少し嬉しくなった。エスプレッソもいいが、やはり自分の頭を使うコーヒーマスターの方が淹れがいのあるというものだ。

それはさておき、まずはマキアートだ。私はエスプレッソマシン

のスイッチを入れた。我が喫茶店のエスプレッソマシンは自動ではなく、手動のピストンレバー式だ。私は自身がアンティーク製品なこともあり、こういう物にはこだわる性質なのである。

「へえ、いいねえ。ところで、レアチーズケーキって生クリーム使ってるよね。言ってくれたら喜んで提供したのに。僕は中々高品質だよ。何ていったってグラスフェッド様だからね」

「存じ上げております。しかし、流石にお客様を材料にするのは気が引けますからね。遠慮しておきますよ」

自分を推薦してきた生クリーム氏の提案を丁重に断る。グラスフェッド、というのは、牧草だけで育った牛の乳を使った乳製品に付られる名だ。つまり彼の品質が高いのは事実であるので、実のところ魅力的な話だとは思ったが。

コーヒーマスターをタンパーで押し込む。十分固めにしたら、レバーをいったん上げて蒸らす。それからレバーをゆっくりと下げて抽出する。手間はかかるが、私はこの作業が好きだ。

「そう？ 気が変わったらいつでも言ってよ」

生クリーム氏は少し残念そうに言った。私は食料ではないので、自分を材料にしてもらいたいという気持ちはあまり理解できないのだが、私が自分の頭でコーヒーマスターを淹れたい、というのと同じような感情なのだろうか。

最後にミルクフォーム。近頃は凝ったラテアートを提供している店もあるようだが、うちのマキアートは特に絵のないシンプルなものだ。恥ずかしながら不器用なため、簡単なハートすらままならないのである。

「丸盆さん、これ一番さんね」

「はいはい、お任せください」

近くで待機していた丸盆女史を呼び、彼女の顔にカップとケーキを乗せる。丸盆女史はキラリと銀色を輝かせながら、ゼリー嬢の席へ歩いていった。

「ラテアートの練習したらいいのに」

オリジナルブレンドを淹れるべく頭をセットしている私に、生クリーム氏が茶々を入れてきた。

「ご冗談を。私に絵心がないのはご存じでしょう」

私は苦笑してそれに答え、砂時計をひっくり返した。以前ネコの絵を描いた際、ミルに『墜落したUFO?』と言われ、その場に行った生クリーム氏が頭の中身を零すほど笑っていたことを、私はまだ根に持っている。ちなみに、ミルは決して嫌味など言わないので、本気でそう思った上での発言だろう。弟は根が真面目で正直者の優しい子なのだ。これは断じて兄の鼻真目ではない。

「いいじゃないか、UFOコーヒー」

「お断りいたします」

どうやら、生クリーム氏もあの時のことを覚えていたらしい。砂時計の砂が落ち切ったのを見て、私は努めて冷静に返事をしつつ、頭の火を消した。あまり興奮すると、火が付きゃばなしになってしまう。

カップにコーヒーを注ぐと、すかさず丸盆女史がそれを取って顔に乗せ、角砂糖氏の元へ向かっていった。またもや待ち構えていたらしい。

丸盆女史の背中を見送り、私はふう、と一息ついた。今日はお客も少ないし、しばらくは生クリーム氏の話にでも付き合ってみよう

しよう。

「そういえば、弟くん遅いね。どこまで買い物に行ってるの」

「ケーキに使うチョコレートを専門店まで買いにいらしているのです。あと一時間は返ってこないでしょうね」

「え、ここってコーヒー主体の店でしょ。チョコにまでこだわってるんだ」

生クリーム氏が感心したように言うので、私は苦笑した。

「ミルは凝り性なんです。私はコーヒー以外よく分かりませんので、とても助かっていますよ」

「相変わらずブラコンだなあ。あ、コーヒーおかわり」

「かしこまりました」

前半の言葉は聞こえなかったふりをして、私は生クリーム氏の差し出したカップを受け取った。

それから一時間ほどは平和なものだった。お客も追加オーダーもなく、丸盆女史は裏で舟を漕いでおり、私と生クリーム氏はだらだらと世間話をしていった。

生クリーム氏の二度目のおかわりを用意するべく頭に火を点けようとした時、呼び鈴が鳴った。角砂糖氏のテーブルだ。

「はい、今行きまーす」

丸盆女史が飛び出してきて角砂糖氏の元へ向かっていった、と思うと、きゃあ、と小さな悲鳴が聞こえたので慌ててカウンターから出た。

「どうかしたのかい」

「さ、サイフォンさあ。そこのお客様が」

彼女の指さした先を見ると、そこにはゼリー嬢が凍と背筋を伸ばして座っていた。先刻と決定的に異なる点はいえ、彼女の頭部がすっかり無くなっていて、足元には紫色の液体が広がっていることだろう。

「おいおい、どういうことだ。まさか暑さで溶けちゃったのか」

生クリーム氏が私の後ろから覗き込んできた。私は彼の言葉に首を振った。

「店内はこの通り冷房が効いていますし、一番テーブルは入り口の反対側で、窓も近くにはないから日光は当たりませんよ。そもそも、ゼリーはいくら暑くても溶けたりしないでしょう」

私の話に納得したらしい生クリーム氏が、それもそうか、と言って頷いた。

「まさか事件ですかあ」

丸盆女史はそう言って胸の前で両手を握りしめた。私は頭のフラスコを爪でコンコン、と叩いた。

「もしそうなら厄介ですね。我々の中に犯人がいるということになってしまおう」

そう言うのと、皆が少し緊張したのが分かった。私は丸盆女史に問うた。

「丸盆さん、最後に無事なゼリーさんを見たのはいつですか」

丸盆女史はくるくると顔を回して唸った。頑張って思い出そうとしているらしい。

「ご注文のマキアートとケーキをお持ちしたときには、ちゃんと頭

がありましたよ。ぷるぷるって会釈されましたから」

「なるほど。角砂糖さんは見ておられましたか」

丸盆女史の言葉に頷き、私は角砂糖氏に話を振った。彼は突然話しかけられて驚いたらしく、元々丸めていた背中をさらに丸め、焦ったようにばらばらと顔から砂糖を零しながら言った。

「あ、ぼ、僕は……仕事をしていたので。その、パソコンで、です。ああ、それに、僕は、そ、その方に背を向ける格好で座っていたから……」

「見ていないというわけですね。ありがとうございます」

角砂糖氏の語気は話すうちにどんどん弱まっていき、終いには吐息のような音量になってしまった。見かねた私が助け舟を出してやると、角砂糖氏は大げさに首を振って頷いた。その勢いで彼の顔から砂糖がさらに零れ落ちる。こりやあ掃除が大変だな、と内心少しうんざりしつつ、次は生クリーム氏に話しかけた。

「一応お聞きしますが、生クリームさんはいかがでしょう」

「うん、残念ながら僕がゼリーさんを見たのは、店に入ってきた時間が最後だよ。その後はずっとサイフォンさんと話してたからね。僕の座ってた席からゼリーさんの席は見えないし」

彼の言葉に私は頷いた。ゼリー嬢が座っていた一番テーブルは少し奥まった場所にあるので、生クリーム氏のいた席からは死角になる。

「そうですね。ちなみに私からも見えませんでした。ずっとカウンターの中にいたのは、皆さんもご存知でしょう」

私の主張に皆が頷いた。私は顎に手を当てて首を傾げた。

「しかしこれだけの情報では、まだ犯人は分かりませんね」

「あ、あの」

すると、角砂糖氏が控えめに主張してきたので、私は彼に話を促した。

「どうかしましたか」

「ぜ、ゼリーさんに近づいたのは、そのウエイトレスさんだけでしよう。だから……」

「私が犯人だって言いたいんですかっ」

こわごわと丸盆女史を指さした角砂糖氏に対し、彼女は金属音を立てて語気を荒げた。角砂糖氏はひええ、と言つて縮こまったが、それでも負けじと言り返した。

「だ、だってそうじゃないですかあ」

「まあ、確かにゼリーさんに何かできたのは丸盆ちゃんと、あとサイフォンさんぐらいだよ」

生クリーム氏がいきなり私に矛先を向けてきたので、私は少々面食らった。

「私ですか」

「うん。運んだのは丸盆ちゃんでも、作ったのはサイフォンさんでしょ。僕が見た限り変なものを入れてる様子はなかったけど、もしかしたら予め何かしたかもしれないもんね」

生クリーム氏はそう言つて楽しそうに注ぎ口をバカバカと開閉した。からかい半分といった感じである。

「異物混入なんてしていませんよ。ありがたいことに完食していただいたようなので、証明はできませんが」

私はゼリー嬢のいたテーブルの上を見ながら言った。カップの中心は空だし、皿には食べかす一つ残っていない。綺麗に食べていた

だけたようで何よりである。

「私だって何もしてません」

丸盆女史が甲高い音で抗議してきた。私は慌てて彼女を宥めにかか

る。「まあまあ、落ち着いて下さい丸盆さん。ううむ、そもそもゼリーさんが何によつて溶けてしまったのかが分からないと、犯人を絞り込むのは無理かもしれませんね」

「溶けた理由かあ」

生クリーム氏はそうぼやいたきり黙り込んでしまった。丸盆女史と角砂糖氏も首を捻っている。

私はもう一度ゼリー嬢の注文を思い出した。マキアートに日替わりデザート——パイナップルのレアチーズケーキだ。

「ああ」

そこでふと思いついた可能性に、私は思わず嘆息した。そしてそのまま厨房に向かう。

「あれ、どこ行くのサイフォンさん」

生クリーム氏の声を背中に受けながら、私は冷蔵庫を開けた。そして隅に置かれていた器を手に取る。

フロアに戻ると、三人が訝しげにこちらの様子をうかがっている。私はカウンターに器を置き、人差し指を立てて言った。

「ゼリーは何によつて固められているかご存知ですか？」

「そりゃあゼラチンでしょ」

生クリーム氏が当然だというように答えた。私はさらに続けた。「その通りです。ではゼラチンの成分は？」

すると、生クリーム氏の横で聞いていた丸盆女史が元氣よく手を

挙げた。

「はいはい、コラーゲン！ ですよね」

「ええ、正解です。そしてコラーゲンというのはタンパク質の一つです」

丸盆女史に頷きながら、私はさらに話を進めた。

「そして、次にパイナップル。今日のケーキに使っていたのは生のパイナップルでしたが、これにはある酵素が含まれています」

「こうそ……？」

角砂糖氏はネクタイの根元を握りしめて小声でそう呟き、不思議そうに何度か瞬きした。私は気にせず続けた。

「プロメライン、というものでしてね。これはタンパク質の分解酵素なのです。つまり、ゼリーに合わせると——」

そこで言葉を切ると、私はカウンターに置いた器を手で示した。中には生パイナップルと、溶けてぐちゃぐちゃになった黄色のゼリーが入っている。

「こうなるという訳です」

「それ何？」

生クリーム氏が訝し気に尋ねてきた。

「ふふ、今日の日替わりデザートですが、当初はパイナップルゼリーだったのですよ。でも生パイナップルだと溶けてしまつて駄目でした。缶詰のものを使えば溶けないんですがね、弟が嫌がるものですから、結局ケーキにしたのです」

私は先日の事を思い出し、思い出し笑いでフランスコを震わせながら答えた。

新作のハワイ風ゼリーが出来たから見てよ兄さん、と言いながら

冷蔵庫を開けた時の弟の反応といったら見ものだった。あれえ崩れてるよ、とハンドルをぐるぐる回して空挽きを始めるものだから慌てて制止し、今と同じ話をしてやったのである。そうしたら彼が、生じゃないと南国感がない、と言い張ったために、結局ゼリーからケーキに変更となったのだ。

「大体一時間ぐらいでほとんど溶けて崩れてしまいます。ゼリーさんがいらしたのも丁度一時間でしたね」

「……つまり、事故つてことですか？」

丸盆女史が心なしかほつとした声で言った。疑いが晴れて安心したようだ。

「そういうことです」

私が頷くと、三人はすっかり納得してくれたらしい。注文を受けた時、パイナップルがゼリーを溶かすことを私が指摘していれば良かったのではないか、という追及は受けずに済んだようで安堵した。

「そ、そういうことなら、僕はもう帰つてもいいですよ。その、丁度お会計してもらおうと思つていたところで」

少し早口でそう言い、財布を取り出した角砂糖氏に私は頭を下げた。

「ええ、お騒がせして大変失礼いたしました。丸盆さん、お願いします。僕は掃除をするので」

「あ、僕も次お会計お願いね」

生クリーム氏が口をはさんできた。丸盆女史は、はあい、といつも通りの返事をして角砂糖氏の会計を始めた。私は床に広がったゼリー嬢の残骸と角砂糖氏の欠片を横目で見てため息をつき、それが

ら雑巾を取りにカウンターの方へ戻った。

二人が会計を済ませて帰っていき、掃除も終わって暇になった私は、特に何をするでもなくカウンターでぼうつとしていた。

「兄さん！」

すると突然叩きつけるような音と共に扉が開き、ハンドルを勢いよく回しながらミルが飛び込んできた。

「おかえり。お客様がいるかもしれないから静かに入ってきて下さい。あと、空挽きはするなと前もいっただろう」

「あ、うん、ごめん」

私が窘めると、ミルは我に返ったようでハンドルの回転を止め、店内を見渡して客がいないことを確認した。

「どうしたんだ、そんなに慌てて。怒らないから兄さんに話してみなさい」

「別に僕が何かやらかしたわけじゃないよ。兄さんは僕のことを何だと思ってるのさ」

優しい口調で宥めようとしたのだが、逆効果だったらしく怒られてしまった。トラブルメーカーだと思っっている、という言葉は心の内にしまっておく。

「生クリームさんが店の裏で倒れてるんだよ」

「え？」

そう言われて流石の私も驚いた。少し前まで普通に話していたはずなのだが、一体何があつたのだろうか。

ミルに連れられて店の裏に行くと、確かに生クリーム氏が壁にもたれるようにして倒れていた。手に吸いかけの煙草とポケット灰皿を持つている。私は近寄って注ぎ口を開け、中を覗いてみた。

「ああ、中身が固まってしまっているね。これはもう駄目だな」

そう呟きながら、私は彼が来店した時の言葉を思い出した。どうやら本当に暑さで分離してバターになってしまったらしい。生クリーム氏は冗談のつもりだったと思われるが、虚は実を引くというやつだろうか。

「店内で吸えないから外で吸っていたのか。明日からでも分煙に、と思っただけだけど今日からにするべきだったかな」

「あれ、煙草オツケーにするの？」

私の呟きを聞いて、ミルが不思議そうに首を傾げた。

「ああ。カラメルを定期的に入手する必要ができたからね」

もつとも、常設メニューにするよう勧めてきた本人はバターと化してしまったが。

「それにしても、生クリームさんが店を出てからそんなに時間は経っていないだろうに。やっぱり今年の夏は規格外の暑さだな」

「うん、僕の頭もすごい熱いよ。ほらほら」

生クリーム氏を眺めてぼやいた私に弟が頭を押し付けてきたので、私は慌てて後ずさりした。

「こら、火傷させる気か。冷めるまで顔を近づけないでくれ」

「えー、兄さんだつていつも頭に火点けてるじゃん」

ミルは楽しそうにそんなことを言っている。それとこれとは別だ。それに今はじやれて遊んでいる場合ではない。

「そんなことより生クリームさんだが」

「そうだった。どうするの兄さん」

ミルに尋ねられ、私はしばし考えてから口を開いた。

「グラスフェッドバターといえばバターコーヒーだね。カラメルコーヒーと合わせて不定期メニューにしようか」

客は材料にしない主義だが、死んだのであればもう客ではない。

グラスフェッドバターは角砂糖よりさらに希少なのが残念だが、我ながら中々良い案だ。生クリーム氏も天国でさぞかし喜んでくれることだろう。

「メニュー名は、マスターの気まぐれコーヒー、だね」

ミルは自信ありげな声でそう言った。ネーミングセンスは相変わらずだが、勿論採用である。

「ああ。そうと決まればさっそく試作だ」

私の言葉を聞いてミルは嬉しそうにハンドルを鳴らした。それから生クリーム氏の首根っこを掴み、浮かれ足で引き摺っていった弟の後を追って、私も店に戻った。

ミスフィリア 第22号

発行年月 2020年11月
発行元 埼玉大学推理小説研究会

ホームページ URL
<http://mcs.xrea.jp/>

メールアドレス
mcs.postbox@gmail.com

Twitter
<https://twitter.com/McsPostbox>

無断印刷、転載厳禁



MysPhilia Vol.22